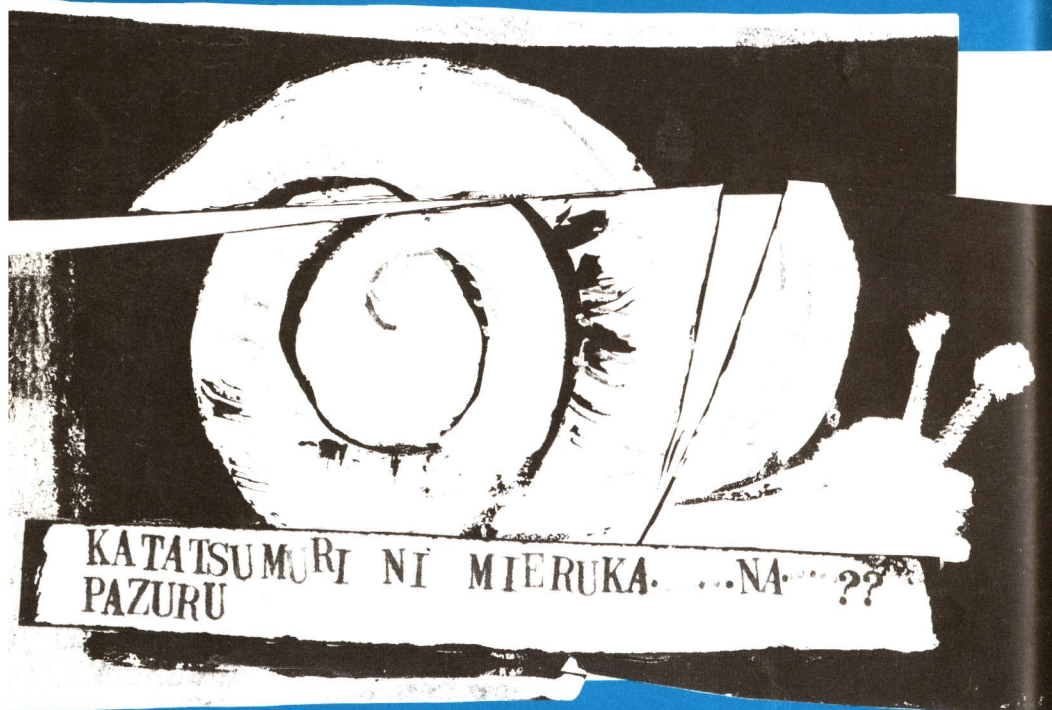


新しい家庭科

uke
ウ イ

支え合いつつ ひとり立つ



1984 10

野の花をたずねて
つるりんどう



雨あがりのスキー場跡は、小鳥と虫の羽音がして、白いゲレンデの賑わいが、ここで本当にあったのかと信じられぬ思いでした。深い雪の底でじつと春を待っている草をただの一度も想像したことはなく、汗を流し、スピードに興じていたのです。

今見る斜面は、ススキが人の背丈程も伸び、小さな草がそれぞれに花をつけ、種を飛ばしひと夏を懸命に生きていました。

ふとススキの根もとに細い茎をからませて咲くツルりんどうを見つけました。花の色はごく淡い藍紫色でほとんど目立ちませんが、カサコソと林に落葉が散り敷き、秋の虫が草陰に羽をすり合わせるころ、今までひっそりとその存在をかくしていたこの草は、美しい紅紫色のつややかな実を花冠の中からせり出すようにあらわして、林中の視線を一身に集めてしまうのです。

夫との最後の旅になった五色温泉で描いたこの花。きつと精一杯秋の野に美しい風情を添えていることでしょう。

(大室君子)

巻 頭 言

生きもののたちの宇宙

綿貫 礼子

地球は生命の棲み家である。自然界には二百万種もの生きものたちが、あみの目のようなからみの中で棲み分かちつつ暮らしている。そこには数十億年ものながい生命の歴史がきざまれており、当然ながらヒトの歴史もそのなかに含まれる。

それなのに、身勝手にも地球の支配者になりすまして「人間中心」の社会が築かれてきた。人間の手にした科学や技術はやみくもに使われ、その歯どめも持たずにエコロジカルな混沌を深めているのが、今日の文明の特徴である。

人間同士の間の行為として最もいとわしいものの一つに強者から弱者への強姦¹⁷がある。一方で人間は自然に対してもレイプを重ねてきているのである。このことについて、かつてR・カーソンは、こう警鐘を鳴らしたのだが、20年後の今日も含蓄のあるひびきを持つ。

「自然のバランスは、生物相互間の複雑で精密でしかも極度に体系化された関係である。それを無視するのは、崖ふちに立って重力の法則はないとわめくに等しい。自然のバランスは不変の状況ではない。それは流動的でたえず調整が行われている状態なのだ。人間もまたこのバランスの一部をなしている。」

人間自身の行為の結果として自然の平衡が保てなく限界を超えると、生命の棲み家である地球はやがて死相を呈することとなろう、とカーソンは予言したのである。

(環境問題研究者)



支え合いつつ ひとり立つ

〈巻頭言〉

生きものたちの宇宙……

綿貫 礼子

1

※支え合いつつ ひとり立つ※

「コミュニケーションと自立」……しま・ようこ

4

「みんなの家」と「歩みの会」……寄村 仁子

9

地域の人に学び、共に生きる学習……小島 靖子

14

子どもたちに支えられて……村田 尚子

20

自立をめぐる対話……河東田誠子、河東田博

24

今、私はここに……立川 叶子

29

※新しい家庭科を創るために※

小学校では おいしいものを作ろう……中里 清志

34

中学校では 理論と実践の間 その1……榎田 真澄

40

高等学校では NHK「NOG」と「私の家庭科」……福島 澄香

46

※完※

学習の主人公たち

初めての調理実習

……江戸川区立東小松川小学校五年四組の子どもたち

58

家庭一般を学んで……兵庫県立西宮今津高等学校生徒

60

私たちにとって保育の授業とは……高橋きよみ、花輪智恵

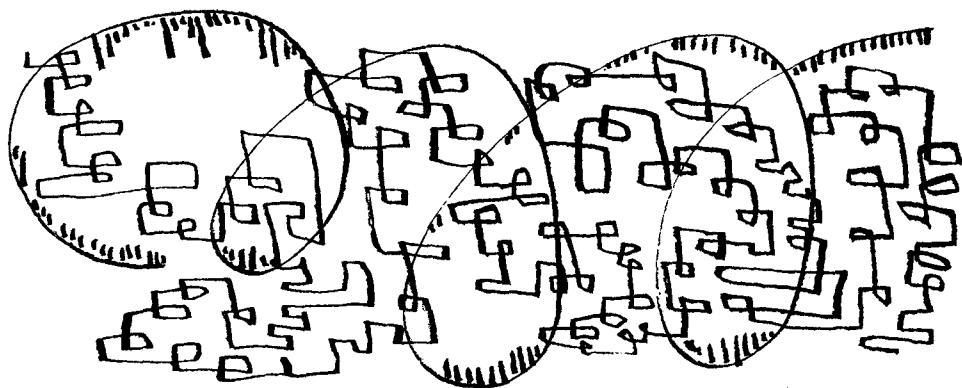
62

今、しなくちゃいけないこと……鈴木みち子

64

子どもたちと自然……鈴木まき子

66



連載

『サン』の海を守れ』の声 石垣島に!.....西川 裕人 69
 『人間の大地』を読んで.....掛布 禮子 71
 役割分業のない社会.....平井 電太 73

野の花をたずねて.....大室 君子

視点.....長谷川 孝

counselingの応用
 —現場から—.....児玉すみ子

露通信.....武田 秀夫

ふじたけんじの
 生活マンガ.....藤田 健次

女の人生・男の人生.....増本 敏子

萬葉の男たち・女たち.....井田 邦弘

風に向かって.....さねと女性障害者は強し? 栗原 実抄

男女平等教育
 すすめてますか.....中嶋 里美

シネマ.....クレイストーク.....遠藤 由紀

ほん.....『主夫と生活』.....小田亜佐子

We's report.....こんごちは! 男女で学ぶ家庭科.....石川 由紀

○波.....○ひと 藤田健次さん 50

○波.....○ひと 藤田健次さん 50

○波.....○ひと 藤田健次さん 50

○波.....○ひと 藤田健次さん 50

○波.....○ひと 藤田健次さん 50

○波.....○ひと 藤田健次さん 50

○波.....○ひと 藤田健次さん 50

○波.....○ひと 藤田健次さん 50

○波.....○ひと 藤田健次さん 50

○波.....○ひと 藤田健次さん 50

○波.....○ひと 藤田健次さん 50

○“We.” EDITOR'S NOTE 96 ○あんでな 94 ○十字路 92
 ○この号を読むために 84 ○情報 63

本文イラスト 井田裕子／加藤由美子／中野敬子／野中浩一／半田たつ子
 表紙デザイン 加藤由美子
 目次イラスト 馬場洋子

● 支え合いつつ ひとり立つ ●

「コミュニケーション」と自立

しま・ようこ



わたしたちをとりまく風土と自立

「自立」とは、どのような生き方を、どのように生きつつある過程をさすのだろうか。真の自立に向けて、今、わたしたちはどのような歩みをしつつあるのだろうか。自立という古くて新しいテーマは、人さまざまにその枠組を描くことがで

きる。若い人たちの中には、一般論としてではなく、自立の問題を「わたしの生き方」の軸に据えて人生設計をしようとする人もあり、他方、自立と言っただけで舌を噛みそうだとわずらわしがる人もいる。後者の若者たちは真の自立をめぐって語り合うことなど何の魅力もないと言い、「自立を意識しなかった時が真の自立」だと突き放す。この突き放された結論は、おそろく射ている。こんなにすっきりした結論を無条件で受け容れることのできる社会は、ほんとうに人間を大切にする、民主主義が肌身に滲みた社会である。お互の等身大の生き方を認めて支え合える社会、この特集号のテーマである「支え合いつつひとり立つ」ことがすでに平凡な生き方としてこなされた社会であろう。

わたしたちの日常生活の場に目を移してみるとどうだろうか。民主的に仕組まれているはずの家庭や職場や地域社会で、そのしくみ（構造）はすっかり骨抜きにされて、個人が生きる原点としての自立の芽にこやしを与えないまま、皮相な助け合いの双葉を太らせてはいしないか。これは昔から受け容れられてきた日本的な「和の精神」の否定面（その肯定

面が豊かに開かれるために、舌を噛みそうでも、「自立」が問われねばならないのだが、だとわたしは思う。さまざまな意図を持って矢つぎ早に送られてくる情報に翻弄されて、あたりまえの生き方が見えにくくなりつつある現代では、自立は自分観を方向づける通過儀礼としても、一度は意識的に取り組まねばならない課題となった。とりわけ「甘えの構造」に支えられた風土の中では、「自立にこだわるよりもお互いの助け合いがより大切ではないか」という反論にしばしば出会う。この声は、自立の意味の日本的曲解を象徴している。自立の問題をめぐる受容派も拒否派も、この点について根本から問い直す作業を共有した後に、「自立を意識しなくなったときが真の自立」という結論を受け容れることができる。具体的な点検作業なしにこの結論に同調してしまうことは、自立という名のキセルを認めてしまうことになる。キセルの空洞領域で自分流の生き方を模索し、あがいているのが自立の実像であろう。そのことが女たちには見えやすく、男たちには見えにくい。

生存権としての経済的自立

近年、女性の生き方が社会問題の一つとして浮き彫りにされる過程で、「女性の自立」がマスコミによってとりあげられ、精神的自立と経済的自立を二本の柱とするパターン化し

た自立論が浸透した。こうした二分法で自立をとらえる以前に、性別にかかわりなく経済的自立は人間としての生存権の問題であることを確認しないと、「ひとり立つ」ことは社会性の低いテーマに終わってしまう。この点が十分確認されてもなお男性中心社会の長い歴史の中で、個人の自立を基盤に据えるよりも自立への欲求を自己規制してしまうことによって「和」を保つ習性を身につけてきた女たちの自立は、精神的自立と経済的自立の二本柱では解ききれない。自立の深まりに向かって意識的に個人史が歩み始められないところでは、「相互の助け合い」は過保護や過干渉、個人の内部へ土足で踏み込んでも気づかないおせっかいとさえなる。生活イメージとしてこのことが体得されると、たとえば、親が子の成長像として期待するものは、「他人に迷惑をかけない子ども」（母親を対象としたアンケート調査では、この選択肢にうんざりさせられるほど〇印が付される）から「積極的な市民感覚を身につけた子ども」に変わるだろう。そんな選択肢が用意されていないことを、親たちは調査者に異議申し立てするようになるかもしれない。

人間としての自立の問題は、経済的自立が何よりも生存の本質であり、それ故に精神的・経済的という並列では真の自立は見えてこない。ただし注意したいのは、経済的自立が困難な弱い立場に置かれた人びと（とりわけ障害を持つ人や老

人など)は、真の自立への道が閉ざされているという短絡した見方から解放されることである。経済的自立をまず生存権の原点に据えるのは、健康で社会的労働が可能なのに、主婦という階層をひとつの文化体系(生き方の自由選択)として無条件に受け容れ、その枠内で「精神的に自立していく努力をすればいいではないか」というひらき直りを肯定する風潮への挑戦としてなのである。女性の自立がふくむ社会的困難点を洗い直さないと、男性の自立もまた容易な自己肯定に終わってしまう。性区別を基本に置いて、男女が相互に役割を尊重するという常識的にはきわめて穏当な自立への道は、何の発展にもならないことを駒尺喜美さんの『魔女の論理』『魔女の審判』は語ってくれている。

「自立」という社会性の獲得とコミュニケーション

わたしがわたしとして等身大に生きる個人の自由選択の自立は、そのまま社会構造を支え、また自由選択のしかた自体が社会のシステムや習慣に依存していることに気づくとき、自立の問題はスケールの大きい社会性を内に含みはじめる。主婦として居心地のいい自立論と、社会的仕事を持った女性のラディカルな自立論とが、互に排斥し合ってそれぞれの立場を合理化するしたら、女性の自立をまるごとなくすしにする大きな手に利用されるだけである。今、わたしたちに

必要なのは、まだ十分に解き明かせないが「わたし流の自立論」をかかえて男性中心社会に挑む女ゲリラ(ゲリラまがい、いい)たちが素手で出会い、コミュニケーションを分かち合い、真に新しく身にしみる自立が体得できる場をつくることであろう。これまでにもたくさんの拠点で実践され、それぞれに成果をあげつつあるけれども、まだまだ真に新しく身にしみる自立に向けてのコミュニケーションは十分とは言えない。

コミュニケーションは人間が二人以上出会うところではどこにでも起こり、お互いを変え啓発するもつとも基本的な手段である。物と物の間には作用はあるけれどもコミュニケーションは生じない。つまり、コミュニケーションは、単に對話によって意思疎通し合う見える形だけでなく、共通の場に出会って無意識のうちに影響し合うとき、また自分自身との対話の中にも生きている、人間に独自の営みである。わたしがわたしとして「ひとり立つ」ためにも、「支え合いつつ」立ち方の軌道修正をしていく上でも、これ以上すぐれた方法をわたしたちは持ち合わせていない。コミュニケーションが一方的な説得や宣伝よりすぐれて人間を動かすのは、「ひとり立つ」と「支え合う」とことの同時進行がそこから始まるからである。

社会管理のしくみの強化が、顔を合わせて伝え合う関係を

稀薄にしてしまったことに気づいて以来、個人を復権させる心理学を背景に持ったコミュニケーションの技術に新たな光があてられた。「交流分析」や、「親業」で紹介されて以来知られるようになった「わたしメッセージ」の訓練など、日常の人間関係を円滑にするための援助として活用されている。しかしこれらの技術の役立て方には、「自立」を深める自分の見通しを持つておかないと、あれこれ試してみなければもううまくいかず、ほんの少ししかじつて離れていくという結果になるかもしれない。コミュニケーションの技術を喰い荒らしていると、相手の心のいわば梢のざわめきのような微妙なゆれ動きや、もう一步耳を傾けることによって開けてくる理解の深さを犠牲にしてしまう。「交流分析」や「親業」などは、アメリカの文化的風土から発想された実用的な人生への態度に貫かれている。その手ざわりまで深く理解に取り込んで学ぼうとするとき、わたしたち流に応用されて技術は生き、日本的コミュニケーションの長所もまた新たに生かすことができる。

“日常のおしゃべり”を卒業して開けるもの

コミュニケーションをとおしてより深い自立への個人史を歩もうとするとき、日常のおしゃべりのレベルを一度卒業し直すことから始めてはどうだろうか。具体的に実用的なアメ

リカ文化に比べてわたしたちの風土には、抽象的で形式的な思考を好む特色がある。学校教育を受ける期間が長くなるにつれて（とりわけ受験制度がその中心にあぐらをかいてしまっている現実では）、この特色は、観念的な知識をわたしたちの頭にたたき込み、これと自分の等身大の自立した暮らしとを切り離れたまま許してしまう傾向を生んだ。日常のおしゃべりは、この構図に深入りしないで共感できる範囲に限られる。日常のおしゃべりのレベルを一度卒業し直してみても言うのは、それが頭の中の知識と自立した暮らしの感覚との間のみぞをうめる一つのきっかけにはしなないかと思うからである。九年以上の（多くは十二年または十六年もの）学校教育を受けた女性が、「家庭に入ってしまった」と、抽象的な話題は苦手になります」と、平然と言えるのはどうしてだろうか。教育を受けてきた日々の積み重ねは、どこへ姿を消してしまったのだろうか？ わたしたちの風土が真の実用を大切にしないのは、“ひとり立つ”個人を軽く見ているからではないのか？ ここで抽象的というのは、ムズカシイことを意味している。ムズカシイのは必ずしも知的に理解困難というわけではなく、常識として肯定され社会の風潮に順応しやすいこと以外の、異質な見方や考え方を暗に指している。より深い自立に向かうコミュニケーションを阻んでいるのは、頭の中の多量な知識と生活感覚とのずれ、この二つの

「橋のない川」をつつみ込むなしくずしの順応感なのではないだろうか。

このような精神構造は、十分に意思を伝え合おうとしないまま同調するコミュニケーションの方式まで「日本の風土に根ざすもの」とした受け入れてしまうかもしれない。日常のおしゃべりへの安住に自分で卒業証書突きつけた後には、「支え合い一つひとり立てる」社会を創っていく方略としてのコミュニケーションが新たな顔を見せ、過去が自分の中で新しくなる。

支え合いの深み

最後に私事になってしまいが、今、「支え合い一つひとり立つ」ことのむずかしさを苦汁に満ちて噛みしめねばならない体験に直面している。経済的に自立がむずかしく、それ故に精神的にもひとり立つことが困難であった（と思っていた）妹を数日前に、ほんとうにあっけなく再び帰れない土地へ送ってしまった。弱者としての苦しみの奥の心のひだを刻んだ文字がノートに残されていた。現代医学ではとらえきれない病の原因と、そこからくもの巣状に伸びてからみ合う生への不安、自立をめぐる葛藤、見えない未来。生に打たれたピリオドによってしかそのなまなましさを深く理解できなかったわたし自身の卑小さ。妹は、死によって「自立できないおと

な」という汚名を返上し、「どんな弱者も自立しつつある過程を歩もうとしていた」ことを証してくれた。お互いに姉妹として生きながらも一步一步近づけなかったことへの悔いは、悲しみの底について、人はみな「ひとり立てる」ことへの信頼として支え合いの深みを照らしはじめている。

（大東文化大学）

アンケートにご協力ありがとうございます！

七月号で、Weをすすめたいと思われる方のご紹介と、あわせてWeへのご注文、ご批判をお願いしたところ、八一名の方がご協力下さいました。Weへのご注文、ご批判にも考えさせられる内容が多く、あわせて厚くお礼申し上げます。ご紹介下さった方は三七九名にも及びますが、どなたからのご紹介というお名前を添えたお便りとともに見本誌をお送りし、お仲間におさそいしました。ワンクッションおくからでしょうか。おさそいした方が直ちに読者になって下さるわけでもないですが、こういう雑誌があるということのご認識は得られたと思います。

Weへのご注文は相変わらず、正反対のものが提起されていて、幅広い読者層を持つ雑誌の難しさを思いますが、じつくりと続けて読んでいただく中で、やがて噛み合ってくるものが見えてくるのではないか、と思います。今後とも、どうぞよろしく、Weが創るWeにするために、あなたのお力添えをお願いします。

（半田）

● 支え合いつつ ひとり立つ ●

「みんなの家」と「歩みの会」

寄村 仁子



たこのこと。ある雑誌でこのことを読んで来たくなったとのこと。

ちようどその日から、小学五年生のたかちゃん（自閉症といわれている）を預かって、仲間の合宿が始まることになっていた。身体の弱いお母さんが一息ついて元気を回復するための合宿である。たかちゃんは少しもじつとしていないで動きまわるので、ようすのわからない人が相手をすると一日でへばってしまふ。それで二、三人で交代しながらつきあうことにしていた。

夜着くというたかちゃんを待って、夕食をしていたとき「できればしばらく滞在したいのですが……」と遠慮がちに言うNさんに、私は

天津の「みんなの家」には、一昨日から遠来のお客様が逗留している。沖縄からはるばるおいでになったNさんは、し

かし、すでもうお客様ではなくなっている。

二、三日留守をしていた私が帰ってみると、「みんなの家」のホールで見知らぬ人が横になっている。

きけば、昨夜はすぐ近くまで来て、力尽きて野宿をしてい

とつきあってみて下さる？」ときいた。Nさんは即座になんてやらうことにした。

たかちゃんは、お父さんとお母さんに連れられてやって来た。夜だったから余計に自分一人が置いてゆかれる気配を感じたのだろう。お父さんの首にしがみついて離れなかった。

Nさんはそんなかちゃんのを、やさしい顔をしてじっと見ていた。二十分ほどして行ってみたら、たかちゃんはNさんに負われて外へ行くとせがんでいた。Nさんは言葉のないかちゃんの要求を身体で感じ取って、ちゃんと言葉で返事していた。私は安心してたかちゃんを頼むことにした。「みんなの家」でも、こんなふうに障害をもつ子どもと大人が出会えることはめずらしい。

たいていは、どこかこわごとお互いに探りあいながらだんだんに慣れてゆくか、一方的に大人のペースでつきあっているうちに、子どもの自己主張（時にはかみついたり、ひっかいたり）にあって、少しずつ大人が変わってゆくようなことが多い。

十年前に、十組の親子と六人のボランティアとで始まった歩みの会が「みんなの家」を持つと言いはじめたのは二ヶ月も経たない頃だった。

「誰にも気がねなく寄れる場所が欲しい」というのがその頃のお母さんたちの切実な願いだった。知恵遅れ、自閉症、脳性マヒなど、心身に障害を持つ子どもを抱えたお母さんたちの最初につかる壁は、まわりにいる人たちの目である。それは同時に、障害を負う子を受け止めかねている自分自身でもある。

だから同じ立場にあるものどうしの中にとると、このうえなく安心する。絶え間なく緊張し続けている親たちにとって同じように苦しんでいる者たちがはたの目を気にせずに集まれる場がまずは必要だったのである。

草ぼうぼうの畑を借りて、建設現場用の仮設プレハブを建てて、「みんなの家」と名付けさっそく通い始めた。

一銭のお金もなく、そんな乱暴なことができたのも、ともかくそれが必要だと誰もが思っていたからだ。

引き受けてくれる保育園も幼稚園もなく、終日家にこもっている子にも親にもストレスがいっぱいたまっていた。

週二日、遊びのグループをつくって集まり始めたのがすぐ週五日になった。（幼児グループ）

親たちが中心になって運営をし、ボランティアが手伝う形で進められた、この幼児グループは六年間続いた。多いときは総勢三十名にもなり、初期の歩みの会のとくくみの中では中心的な位置を占めていて、この六年間に私たちが学んだことは多い。

現在中学二年生（養護学校）になるゆう子ちゃんはまだ言葉が出ない。彼女は四歳の頃からお母さんと一緒に幼児グループに通った、一期生である。お母さん（時田さん）はとても熱心で、グループの仲間から一目置かれていた。

その時田さんが、ゆう子ちゃんがまだ五歳にならない頃か

ら、トイレのトレーニングをはじめた。

まだ身体の機能が十分に発育していなかったゆう子ちゃん
は十五分おきぐらいにおしっこをもらした。お母さんはじつ
と時間をはかっている、正確にトイレに連れて行った。どん
なに正確に連れて行ってもやはりもらしてしまふ。

見ているとまだ無理なようだ。それに夜も眠っているのを
起こして連れてゆくというのを聞いて、とうとう黙ってい
られなくなった。

「ねえ、いくらなんでも早すぎるんじゃない？」

「そんなにいっても、こんな子だから身につくまでに時間
がかかると思うんよ。せめて学校に行くまでには自分でトイレ
に行けるようにしてあげたいと思うから」

「気持はわかるけど、ゆう子ちゃんはまだ膀胱におしっこを
留めることができないのよ。だから少しずつチビチビともらす
じやろう。もう少し膀胱に留められるようにならんとトレ
ーニングの効果が上らんだだけじゃなく、心が不安定になるん
じゃない？」

「そうかも知れんけどね、私の命だっていつまであるかわ
らんし、できるときにしかんと」

時田さんは少し感情的になったようだ。

「でも親の都合もあるだろうけど、十五分おきにトイレに連
れて行かれる方の身にもなって、いくらゆう子ちゃんが何も

していいように見えても、やっぱりゆう子ちゃんなりの世
界があると思うんよ。それを十五分おきに破られて、楽しい
ことをさせてくれるならまだしも、行ってもなんのことやら
わからんトイレにおさえつけられるのはたまらんよ。

もう少し大きくなって、せめて一時間おきぐらいでいいよ
うになってから始めた方がいいんじゃないの、十五分おきに
起こされたりしたら眠る間もないじゃない」

「あんななか障害児を産んだことがないけんそんなゆうち
ようなことが言えるんよ。私たちはやっぱり他人に預けん
ならんこともあるじやろうと思うと、せめてトイレだけは自分
で行けるようにしてあげるんがこの子のためじやち思う」

「子どものためっていうけど、はたしてそうかなあ……………」

「……………」

いつもと違った調子でやりあっている時田さんと私のやり
とりを他の仲間たちは黙って聞いていた。

いつも自分が頑張って育てないと、誰もあてにできんと言
っている時田さんの考えの中に、いつか他人に託す時のこと
がすでにあるなんて、その時はじめて知って、私はズキンと
した。時田さんもまた何か感じているようだった。

ゆう子ちゃんのトイレのトレーニングはあらためて六歳ご
ろから始められ、およそ三年間で自分でトイレにゆけるよう

になった。

またある時、ボランテアだけの集まりの時、幼児グループを手伝っていた裕子さんが言った。

「やっぱり私たちはお母さんたちとは違うのね。こっちは仲間だと思うから気軽に口をきいたり、言いにくいことも言ったりするけど、お母さんたちは世話になるんだからってとても遠慮しているみたい」

「そうねえ、私も感じる。そんなだから子どものことで言いたいなあと思うことでも言えなくなるときがあるし……」

「共に生きる」という遠大な理想をかがけているわけだから、当然一時期だけのつきあいじゃないよね。それに今は子どもたちが小さいから、私たちはいつの間にか親子の単位でしか見られなくなってる。それだけお母さんたちの子どもに對しての責任感が強いのかなあ……。でも果たしてこのままでもいいのかなあ……」

「いずれみんな大人になるんだし、今みたいにかわいいという存在ではなくなるでしょう。小さいうちから付き合っれば、大人になってもなんてことないけど、大人になってから急に出会ったら、やっぱりびっくりする人の方が多いですよ。そのために近寄らなくなる人も多いだろうと思う。早くから、子どもは子どもとしているんならに出会っていた方が

いいよね、親とは別に」

「やっぱり親と子は別の人格だから、お母さんたちにもそのところがわかってもらえるといいね」

「うん、だけとお母さんたちには今までいろんなことがあつて、やっぱり親が守ってやるしかないと思うっているんだろうと思う。もしお母さんたちが私たちに安心して託すとしたら、言いたいことを言いあつてもこわれない関係になった時だと思う」

「それでもね、ある程度意識を変えてゆく努力もいると思う。たとえば今、正会員の中が親会員とボランテア会員に別れているでしょう。せっかく、正会員の資格は行動を共にできる者としたんだから、親子会員、ボランテアなんて呼び方をやめてみたらどうだろう。会費の額は変わらないんだから……」

「それ、言うのは簡単だけど、大変よ。お母さんたちはいわば逃げられないところでやっているから、少々のことがあつてもいっしょにやり続けれると思うけど、問題は私たちよ。今は共に生きるって言ってるけど、そのうちに居なくなるんじゃないかっていう不安があるのよ、お母さんたちに。口に出してそういう人もいるくらいお母さんたちは心細いわけ」

「うーん、そう言われると、私たちの考えが甘いというしかないけど、でもお母さんたちと同じ気持になれって言われて

も無理だしねえ」

日常的な活動と、こんなやりとりの中で、心身障害の問題が自分自身にも無関係でなくなつてゆくにつれ、私たちも家族が直面する問題にともなふつかつてゆくことになつていった。

はじまつて三年目の総会で、親とボランティアの差はなくされ、お互いに対等の正会員ということになった。

現在、正会員一七名、賛助会員三五〇名余り、いつの間にか人数が増え、会員の住む地域もずいぶん広がった。

「みんなの家」も仮設プレハブから本建築に変わり、昨年の春には作業棟もできた。素朴な生産の場としての木工・陶芸のとりくみも始まつた。外からだけみれば一区切りついたといえるのだろう。

だけど「歩みの会」の目的「心身に障害を負う人を中心に会員どうしが支え合つて、みんなの成長と幸せのために活動してゆく」会則二条、がどの程度に達せられたのか。いや目的からはずれずにここまで来れたのかどうか自信はない。

天津の「みんなの家」について大分市にできた「大分みんなの家」も、始まつてから五年間紆余曲折しながら続いている。

それはもう今にもバラバラになるんじゃないかと思うようなぶつかりあいもあった。それでもなんとか持ちこたえられ

たのは、『どんなにぶつかりあつても、一緒に居ることを止めない、つながりを切らないでいられるようになりたい』という共通の願いがあつたからだろう。

今も出入り自由の二つの「みんなの家」には絶えることなく人がおとずれている。

この十年、まがりなりに活動が続いてきた理由として、「歩みの会」のつながりは一人一人が誰に言われたのでもなく、自分の意志で参加しているということがある。

これからも一人一人が自分を大切にしながら、他の仲間のペースを尊重してやつてゆくことができれば、形はどうであれやり続けられるのではないだろうか。

今年も「みんなの家」の夏はにぎわいそうだ。

(よりむら　とよこ・歩みの会代表)

● 支え合いつつ ひとり立つ ●

地域の人に学び、

共に生きる学習

—— 養護学校での実践から ——

小島 靖子



級というように振り分けられている。

この振り分けで「できない子」を排除した場で、さらに「できる子、できない子」が問題とされ、テストがくり返され、実数化され、子どもたちはその点数が一点でも上がることにのみ価値を求めてがんばっている。

テストの点数を上げることに大きく価値をおくような教育がエスカレートして何年になるのだろう。そんな中で、昨年二月初め、横浜市の公園や地下街で「日雇い労働者」や「浮浪者」が中学生を中心としたグループの少年たちに襲われるという事件が起こり、私たちは大きなショックを受けた。事件を起こした少年たちが、特別な少年だったとはどうしても思えない。むしろ、かなり多くの少年たちが同じような状況におかれているように思う。この少年たちを含め、同じようなまいをしている少年たちは、これまでの成長の過程で、学びそこねているものがあまりにも多くあるのではないだろうか、少なくとも、人間が共同生活をしていく上で、最も必要なやさしさや悲しみや人々を思うという基本的なものが学べず弱い者を疎外していくことの中に快楽を求めてきたとしか思えない。これ

一、はじめに

大学共通一次試験が始まった年、多くの反対の声の中で、養護学校義務化が実施された。そして、今年が六年目。「子どもの幸せのために『能力』にみあった教育の場」ということで、六歳の子どもの就学先が養護学校・特殊学級・普通学

は、今の普通の学校教育の状況そのものといえるのではないだろうか。

中学校では（この少年たちの学校も）、高校受験に向け、「主要五科目」を中心にテストをし、テストに現れる力をその子の「能力」として序列をつけることが何の疑いもなくやられている。そして子どもたちも親たちも、みんな一つの方向を向き、少しでもよい点数をとること、少しでも順位を上げることに向かって進んでいる。そんな中で、子どもたちは、ものに感動したり、自分をみつめたり、友人を思ったりするようなことは、全くといってよいほどなくなってしまう。これは、人間の教育の場といえるのであろうか。

二、地域の人に学ぶ「ものづくり」を

私は、東京の西のはずれの八王子にある都立養護学校に勤めて十八年目になる。

私たちは、十数年前、「精神薄弱児は、抽象化と一般化の能力が劣っているので、知的教科をいくら教えても身につかないし、彼ら自身も喜ばない」という風潮の中で、意図的に教科教育に取り組んだ。「抽象化と一般化」の能力が劣っているからこそ、きちんと教科教育をしなくてはならないし、子どもたちにも知的なことを学ぶ楽しさを体験させたいと考えた。また、このころ特殊教育は生活単元学習、普通教育は

教科教育というように、教育内容が分断されていることが問題だとも考えた。

私たちは、この実践の中から、単に教科教育の導入だけでなく、教科教育そのものを変えるに至った。学ぶ子どもの側に立って、教科の内容と方法を考えるという当然すぎる原則に立たざるを得なかった。そして教科から原教科へと、より根源に向かって実践を進めた。それは、教科の既成のイメージを無限に変え、教科らしくない教科をつくりだす道でもあった。

しかし、この実践の中で、「できるようにすること」の追求が、子どもたちの側に分断をもちこみ、私たち自身も知らず知らずのうちに「できる—できない」という観点から子どもたちをみてしまうという、「教科教育の限界性」がみえてきた。同時に、私たちと子どもたちとの関係が、「教える側」と「子ども」という関係にとどまってしまう疑問も出てきた。子どもにとって学校は、子ども時代を過ごす生活の場であり、子どもたちと共に、私たちが自分の感じ方を主軸に、共同して何かを行い、あるひとつのことを体験していく場なのではないかと考えるようになった。

そう考えるようになったとき、教育とは、単に教科教育だけでなく、子どもや私たちをとりまく、さまざまな自然や、さまざまな人々と出会うことであり、その中で自分たちの感

性をよびまし、自然や社会に働きかけていくことではないかと考えるようになった。閉ざされがちな生活を強いられる養護学校の子どもたちにとって、この現実の社会や自然との出会いは極めて重要だと思った。いま私たちは、自分たちのまわりに目を向け、民衆のつくりだした生活文化や地域文化をとらえる「ものづくり」や、現実の社会や自然の中に課題を発見し、そこに働きかけていくような「学習」の取り組みを続けている。

農家のおじさんと一緒に麦をつくり、つくった麦を石臼で粉にして、おばさんと一緒にうどんづくりをしたり、大豆の収穫をさせてもらってのみそづくり、長いキャリアを持つあめ職人のおじさんと一緒にあめづくり等、地域の人から学ぶさまざまな「ものづくり」をつづけてきている。

「ものづくり」では、「できる—できない」が問題でなく、そこに出会う子どもと大人がそれぞれ、もの、こと、ひとにかかわり、どうつくり、どう感じ、どう考えていくかが問題となってくる。このものづくりは、子どもも、私たち教師も全く同じ立場の学ぶ側であり、子どもたちと同じように、感動したり、苦勞したりしながら共に学ぶことが多い。

三、みそづくり—農家のおばさんに学んで—

私たちが、何のこだわりもなくスーパーなどで買って食べ

ているみそ・うどん・しょうゆなどは、一昔前までは多くの家で自分たちで手づくりしていた。子どもたちもこの労働の一部になっていたのであろう。みそは、大豆をじっくり煮て家中総出でつくったり、麦を粉にすることの大変さに出会ったりしていたはずだ。ところが、今や私たち職員の中でもみそをつくったことや、粉をひいたことのある者は数少なくなってしまう。つくり出すことの喜びや大変さなど知ることが少なくなってしまった。日々の生活に欠かせない食べものが、原料から自分たちの手でつくり出せたら、作ることの感動も食べることの感動も大きいはずだとの思いで、毎日の食生活に密着している「みそづくり」をやることにした。

(一) 地域に『みそづくりのおばさん』を見つけた！

学校で借りた畑を耕して大豆の栽培をした。からすに食われ、何回も種をまきなおした。種子を密集してまくことなど近くのおじさんに学んだ。夏休み中、U君が水まきをやり通した。しかし、大豆のできればえはかんばしくなく、みそをつくるほど収穫できそうになかった。大豆をゆずってもらうことを考えねばならなかった。

幸い八王子の市内には、何軒かの農家の人たちが畑をつくり続けている。大豆畑をもっている人たちをあちこちさがし求め、学校からさして遠くない場所に、二千坪ほどの畑の約半分に大豆を栽培しているところを見つけたのである。期待

と不安を胸にその家を訪ねた。いかにも農作業をしているらしい、ガッシリしたおばさんの「そうなんですよ。手間がかかるけど味がちがうもんでね、自分で豆をつくってその豆でみそを今でもつくっているんですよ」とやさしい声。万歳！ 私たちは、大豆をゆずってほしいこととみそのつくり方を教えてほしいことをお願いした。

「生徒さんに教えるなんて、とても、とても」謙遜するおばさんに、「一緒につくっていただければ……」と何度もお願いし、「お役に立てるものなら、ねえ」と了解してもらった。善はいそげ。この年の大豆は収穫には早い、昨年収穫した大豆があるというので、その豆でまず一緒にみそをつくってもらふこと、みごとに実っているおばさんの大豆畑も見学させてもらうことを決めた。

(一) 子どもたちとおばさんを訪ねる

バスで25分位行ったところのおばさんの畑に子どもたちと一緒にでかけた。まだ結球していない白菜、終わりに近いナスやトマトがいっぱいある。そのむこうに枝もたわわに実った大豆の畑。「ワァー！ 枝豆いっぱい」と大歓声。その畑の真中におばさんが立って待っていてくれた。子どもたちは、「おばさんの手、太いね！」とさわってみたり、まわりをウロウロしたり、うれしそう。「大豆はまだ収穫には早いんですよ。枝豆としておいしい時だねえ！」とおばさん。自転車

ひくおばさんのまわりを、みんなゾロゾロとおばさんの家へ。

りっぱな母屋のかたわらに、土壁のみそ小屋があり、いかにもみそのおいが漂ってくるようだった。おばさんは奥の方から大きなみそ樽をもちだし、古いみそをみせたりなめさせてくれた！「古いの？」「昔からつくっているの？」「おばさんのみそおいしいの？」など、子どもたちは口々に感嘆の声をあげていた。「どうやってつくるの？」「誰とつくったの？」と関心が高まっていった。おばさんは、「米こうじの他に、麦こうじを入れると栄養もありおいしい」と教えてくれた。子どもたちは、こうじなどみたこともないのでキョトンときいていたが、「私たちがつくってみたい！」「おばさん教えてよ！」といだしたのはJ君。「いいよ、一緒につくりにいこう」とおばさん。「わーやった、やった、おばさんがきてくれる」何回もくり返していたのはO君。

前年に収穫した豆をゆずってもらい、翌日教えにきてもらう約束をした。帰りがけこうじを買って学校にもどった。このこうじ屋さんは、しょうゆもつくっていた。

(二) おばさんと一緒のみそづくり

広い大豆畑を見て学校にもどり、早速、おばさんからゆずってもらってきた豆の豆よりをする。丹念に、皮がむけた程度の豆までもきれいにやり分ける子、沢山の大豆に手をつつまみ、感触を楽しむ子。より分けた大豆を集める子。「鬼は

外、福は内」とまいてみる子、散らばった大豆をはいまわつて集める子、背中に豆を入れられて、キャーキャーさわぐ子。二時間近い間、みんなそれぞれに一生懸命豆よりをした。その大豆をきれいに洗って、水にふやかした。まだ、食べてみようとする生徒はいない。

「親指と小指ではさんで、つぶれる位にやわらかくなるまで煮るんですよ」と、おばさんに教えられていたので、その晩、何人かの生徒が学校に泊まり豆を煮た。球形に乾燥していた大豆が、ふつくら小指の先ほどの「お豆さん」になり、食べてみればおいしいこと。

翌日、おばさんが到着するや「どうするの?」「みそ、みそ」と詰め寄る生徒たち。「この位でいいでしょう」と豆を口にして、おばさん。亀の子ザルでアメ汁をこしとった。黄色い大豆を煮た汁はうすいアメ色。湯気の出る大豆を手のひらに持つて、はおばる生徒たち。おばさんが持つて来てくれた肉ひき機を使って、豆つぶしが始まった。ニョロニョロ出てくる「豆うどん」、グルグルまわすと、出てくる出てくる「豆うどん」。おもしろくてやめられない子。地面に寝ころんでいた生徒も、人をかきわけてやろうとする。すり鉢とすりこぎも使って豆をつぶす。よく煮てあるので、とてもやわらかくてすり鉢でもおもしろいほどよくつぶれる。肉ひき機から出てきた「豆うどん」を丸め出した生徒が

いる。みんなもまねして豆のおにぎりをつくる。中には豆にぎりを食べちゃう生徒。おばさんは「食べる量が多い程、おいしいみそができるんですよ」とにこにこ笑う。

木の樽の中で、米こうじと塩を混ぜ（大豆一斗にこうじ一斗、塩二分の一斗の割合）、そこにアメ色のアメ汁を入れる。さらに、豆にぎり（つぶして丸めた豆）を入れて、グチョグチョこねる。よくこねる。何となく、みそらしい感触。そのグチョグチョこねまわすのが楽しい。「みそだ」「みそになった」となめて見て、まだなじんでいない塩に口を曲げる。みんな、順番にこねて表面を平らにし、その表面に「みそ」とか「八王子みそ」と指で書いてみたりした。「暑い日が二十五日ぐらい続いてから、おいしくなるんですよ。このまま、一年から三年くらいは、ねかしておかなくては」とおばさんが言う。みんな、みそをつくったという満足感でいっぱいという顔をしている。

みそ倉などないので、風通しのいい陽の当たらない場所を考え、プールの下に置くことにした。ベニヤでまわりを囲みプールの下が、みそ倉になった。これでしこみみそのできあがり、その後あわせて三樽（四十樽）のみそをつくった。

④ みそづくりを發展させ、しょうゆづくりへ

おばさんの畑見学の帰りに、こうじを買いに寄った店は、しょうゆを醸造している所だった。その際、「へえー、しょ

うゆも大豆からつくるの」と関心を示した生徒がいた。三樽のみそをつくった後、大豆を加工したしょうゆもつくつてみようということになった。

しょうゆは、みそと同じように古くから農家などでは自分たちで手づくりしていた。今日では大工場でつくることが多いが、生活に密着したものだけに、自分たちの手づくりの活動として、やってみたいもののひとつであった。

大豆を一晩水につけ、八時間ほど蒸煮する。小麦は炒り、石臼で砕く。大豆と小麦とこうじ菌とをあわせて発酵を待つ。これが、しょうゆこうじ。二、三日置いて塩水を加える。これもろみ。でも、もろみは一年から三年もねかさないと、しょうゆはしぼれない。もろみまでつくったのだからどうしても、絞ってみたい。しょうゆ屋さんでもろみを分けてもらう。

ポリバケツの中に、ドロツとしたみそみたいなもろみがいっぱいある。「これ、何？」と質問すると、見た感じから「みそ」と言う子と、鼻を動かして「しょうゆ」という子がいる。早速手を伸ばしてつまむ生徒。木綿の布袋の中にもろみを入れる。プーンとおう。どうやって、しぼろうか？生徒たちは雑布をしぼるような感じで、しぼってみた。出てきた、出てきた、しょうゆ。思ったより、よくしぼれる。しぼっている感触が、おっぱいみたいだ。「おっぱい、おっ

ぱい」と生徒も職員もふざけあいながらしぼった。トロツとした甘味のあるしょうゆのせいか、飲もうとする子もいる。一時間ほどで、一升五合のしょうゆができた。感激！

みそづくりを終えてしばらくの間、「みそは、大豆とこうじと塩とからつくる」と口ぐせのように言う生徒。「プールの下のみそ、どうなっているかな？」と毎日気にする生徒。「みそ豆、食べる」とまた作りたいがる者。これまで市販の食物、毎日口にする食物が何からつくられるか等関心を示さない生徒が、「みそは、大豆と……、しょうゆは……、ハムは……」とつぎからつぎへと関心を広める。生徒たちの「みそをつくる」という活動を通して、改めて、みそや食物への思いが一步、深まったり、広がったりしたように思う。

一夏を越し翌年の秋に、プールの下からみそ樽をとりだし、いい香りになったみそでみそ汁やみそおでんをつくって食べた。家にももち帰り、文化祭には、近所の人たちにも「私たちのつくった手づくりみそ」として買ってもらった！

(こじま やすこ・東京都立八王子養護学校)

● 支えあいつつ ひとり立つ ●

子どもたちに支えられて

村田 尚子



一年前、現在の学校にきて最初の一学期、何もかもビツクリ。ことごとくに「ノー!」と言いたい気分、まあ堪ぐらい実際に言っていた。ところが今年、ほとんど去年と同じことをしているのに「ノー!」という回数が減ったような気がする。たった一年半でスゴイ「タイハイ」。「オコラナイ」はずの先生が「オコリッポクナッタ」「オコッテバツカリ」と毎

日のように、六年四組の子どもからシカレテイタ。

「ムラタサンテイイヒトナノネ」なんて言われるようじゃダメ。ダラク。「ナンダアイツハ」「ワケノワカランヤツ」「コワイヒト」「ヘンナヒト」こうでなくちゃ。この一学期イイヒトになりさがり、逆に子どもにとってイヤな先生になりさがった。成績評価もけっきょくABC三段階でAもBもCもつけた。去年は、Cはつけなかったのに、今年は、つけた。今思うと無意味なこと。二学期「C」はやめる。「オールB」にはできないと思うけれど。「C」をつけた子の顔、あのいっしゅんの表情が忘れられない。

そんな悲惨な一学期。担任発行のたより「週刊エル・エル」(Weekly Love Letter)

も十号どまりで夏休みになってしまったけれど、エル・エルを出すたびにLoveという返信を書いてくれる青崎涼子さんは「先生へ LLあと一息! 10号まで書いて! もちろん私もLoveだしまーす」と。そのLL No. 8・9・10は、中間美樹さんの質問に端を発し、「戦争」を取り上げた。まったく子どもはスゴイ。子どもたちに支えられた私であった。

★先生に質問！

中間美樹

この前の土曜日に「瀬戸内少年野球団」という映画を見に行きました。その話は、戦争後の話でした。そこで質問です。

もし先生が、戦争中に先生をしていたら、先生も『戦争がいいことだ』とみんなに教えますか？　こたえてください。

(週刊エル・エル No 8より)

★小学校の先生になって22年もたっているのに、こんなむずかしい質問をされたのは、はじめてです。わたしはいつも、戦争はいやだ、よくないことだと思っているし、話もしていません。暴力は、どんな小さいものでも否定したいと思っています。「非暴力」のスローガンを教室にかかげています。戦争は、人間のおこなう最大の暴力です。だから、戦争がいいことなどとは言えません。「戦争はよくないこと」です。

ところで、39年前に終わった戦争は、たいへんな戦争でしたね。最後は、原子バクダンまで使われたのでしたね。あの戦争中、日本の人々はほとんどすべての人が、「この戦争は、いい戦争だ。日本は正義の味方で、世界中の悪い国をやっつけるために戦っているのだ。男の子は、戦争に行つて名誉の戦死をとげることが立派な生き方だ」と思ったり言ったりしていたのです。こうした世の中で、もしわたしが先生をしているとしたら、まず「非暴力・戦争反対」という考えをもてたかどうか自信がない。まして、「戦争はよくない

い。今の日本はまちがっている」と子どもたちに言えたかどうか。大声でそう言ったらとらえられ、命さえとられるかもしれない時代に。だから、「戦争は、いいことだ」とまでは、言わないにしても、「しかたがないのだ」と言ったかもしれない。今そんなふうに思っています。

★中間美樹さんの質問に関連して、No 8の答では、言い足りない、ひとばん考えて思いました。またつづきを書くことにします。

「自分が正しいと思ったことは、たとえ他の人の考えとちがっていても、発言する」

よくこう言われますね。わたしも言ったことがあります。また、いつもそうしたいと思っています。でも、人間にとつてこれほどむずかしいことはありません。

たとえば、ある子を何人かでいじめているとき、弱い者いじめはよくないと思っているのに、「やめなさいよ」と言えないことがあるでしょう。どうして言えないのでしょうか。勇気がないと、たいていの人は言うでしょう。もし、やめろと言って、今度は自分がいじめられたらいやだから、こわいから。まわりの人が知らないふりしているのだから、わたしもだまっていよう。こんな気持ちになるでしょう。心の中で

いくら、弱い者いじめはいけな思っていたって、だまっていたら、思わないのと同じです。それは、わかるけれど勇氣がなくて言えないのですね。

わたしも、毎日の生活の中で、これはおかしい、まちがっていると思うのに、大きな声で言えないということがいっぱいあります。今、言わないとあとで後かいするぞと思ひながらだまってしまうということがいっぱいあります。人と反対の意見を言ったからといって、命までも失うわけではないのに。ただ、まわりの人から変な目で見られたり、もしかしたら仲間はずれにされたりするのがいやで、だまってしまうのです。

あの、戦争中は、たいへんな時代でした。日本がしかけた戦争は、ほんとによくない。日本の人々を、世界中（特にアジア）の人々を不幸にする戦争だと思っていた人もいました。でも、口に出す人は少なかったのです。もしも、あのとき、「この戦争はよくない」と言ったら、たちまちとらえられ、悪くすれば、命をうばわれてしまうような世の中でした。

学校の先生の多くは、子どもたちに「この戦争は、聖戦―正義の味方」のように教え、子どもたちは、先生のことばを信じて、兵隊となって出てゆき、戦死した人もたくさんいました。中には、心の中で泣きながらも、教え子を戦争に追いやった先生もいたそうですが、いくら心で泣いたとしても、

口に出して「戦争反対」を言わなかったのですから、同じことです。

ところが、そんな時代でも、当時の国の方針に戦争をつらぬくに反対して、口に出したり文に書いたりして自分の正しい考えを表した人もいたのです。わたしは、その人たちのことを思うと、ほんとうに頭が下がるのです。自分が正しいと思うことをつらぬくために、命をかける――口では言えても、実行することは、なみたいていのことではありません。ほんとうにえらい人たちだと思うのです。

わたしは、若いころ「戦争中の先生たちって、どうして正しいことを子どもたちに言わなかったのか、どうして教え子を戦場に送り出すようなことをしたのか」と、戦争中の教師を批判していました。

でも、最近は、少し考えが変わってきました。それは、自分が教師を長いことしている間に、戦争中の教師よりもっとダメな自分に気がついたからです。そして、戦争中の教師を批判するより、自分の言動（言うことやおこない）をもっともっとしっかりさせることが大切だと思うようになったのです。

あの戦争中でさえ、命をかけて「戦争反対」と言った人々がいた。あの戦争中でさえ、子どもの自由を守る教育をした先生もいた。それを思うと、まだまだ、わたしは努力が足り

ないと思います。

日本中が戦争へとつき進んでいる時に「戦争はよくない。戦争でいのちをおとすなんてとんでもない」とはたして自分は言えるだろうか。自信はありません。でも、何とかそう言える人間になりたいと思います。そして、あなたたちにも、自分の考えを持ち、それをはっきり言える人間になつてほしいと思っています。

今のわたしは、あなたたちにむかつて、自分が正しいと思つたことを言おう、ウソはつくまいと思っただけです。

(週刊エル・エル No.9より)

★先生へ

中間美樹

先生、私の質問に答えてくださつてどうもありがとうございます。すこしむずかしかったけれど、何度も読んでわかりました。

その後、母からも戦争についての話をしてもらいました。私の母は、39年まえ、そう、戦争の終わった時に生まれたのです。母が中学校へ行っていた時、歴史の勉強があつたそうです。そして、先生が、昔のことからくわしく話をしてくれたけれど、戦争のことは、時間がなくてほんのちよつとしかやらなかつたそうです。

その時母は、自分の生まれた年のことだから、とっても知

りたいと思つたのに、先生が、ここはぬかしますと言つたので、ものすごく不思議な感じだったと言つていました。今考えてみると、やっぱり日本がしてきた悪いことを知らせたくなかつたのかしらねと、母は言っています。

先生のことばの「自分が正しいと思つたことは、たとえ他の人の考えとちがつていても発言する」このことば心にのこりました。でも、私には、なかなかできないと思います。なぜかと言うと、先生が質問をして⑦と④とふたつの意見があるとします。どちらかに手を上げることになつても、自分では、④が正しいと思つても、みんなが⑦に手をあげるから、自分一人だけ④にあげて、ちがう意見になるの、いやだなと思います。つい⑦にあげてしまふ。そんなことがよくあります。でも、今度からは、自分の意見に自信をもつて発言したいと思います。L・Lのすてきな返事ありがとうございます。私の返事は、短くせに、おくれてすみませんでした。

(週刊エル・エル No.10より)

(むらた なおこ・東京都杉並区立高井戸小学校)

● 支え合いつつ ひとり立つ ●

自立をめぐる対話

河東田 誠子

(S)

河東田 博

(H)



理され、隔離された施設生活から利用者と子ども脱しようと日々がき苦しんでいる。

SとHは、疲れた体をいやし、新たな障害児教育・障害者施設を学ぼうと二歳と小学一年(当時)の子ども(二人とも女子)を連れて、昨年八月、約一カ月にわたるスウェーデンでの生活と視察を経験してきた。スウェーデンでの見聞からは、社会福祉施策のあり方や平等思想に至るまで、大きな影響を受けてきたが、日常の生活に投影させる上で大きなギャップを感じている。

H 今日が遅くなるからね。

(遅くなるとい言葉は門限が12時ということを意味している。いつもギリギリ12時まで交際を続けてくるH、Sは、今日は早く帰って来るかなと11時、11時半と待っていることもたびたび) S ええ、いいわ。気をつけてね。

毎週火曜日は、Hの出身大学のゼミに顔を出す日。慣れない

英文とにらめっこした後にくみかわす酒は何ともいえない

S 三〇歳、養護学校義務制で確固たる地位を築いてしまっ
たちえ遅れ養護学校に勤めて九年、なかなか地域に開か
れないもどかしさや怠惰な教師集団(私もその中の一人
?)に嫌気をさしながらも、学校の子どもたちとの関係
だけは大切にしようと心がけている。

H 三五歳、ちえ遅れ児・者の居住施設に勤めて十一年、管

味。毎週火曜日だけは特別に許されていると思っているH。なるべく早く帰って来てほしいと願いつつ門限までと言ってしまうS。この心の微妙な揺れ動きに気づかないでいるH。

共稼ぎの家庭では、家族（主に夫と妻）の協力がなければ、どちらか一方に負担がかかり、家事も保育もスムーズにはやっけない。しかし、家事・育児を共に協力しあってやっついこうと思いつつ、ついついいろいろなことを引き受け、結局は家庭外での仕事を作ってしまうH。Hの夜の遅い日が何日か続くと、Sにはイライラ（仕事先のイライラも含めて）がつのり、Hのちよつとしたことが気になってしまふ。これまで何度沈黙という名のいさかいがあったかわからない。お互いに何度も離婚を考えてきた。

この日、Hは、門限までに帰らなくてはと思いつつ、つい話がはずんで遅くなってしまった。家に着いたのは二時すぎであった。

スペアキーで鍵をあけ、ドアをあけて家の中へ入ろうとすると

ガチャン！

ムムム……内鍵がかかっているではないか。しまった！
時すでに遅し。

どうしよう……

これまでも何度か経験。その都度長いことブザーを押してようやく出て来てもらい、「ごめん」とあやまって家の中に入れてもらっていた。

こんな時だってあるんだ、少しぐらいわかってくれたっていいだろうに……。

今日は無理におこさず野宿でもしよう。そう思い、近くの公園のベンチにいったんは横になる。蚊がおそってきてなかなか寝つかれない。しかたなく、職場にまいもどり、職員室のソファで眠る。

次の日の朝は、そのまま職場に残り、家に帰らず。いつも行っている三歳の子の保育園の送りをスッポかす。帰ったらどうなるのだろうと心配しつつ。

その日の夕方は、仕事を終わると一目散に家路に着いた。

H ごめん

とは言ったが、いつか別の世間話に切り変わってしまったことに気づく。

S ……

無言のうちに二日すぎ、三日目の夜となる。子どもたちが寝静まってから……

S ちよつと話があるんだけど。

H ……

S (涙ながらに)

H さん、別居結婚にしない？

H え、別居結婚？ どうして？

S その方がHさんだって好きなことができるし、私だってわすらわしくなくていいし、もう、こういう生活に私耐えられないのよ……

土曜日と日曜日だけ帰って来てくれればいいの。

ね、そうして。

すぐ家をさがしてね。

H ……でも、お金かかるだろう。第一子どもがかわいそうじゃない。保育園の送り迎えだってあるし……

その後のやりとりはおして知るべし、「自立をめぐる対話」とはほど遠い内容だが、このSとHの関係は、お互いに近づこうとすればするほど現実が邪魔をし、このようなシビアな関係になってしまふのが常なのである。

これまでも似たようなことが何度かあった。そのたびにSは泣き、Hはあやまり、反省をし、Sに迷惑をかけず何とか共同の生活を作りあげることができるようしばらくは努力するのだった。

同じようなことは、男女平等の国スウェーデンに行つてもみられた。

貧農の国スウェーデンは、一九世紀末からの高度産業経済の波にのり、一躍工業の国へと変身していった。しかし、貧農のため海外移住があとをたたなかつたこの国に、工業力を支える労働力などありはしなかつた。移民を大量に受け入れ、女子労働者を雇用していく中で、労働運動は急速に目ざめていった。社民党政権が樹立されたことを契機に、スウェーデンでは移民や女子労働者と共に協力をして社会を構成していくために、「連帯」の思想をうみ、「平等」の思想へと発展させていった。そして、今や、それらの思想の上に立つて、ちえ遅れの人たちもふつうの生活条件を確保すべきだとして、ノーマライゼーションの思想が提唱されているのである。このノーマライゼーションの思想は、あらゆる障害者施策の本流になろうとしている。

こうしたスウェーデン社会が目ざしている方向性と人間のありようは、私たちが求めているものと合致しているような気がしていた。それらの具体的なのは約一カ月という短い月日の中ではつかみ得ようがなかつたが、施策や出会った人たちの息づかいからは多少なりとも感じとることができたように思っている。スウェーデンの印象や社会福祉施策の細々としたことは別の機会にゆだねるとして、SとHのとった行

動が実に日本的で、前述のSとHの日常の夫婦関係と何ら変わりなかったことを思いうかべて、今、何ともわり切れない思いでいる。

Hが一人で視察の準備をし、視察先を決めてきたため、スウェーデンに行つてからも同じような対応と行動になつてしまつたからである。日中の視察から夜の盛り返訪問まで常にH主導。時としてSと子どもたちは取り残されてしまうことがあつた。Hがただ一人仕事のために来ているなら別だが、SもHも同じ目的のため渡端して来たのである。すべて同じにしなくていい、一つでも二つでも配慮があつたなら……。

男女平等の国に行つて、男女不平等、何ともわり切れない思いなのであるが、この時もHはSに物言わぬ抗議をうけてはじめて気づいた。

視察の中休み。観光旅行に行つて帰つて来ると、私たちが借りていたアパートが火事になつてゐる。古いラジオが加熱してしまつたらしいが、全員ショック、ただ立ちすくむだけであつた。あわただしく後片付けをし、部屋も移動、心が落ち着く間もなく、Hはさそわれて夜のオールド・タウンへ。さそつた方は気落ちしているSやHに何とか元氣を出してもらおうと思つたようで、それに応じたのはH一人。Sの氣持も知らずに外へ出て行つてしまつた。

当然この後からはHとSの関係はしつくりしなくなつてし

まつた。

このように、HとSの間に互いの思いやり（信頼関係とでも言おうか）がなくなつてしまつた時、必ずといつていいほど危機的状況が訪れる。Hの形式的な役割分担（朝食を作り、子どもを保育園へ送りに行き、夕食の片付けをし、子どもをお風呂に入れて寝かせる）だけでは、Sの信頼などとりもどすことはできない。心を寄せあい一つ屋根の下で共に人生を分かちあつて生きようとしている二人が、信頼関係を失つた時、さまざまな形をとつて「自立」にむけた思考と行動をとつていくのは当然の帰結のように思える。

Sは、過去と現在のHとの関係や夫婦のありようを次のように記している。

小学校のころ、何になりたいかと聞かれれば、学校の先生、そして看護婦さん。両親が先生だということもあつて、子どもなりに裏表を感じ、「先生の子」と言われるのがとても嫌だつた。中学・高校になり、今度はまじめに冒険家の奥さんか、外交官の奥さんになりたいと思つてゐた。それから、お医者さん……。そして今は、養護学校の教師をしてゐる。

小三の初恋にはじまって、顔のいい男の子を好きになったり、顔じゃなく人柄にほれたり。高校時代の「彼」は、女の人には家庭に、という子だった。そのことに何となく反発を感じていた。母が働いていて我が家にはお手伝いさんがいたが、母がいてくれることを望みながら、自分も結婚しても働くのがあたり前という感覚が身についていた。Hとは大学一年の時に出会った。一八歳の地方から出てきた女の子にとつて、五歳年上の人はとても大きく思えた。

出会って最初に飲んでいた時に彼が言った言葉、「僕は女の人に仕事をもちてもらいたい。対等に話をしたいから。問題は炊事とか洗濯でしょう」。男の人が男たるゆえに期待されたり、許されているものは、彼も身についているし、建前としてわかっていても、女並みの行動に出なくても、彼はその建前に前向きにこだわってきたように思う。

子どもができて、こちらは育児時間などに追われ、子育てに面白さと充実感を感じながらも、もっと仕事をしたいと思っていた日々。彼の方は忙しく、帰宅時間も遅い日が続く。仕事等の場で、仕事や人間関係にもっと時間を使いたいだろうと理解しても、じゃ私との関係は、と思ってしまう。二つのことがあった時に、どちらかを選択するのは関係性のとらえ方だ、とよく彼に言ってきた。

子どもも二人になり、彼の行動は、まわりからの期待(?)

に応えるようになる。自分との比較をしてみると、彼の行動優先という感じできた。ただし、いわゆる理解のない夫ではないから、時間の折り合いがつけば、私の夜の行動もOK!! 私自身も、結局は、自分をふみ出しきれずにいる面もあるのかもしれないが、子育てに面白さと意義を感じ、それにかかわってきたのも事実。

近頃は、母子・父子家庭も多い。子どもにとって両親がそろった生活、夕食、休養も必要。現代病なのかとにかく忙しい。一つ一つが中途半端でもあり、一生懸命にやっているようでもある。

帰りの遅い夫を待ち、夫の物を洗濯していると、生活って何だろうと思う。本当の意味でお互いの立場を認めあい、補いあって生活しあう関係つてめざせないものかと思う。

(かとうだ せいこ)

(かとうだ ひろし)

● 支え合いつつ　ひとり立つ ●

今私はここにいます

立川　叶子



“ピンポン”
今日何度目かのチャイムが鳴った。たまに家にいると、改めて訪問販売員の多種多様さに驚かされる。今度は生協への勧誘だった――。生協に関しては必要性を感じつつも、家にジッとおれる立場ではないのでいつも断念している。その旨やんわり断ると、平日ふだん着で玄関に立つ私をげんそう

に見あげ、「エッ、お仕事でも持っているんですか?」と言う――。『仕事』という言葉に一瞬ひるむ自分を感じながらも、この頃は平気で、「ええ、自分で仕事をしているものですから」と言えるようになった。
「仕事を持つている人」とか、「働いている人」という言葉の中には、多分に収入を伴ったことに従事しているというイメージがある。収入面を強調して考えるなら、私は「仕事を持たない人、働いていない人」ということになる。しかし、自分の日常生活を考えると、『とんでもない!!』「働いていないなどという感覚は全くない。むしろ働きすぎる位なのだ。」
手書きミニコミ〈あゆみ〉を発行してから二年半。十ページものを月刊で約三百部発行している。企画、取材、編集、印刷、配布、ひとりで何役やっていることだろう。日中の私は、『直接的取材』や、『間接的取材』に追われ、住まいのある東大和市内はおろか多摩のあちこちに出向いている。実際に記事を書いたりする作業は子どもの寝しずまった深夜……。そして、公民館での印刷、配布（手渡し・郵送）。最後の配布が終了したらもう次の号

の取材が待っている……。こうして考えてみると私の一日、いや私の一カ月は〈あゆみ〉を発行することで明けくれていることになる。だから収入が伴わないということで「仕事を持たない人、働いていない人」と言われることにやはり抵抗は感ずるのだ。むしろ、「収入ぬきでも打ちこめる仕事」を持っていることに私は誇りさえ感じているのだから――。

けれど友人の忠告にはやはり耳が痛くなる。「自立した信念であなたが地域にボランティア的にミニコミを発行していることは素晴らしいことだと思う。でもそのあなたの自立的行為をささえているのはあなたの夫から出たお金……。あなた自身の稼ぎでボランティアができるのならもつと素晴らしいんだけど……」。

「収入ぬきでも打ちこめる仕事にむしろ誇りさえ」という私には一種の甘さがある。それは夫に養ってもらえるという前提のもとに輝きつづける私の生きがいでもある。他力によって輝かせてもらっている私の生きがい!? でも、経済的自立をつきつけられても実はあまりシユンともしていない。今の私は予備軍なのだ。夫がもし病氣などで倒れた場合、その時こそ私の出番だと思っている。今、経済的に自立してないといわれる多くの専業主婦たちも、実はさし迫った出番がないだけのことはないのだろうか。人間生きていくためには底知れないエネルギーを発揮するものだし、経済的自立は「生

活者」の体内には必ず潜伏しているものではないだろうか。そんな屁理屈を言いながらも、現在の自分が無収入であることには違いないし、世の中そんなに甘くないことも少しずつ分りかけてもいる――。

けれど、かつて私にも堂々と「働いてます」と言える時期があった。もう大分昔のことであるが……。お金をもらい、男社会でもまれながら、培ったエネルギー。それが今の私の土台になっているような気もする。新入社員としての第一歩……。私にとっての「おしんの時代」はそう長くはなかったが――。

私は「市街地再開発の企画」をもった港区青山のフツの会社の社長室に配属された。その「社長室」が実は意味ありだった。都議会議員をめざす30代後半、若手社長の選挙事務的機能をもっていたからだ。部屋には男性秘書二名、女性のお茶くみの存在の人が一名、更に学生や年輩者のバイトの人が常時十名位いて単純事務（名簿整理とか宛名書きなど）が社長夫人の指揮のもと行われていた。新人の私はお茶汲みもしたし、単純事務、何でもやらされた。驚くことに社長夫人は毎日朝から晩まで社長室にかよいつづめ、徹底的に仕事内容を管理する。その管理は細部にまで及び、仕事の正確さ、

言葉づかい、お茶の入れ方、電話での対応、そして私生活に至るまでがことごとくチェックされ、しつけられる——（夫人の驚くほどの真剣さは、彼女にとっての自己実現が、〇議員夫人”になることにあつたのだから当然かもしれない）。

そして私も変わっていった。私も社長夫人と同じあたりに自己実現の方向をもっていこうと思った。この社長を当選させることが私にとっての自己実現、職場の中でいなくては困るような存在になることが私にとっての自己実現。そのためには、ただ与えられた仕事を受身でこなすというのではなく、積極的に「仕事を発掘」していこうと思った。私の Motto は「早さと正確さ」、男性秘書のやっていた仕事も「私をやつといてあげるわ」的にもらつて、どんどんやつた。ヒマのできた男性秘書はその間喫茶室で、お茶などを飲んだりしていた。たった一人いた女性のお茶汲みの人が辞めた後、私はお茶汲み（接待）もやり、後援会関係の仕事もやり、パイトの人たちへの仕事の指示も任されたりで、結構忙しい日々となった。けれど忙しかなければなるほど、職場での私の存在感は増し、自分の中には充実感が広がった。お茶を出すという作業も決して苦痛ではなかった。客と間近に接することができるということは、そこに一つのコミュニケーションが生まれる。それも又仕事の一つなのだ。私の考える「仕事」

とは、文字や数字の羅列^{ロれい}ではない。そこに人間的絡みが生かされてこそ、「仕事」として完成できる（あらゆる職種において）。

——やがて社長は長年の夢をかなえ、トップで当選。若手政治家としての第一歩を踏み出した。社長室は前にも増してにぎわい、各界の人が出入りする一つの社交場の役割も果たすようになってきた。そんなある日、私は社長に呼ばれた。

「君も名刺を作った方がいい」

その言葉を聞いた時の感激は今でも忘れられない。なぜなら、議員秘書としての名刺はそれなりに「信用」されていたければ持つことは許されないもの。普通の名刺とは又意味が違ってくる。——数日後、私の机の上に「都議会議員〇〇秘書立川叶子」という真新しい名刺の箱が載っていた。これで名実とも男性秘書と同じラインに立つことができたという喜び——。

しかし、それから三年後、私は大変すわりごちらの良くなつた椅子をアッサリ捨てることになる。待ちに待ってた妊娠なのだ。仕事をとるか子供をとるかという選択は全くなかった。政治家の秘書としての仕事は大好きだった。しかし、それにも増して、「子育て」はもっともつとやってみたい「人生における私の仕事」の一つでもあった。仕事の性質上、子供持ちは勤まらないとか、女性の年齢制限などのある職場では

なかった。実力と信用さえあればいくつになっても勤まる職場でもあった。でも私は辞めた。子育てをしながらでは自分の納得のいく仕事ができるはずがないし、残業もできず、子供が病気の時には休まねばならない……。今までの自分のイメージを壊すくらいなら、大好きな子育てひとすじの道にいくと迷わず決心したので。

この秘書時代、私がこの社長（議員）にたたき込まれた精神は、「何ごとにも全力投球で」ということだった。その後彼は衆議院議員となり、前の文部政務次官時代には荒れた忠生中学を視察するなど、彼なりの全力投球を続けている。

男社会から一転し、私は突然「マイホーム」で子育てに明けくれる毎日となった。密室での子育てが母親の精神をむしばむ等ということが言われたりしているが、当時の私にはあてはまらなかった。子どもの表情に一喜一憂し、育児書を読みあさり、隣り近所の親たちと情報交換したりする日々は、それなりに楽しくもあった。女であるが故に出産したとたん職場を去り、育児に専念せねばならぬという不条理さよりも、むしろ、女であるが故にいろんな「役割」をこなす機会を与えられたことに喜びを感じる、という具合だった。だから自分のおかれている立場に欲求不満もなく、計画的に三歳違いで次の子も出産した。「やさしく、包容力のあるお母さ

ん」になることが私の大きな目標でもあった。職場を去ってからの七年間、家庭の中で妻、母、嫁、という三つの顔をもち、家族の幸せのみが全てであった私には、世の中がどうか、婦人の権利がどうか、そういう声は全く入ってこなかった。都心で籐工芸を習い、水彩画教室にかよっては、それらの作品を部屋に飾って満足していた日々、それはまさに「平々凡々」を絵に描いたような生活であった。

しかし、家庭の中だけの平和に浸りきっていた私にも、一つの転機がやってきた。

《昭和五六年一月号の公民館だより》「心理学講座」という名に魅せられてはじめて公民館への一步を踏みだした私。それは〇〇ちゃんの母、〇〇氏の妻、というそれまでの生き方から私自身へのめざめへの第一歩ともなった。

次男四歳の時である。

公民館に通い出してからはアツという間の三年半だった。この間、私は心理学の自主グループで、「生涯発達心理学」を学習——。これは人間の発達を青年期までとしたそれまでの学説と違い、人は生涯にわたって発達しうる存在であるということを根本理念にすえた学問であった。学習していく中で私は何年か振りで私自身と再会する自分を感じた。それま

で私は自分の人生、先の先まで見とおせる気がしていたのだ。息子たちからは、「お母さん」と呼ばれ、孫たちから「おばあちゃん」と呼ばれる日、年齢に見合った役割が用意されている社会……。

でも違う!! 生涯にわたって「発達しうる存在」だということを知った。いくつになっても、私は私自身の固有名詞で新しいスタートをきることができる——。

ミニコミへあゆみは、そんな私自身の一つの自己表現であり、自分自身を開拓していくためのステップでもある。だから、ボランティア精神で地域に私の学習を還元するために発行、だなんてきれいごとは言いたくない。記事に登場する様々な人たちによつて、どんなに私は豊かさを与えられたことだろう。以前、家庭の中の平和にだけ浸りきっていたころの私の目や耳にはとまらなかった数多くの声が、今の私には聞こえてくる。

子どもたちの悲痛な叫び、女たちの怒りの声、老人たちの声にならない声……。それは私にとつて直接には関係のないことと、もう黙って通りすぎることはできなくなってきた。学習をするということは、いかに自分が何も知らなかったかということに気付くことであり、自分の知らない世界がいかに広いものであるかを知ることでもある。

自分の小ささ、非力さに思わず立ちどまってしまいたくもなるけれど……。私にできることは一体何か、私は何がしたいのか、それらを今私のいるこの場所で考えていきたいと思っている。

秘書時代は、男のように生きたいと願ひ、

子育て時代は、母らしい母になろうとした。

しかし、今私は、在りのままの私、在りのままの「女」という性をもった一人の人間として流されることなく生きていきたいと思う。

〈歩み〉は私自身の中に在る——。

(たちかわ かなこ・ミニコミ誌「あゆみ」編集・発行人)

☆

☆

☆

おいしいものを作ろう

中里清志

六年生の一学期も終わりに近づき、学級の子どもたちから料理を作りたいという声があがってきた。自分たちの好きなものを作って、みんなで食べたいと言うのである。

苦勞せずに、簡単に何でも食べられると思いがちな風潮の中で、お膳立てのできた調理実習ではなく、献立から買い物、調理までを通して、子どもたち自身の手でやらせたいと考えていた。そこで、仕上げたばかりのエプロンを着けて、調理実習をやることになった。

〈献立を立てる前に〉

学級の子どもたちの食べ物の好みや考え方について、アンケートをとってみた。やはり、好きなものは、ハンバーグやカレーライスなどである。最近の子どもたちの大好物は「オカアサンヤスメ」型メニューと言われている。オムライス、カレー・ライス、サンドイッチ、ハンバーガー、やきそば、スパゲティ、目玉焼きの頭文字

を並べたもので、文字どおり調理に手がかからない点で共通しているとのこと。最近では、さらにこの傾向がひどくなり、「ハハキトク」とまで言われている。ハンバーグ、ハムエッグ、ギョウザ、トースト、クリームシチューの頭文字であり、ハンバーグやギョウザは出来合いのものを加熱するだけ、シチューはインスタントだそうである。

アンケートを見ると、意外と甘い物は人気がない。和菓子、アンコの類など。そう言えば、給食に時々出る「あげパン」などもそうである。パンを油で揚げて、砂糖をまぶしてある菓子のような主食で、私の子どものころは、最高においしいと思っていたが、今や全く手をつけない子もいる。甘い物が嫌いなことは、ムシ歯を考えると好ましいことであるが、反面、スナック菓子などの影響でかなり濃い塩味好みなど塩分の取り過ぎも心配になる。

次にさまざまな食品を六大栄養素群に分類し、まとめてみる。これは、五年生の時の復習でもあるが、一年たつと忘れていることも多い。思いつく食品を一覧表にうめていくが、炭水化物とたんばく質の違いや、無機質を多く含む食品名などむずかしい。分かりにくいものは成分表を見る。

「トマトはどっちに入れたらいいの？」カロチン、ビタミンCの分類も迷うところ。

続いて、自分の食べた食事調べをする。今朝、何を食べてきたのだろうか。栄養的にはどうだろう、中には、何を食べてきたのかすぐには思い出せない子もいる。主食はパンとごはんが半々ぐらい。食べたものは栄養素ごとに分け、足りている栄養、不足しがちな栄養を考えてみる。これを朝・昼・晩と二、三日続けてみる。全体的

に、たん白質は多く取っているが、ビタミン類が足りないようで、野菜に気をつけたいものである。調べてみると学校の給食は栄養のバランスよく献立が作られていることがわかる。

ここまでやると、子どもたちもどの食品にはどのような栄養素が主に含まれているか大体わかってくる。

さて、今度の料理づくりでは、買い物もみんなですることを話し、大事なことは、まず予算を立てること、食品を選ぶ場合も、鮮度、品質表示に気をつけ、製造年月日の新しいものを選ぶようにすること、さらに、食品添加物、ジャス・マークなどにもふれる。

〈献立づくり〉

「早く作りたい」という声が高くなる。いよいよ、自分たちの好きな献立を作る段階である。男・女混合の班ごとに献立を立てる。条件として、(一)一食分の料理を考える (二)全ての栄養素が含まれるように、バランスよく献立を考える (三)予算は一人三〇〇円以内、班で二一〇〇円以内とする (一つの班が七人編成で、六班に分かれている) (四)調味料は、家庭から持ってきてよいが、材料はできるだけみんなで購入するようにする。

それぞれの班で、話し合いが始まる。ワイワイガヤガヤ。それぞれ自分の好みにはうるさい。チームワークのよい班は、まとまりも早い。男子と女子の好みの違いでなかなかまとまらない班もある。料理クラブで毎週料理を考えている子は慣れていて、リーダー性を発揮し、作り方など説明している。

一班からは、「少し豪華にしたいから、一人三〇〇円を越しても

いいでしょう」との意見が女子から出る。計画を見ると確かにすごい。これなら、いい食事ができそうである。しかし、全ての班が条件が同じになるようにしようと説得する。

三班も、「ネギやタマゴはウチにあるから持ってきてでもいいでしょう」とくる。そうすることによって、内容を豊富にし、余ったお金でもう一品足すこともできる。しかし、今回は、買物の勉強でもあるからと、材料は買うようにさせる。

中には、献立の折合いがつかずに、放課後残って話し合う班もあったが、計画が出そろい、全ての班が私の許可を得た。

学期末で短縮授業になった放課後、学級での帰りの会もいつもより早く切り上げて、夏の日ざしの強い中、子どもたちは班ごとに買い物に出かけていった。

料理作りの当日、朝から準備に余念がない。今日は短縮授業、給食もないので、三時間全部を調理実習に当てた。子どもたちもウキウキしている。「班ごとに協力して、おいしいものを作ろう」を目標に、料理作りに取りかかる。

〈班ごとの買い物・料理づくり〉

買い物・料理作りを、子どもたちの計画感想をもとに、班ごとに振り返ってみる。

【一班】—サンドイッチ、サラダ、レモンスカッシュ、デザート。計画どおりおいしくできたけど、量が少なかった。買い物の時、製造年月日をよく見た。予算より多いから、少し減らして、ちょうど二一〇〇円にした。レモンスカッシュがおいしかった。また

やってみたい。

(石崎慶洋)

。みんな、おいしいものを作れてよかった。またやってみよう。

(加藤幸宏)

。予定どおりできた。作るのは大変だったけれども、食べるのは簡単だった。

(真田智貴)

。(献立作りの時に、計画を大きく変更したりしたため、栄養のバランスはよくなったが、量が少なくなってしまった。そのため外の班から応援してもらい、お腹をいっぱいにする)

【二班】—サンドイッチ、サラダ、飲み物(メロンソーダーかレモンスカッシュ)、デザート(もも)

七月十六日(月)二時三〇分、学校の校門前全員集合、スーパー忠実屋で買い物。

「買った物」—ハム—1パック、卵—1パック、シーチキン—2缶、レタス—半分、キュウリ—5本、パン—2斤、トマト—1つ、メロンソーダー—2袋、さくらんぼ—1缶、モモ—1缶、レモンスカッシュ—2本

合計—一九四九円、残金—一五一円、各々に二〇円ずつ返す。

。計画どおりきちんとできた。買い物では一つの物でもいろいろな種類があるのに気がついた。料理は卵のサンドイッチがあまり上手ではなかったけど、自分たちで作ったのでおいしかった。

(日下部純子)

。意外とおいしかったし、うまく作れた。みんな忘れ物をしなかったし、後かたづけもよく出来た。買い物では、お金が余った。これからも、たまにやってみよう。

(奥田康雄)

(準備の行き届いた班で、サンドイッチが上手に出来ていて、盛りつけもきれいだっ)

【三班】—ラーメン、ホットケーキ、レモンスカッシュ

。「ビッグA」で買物をした。値段・品質表示に気をつけた。同じ品物でもいろいろな種類のものがあることに気がついた。料理は計画通りできたが、火かげんがむずかしかった。(二瓶大介)。買物の時はジャスマークに気をつけました。料理はおいしいものができました。作る時にガスの扱いに注意しました。たとえば、油を使う時に水がこないようにしたり。もっと、ゆっくり作りました。

(渡辺真実)

。買物は、お金の予算と品物が古くないかに気をつけた(特にハムなど)。家でも自分で作ってみようと思った。(粕谷恵子)

。製造年月日、原料に気をつけて買った。計画通り料理ができ、おながいになった。いっぱい作る物があるので大変だったけれども、みんなで作ったので、おもしろかった。栄養の組み合わせ、バランス(全ての栄養素を献立に含むこと)がむずかしかった。

(渋谷 愛)

(炭水化物の多いメニューではあるが、苦勞して、レモンスカッシュで何とかビタミンCをとるように工夫している。

ラーメンは、男子に人気があり、インスタントではなく、なるべく生のラーメンをとすめたが、高くつく、味がいいなどからインスタントになる)

東京の板橋には、インスタントラーメン屋ができたそうだ。店に

入ると、インスタントラーメンの袋がズラリと並んでいて、好みのインスタントラーメンを作って出してくれるそうである。若者に人氣があり、繁盛しているらしい。今や、ラーメンと言えば、インスタントラーメンと思っている世代があり、これを作る手間さえも惜しんで食べに来るのである。子どもも大人もインスタントに慣れ過ぎていないだろうか。

【四班】—ペーコンエッグ、サンドイッチ、コーンスープ、サラダ、レモン水、果物

スーパ―前全員集合、買った店—マミーマート、東急ストア—他
合計—二〇二四円、残金七六円、一人十円と十一円の返金

買 物 の 一 覧			
No.	買った物	数 量	ねだん
1	スイカ	1 個	298
2	ヨーグルト	1 パック	179
3	レタス	1 個	80
4	パイ	1 パック	78
5	牛乳	200ml	58
6	玉子	1 パック	100
7	ポタージュ	2 ふくろ	178
8	チエリ	300 g	300
9	パージュ	2 きん	234
10	ベーコン	150 g	219
11	ハム	2 パック	100
12	トマト	1 さら	100
13	キュウリ	1 さら	100
14	シーチキン	95 g	100

でした。とても作るのは楽しかったです。

。買い物はおもしろく、時間が長く感じた。製造年月日、保存方法、品質表示に気をつけた。料理はよくできたが、わり合い時間がかかった。

い所に行つて買いました。とても、ごうかな料理ができ、案外うまく作ることができました。でもちよつと量が多かったので食べきれません

(塚越幸子)

(斎藤指揮)

。買い物は、製造年月日やみんなで購入ので値段に注意しました。料理は計画通りよくできました。たくさん作ったので満足できました。とても楽しかったです。みんなと協力できたのでまた作ってみたいです。

(深谷直子)

。いろいろな物が買えた。おいしいものが作れたし、いろいろな物が作れた。

(石岡 曉)

。安くて、新鮮なものに気をつけた。キュウリを切る時に太くなつてしまった。いっぱい作り過ぎて、食べきれなかった。

(古賀雅徳)

・料理はよくできたし、おもしろかった。

(岡本慎太郎)

(この班は、立派なもの。計画もよく練つてあつて、栄養のバランスもよく、果物も計画ではさくらんぼになっていたが、店で値段をみて、スイカに変更している。さらに、前日に安い店を事前に調べてくるほどの熱の入れようで、安い物を上手に買っている。一人三〇〇円でも、こんなにそろうとは、家庭の主婦も顔負け)

(主婦)



【五班】—ちらし寿司
(↓カレーライスに変

更)、お好み焼き、クレープ

。私たち五班は、ちらし寿司を予定していましたが、ちらし寿司(すし太郎)が高かったので、カレーにしました。

私たちは、スーパリーの忠実屋に買い物をして行きました。買物がすんでレジに行つて計算してもらつたところか三〇〇〇円を越してしまいました。どんどん減らして何とか二一〇〇円以下になりました。これからは、下見などしてちゃんと予定を立ててから買い物をすると思います。

カレーの作り方は母に教わつてはいじょうぶだろうと思つていましたが、今日の調理実習のカレーは失敗でした。やっぱり、頭で覚えるだけでなく「実際に作つてみる」ということが大事なんだとあらためてわかりました。

作つていて、予算も足りてるし、作り方は大体わかつているからだいじょうぶだろうと納得していましたが、私の頭の中には「時間内に終わらせる」ということがぬけていました。その結果、後しまつに時間がかかり、遅くなつてしまいました。これから、時間、予算、計画などのことを頭に入れて、もう一度作つてみたいと思います。

(野上真樹子)

。買い物物の集合時間が学校から帰つてすぐだったのに、集まるのに時間がかかった。買った量は少ないが、値段の高い物が多く、千円近く過ぎてしまった。ふだんはお母さんが買い物に行つていたので、あまり値段がわからず、オーバーしてしまつた。店員の人

が足りるまで計算をしてくれた。
カレーが失敗した。水が多過ぎたのか、所々、シチューみたい

だった。そのためご飯があまり過ぎた。今までの調理実習は皿や
いろいろなものを持つてくる雑用がほとんどだったが、今度は自分
で肉・野菜を切つたり、お好み焼きも自分でやって、楽しかつた。

(柴田浩之)

。カレーの水が多く、へんなふうになった。いがいとむずかしかつた。

(早坂 猛)

。あまりむだ使いをせず、必要な物だけを買うことに気をつけたが、計画表を考えもせず、どんどん買つていつてはだめだ。お好み焼きはもう少しキャベツを細かく切ればよかった。クレープは思つた通り形がくずれ、チョコと生クリームがとけた。カレーはご飯はせつかく、うまくつけたのに、失敗して残念だった。分量を計つて水を入れればよかった。

(高橋美紀子)

。たまねぎや野菜を切つたら、よく切れたことがよかった。後かたづけが最後になつてしまつた。

(田地裕一)

。お好み焼き、クレープはうまくいった。カレーは水の量を少なく、ごはんも少なくすればよかった。

(橋本佳美)

(この班はよくばつて計画を立てた。予定通りには行かなかつたけれども、買物では母親の苦労がわかつたり、調理では実際に作ることのむずかしさを感じ取つたようだ。「失敗は成功のもと」よい体験をしたようだ)

【六班】—ラーメン、クレープ、シャーベット、レモンスカッシュ

駅前に班員全員集合、スーパリーのキンカ堂で買い物。

合計—一四六九円、六三一円残り、一人九〇円の返金

。お金の計算が大変だった。にんじん、ねぎなど品物が高かつた。
でも、はじめて、みんなと買い物をして楽しかつた。ラーメンは

塩っぱく、シャーベットはどろどろにとけてしまった。もっとおいしいものを作ればよかった。今度作る時は、もっと研究してから作りたいと思う。食べるのは遅くても、かたづけは早く、みんな協力してできてよかった。

(川口抄子)

。女子が主に買い物してくれた。ニンジンやキャベツやネギを細かく切るのがむずかしかった。でき上がりはおいしかった。

(飯島健治)

。お金が足りないと思ったのに九〇円ずつみんなが余った。料理は大体できたと思う。クレープを作ってもぜんぶ食べ切れなくて余ってしまったのは残念だった。作り終るのがほかの班よりも遅くなってしまった。

(星野裕香)

。レモンスカッシュを計画していなかったけど、レモンを買ってよかった。ラーメンの成分は、へんなものが入っていた。

(田中智子)

(計画を立てるのに、男女でよく話し合っていた。買い物も、にぎやかな駅前まで出かけるというので、心配したが上手に買い物できたようだ。

シャーベットは冷蔵庫でもあれば、もっとよくできたであろうが、それでも、よくがんばって作っていた)

〈料理づくりを終えて〉

子どもたちは、放課後も習いごとや塾などで、みんなが集まれる機会が少なくなっているが、時間をやりくりして、まとまって買い物に出かけた。

実際に店で買う中で、物を選ぶコツ、値段や品質のよさがわか

り、物価の高さも知ることができたのではないだろうか。また、みんなので一つの計画にそって、いろいろな種類の中から、あっちにしようか、こっちにしようかと相談し合い、買い物の楽しさも味わってきたようである。さらに、いろいろなお店を回ったり、お店の人と接する中で地域社会を知ることにもなったと思う。

このごろでは、ともすると買物は母親まかせで、子どもに買い物やお使いをあまりさせない傾向もある。「買い物へ行くくらいなら、勉強をしろなさい」などとも言いかねない。今回の買い物を通して、子どもたちは生きた学習をしてきたように思う。

調理も、自分たちで決めた料理を作るため、すすんで計画を練り、実習に取り組んでいた。時間の制約があり、指導も充分ではなかったけれども、みんな一生懸命やれた。

中には、計画どおり行かず、予定を変更したり、失敗した料理もあったけれども、失敗を通して、計画の立て方、計画と実際の違いなど、さまざまなことを学んでいる。次の時に充分生かすことができるであろう。

ともかく、楽しく、おいしいものを協力し合って作れたことに、子どもたちは満足したようである。機会があれば、またやってみたいと考えている。

(埼玉県上尾市立西小学校)

理論と実践の間 その I

櫛田 真澄

一、生徒の目

男女共学の家庭科の実践をはじめて既に久しいが、その初期のころのこと、世の中ではインスタント食品ブームが始まり、目を見はるように食品がインスタント化していった。そのころから既に学者たちの添加物についての警告はなされ続けていた。私の場合、男子に家庭科を教える最初のキツカケは人間の生命にかかわる添加物問題であった。そのため日常食の中にインスタント食品を多量に取り入れる危険性を力説していたのだが、調理実習では時間短縮の必要から固型スープの素を使ってしまった。その後でA君から理論と実際のギャップを鋭く指摘され、深く反省を迫られたのであった。その後はとりガラスープをとっている。

更に、「先生の口紅にも危険な色素が使われていますから注意して下さい」とB君に言われてしまった。これは若い日の私にとって

大きなショックで、次の日から天然色素使用の口紅を一心に探し求めた。以来、紅花から取った色素使用の口紅を愛用し続けることになる。

以上二つの例からわかるように、生徒の目は実に鋭い。A君もB君も理論と実践の一致について貴重なことを教えてくれた忘れられない生徒たちであった。

二、教材に含まれるもの

生徒を前にすると、あれもこれもと教えたい内容が次々と頭を浮かんでくる。日常生活で知っておけば必ず役立つであろうと思われる材料がいくらでもあるからである。しかし、限られた時間数と生徒の理解度や興味と生活状態を考え合わせてみると、それらすべてを学習させることはまず不可能に近い。ここに教材の精選という作業が必要となるわけで、教師は多くの教材の中から適度な学習要素を含み、しかも生徒の発達段階や興味の方向から現在の生徒にふさわしいと思われる教材を選び出さなければならない。生徒たちにとってどのような能力を期待しているか、またそのためにどの教材を選び出し組み立てるかは教師に負わされている仕事といつてよい。故に、その教材には常に教師の意図が含まれていることになる。

もしも、この部分を軽く考えて、行き当たりばつりの教材を生徒に課すならば、その授業は説得力に欠け、生徒を混乱に落とし入れられる原因ともなりかねない。昨今、授業の成立しない話を多く耳にし、その度ごとに心が痛むのだが、この点への配慮が今の中学生には特に必要と思われる。

更に、教師の考えや意図を生徒たちがよく理解できるように、言

業と態度で明瞭に示す必要もある。教師の方に熱意さえあれば、生徒たちはそれを自然に感じ取ってくれて授業が平穩であったというのは、ひと昔前までの中学生であり、今の中学生には通用しない。常に「君たちに今これが必要なのだ」という切実感を持たせておくことが重要なのである。他教科に比べて家庭科が有利なのは、生活としっかり結びつけ、切実感を持たせることが可能な点である。教材の選び方と指導法の工夫によって、生徒にとって魅力ある授業ができることを信じて、自らを励ましつつ共学の家庭科の実践を続けてゆきたいものと思う。

次に、本校で教材として取りあげているハンバーグ・ステーキを中心としたひき肉調理の教材性について記してみたい。

・ひき肉の加工品であるハンバーグには、インスタント製品も多く、生徒の家庭でもよく使われている

・原料がひき肉であるため、製造工程中に様々な種類の原料肉（時には魚肉、植物性たんぱく等）や食品添加物を混入させることが容易であり、加工食品のひとつのパターンの学習に有効である

・内容量（一こ当たりの重量）や値段の比較が可能である

・調理実習において、成功と失敗の結果がはっきり現れる。味は好みもあり、あいまいさがあるが色形くずれなどがあきらかであるため、調理科学を基にした説明に適している

・生徒自身が喜んで作る

・家族のための一品料理に適している

・煮込み料理としてのスパゲッティ・ミートソースと結びつけて学習が可能である

・ひき肉料理のレパートリーを増すことが比較的容易である（応用

発展

以上のことがらをまとめてみると、教材が①社会的意味があること、②価値判断の基準を含んでいること、③生徒の実習に適していること、④家族への貢献が可能（有意感を育てるために）、⑤生徒の自立に役立つものであること、などである。これらは食物の学習ばかりではなく、被服・保育・住居の学習においても共通するのだが、その重要さに軽重があることは確かである。例えば被服学習においては⑥の生徒自身の自立という面が強調されなければならないが、④の家族への貢献については中学校段階では従とならざるを得ないだろう。

三、理論から実践応用へ

前号の「飯盒炊飯」の献立作成にひきつづき、安全な日常食をテーマにして、次のような指導計画を立てた。ここでは理論から実践応用までの道すじを考えてみたい。

(1) 夏休みの課題「肉類の加工品やインスタント食品について原材料を実情調査し使われている食品添加物等の人体への影響についてレポートする」

家庭で使っているもの、スーパーマーケットで売られているものなどの実情調査を強調し、生徒自身が体を使って調査してみる体験が大切である

(2) 学級での発表会

お互いに学び合う時間となる。生徒の発表で大体は網羅されるが、クラスによる偏りの修正や不足部分を補うように、また重点の強調などのために教師側の資料準備も必要である。

表1 インスタントハンバーグの長所と短所

長	1. 調理上、便利である 2. 手軽に簡単に作れる 3. 種類がたくさんある 4. 値段の高いものはおいしい 5. めんどうくさがりやの人のためによい
短	1. 保存料や着色料の入っているものがあつた 2. 調査したもののすべてに添加物が入っていた 3. 保存のために温度に注意しなければならない 4. 値段の安いものでは、ハムのような味がした 5. ソースの味が大部分を占める 6. バターの味が強い 7. 肉のほかにたまねぎの味が強い 8. 香りづけの調味料が多く使われている 9. 安いものには何種類もの肉が使われていた(鯨や魚肉までも) 10. 中身がやわらかく、歯ざわりが悪い 11. 何かもの足りない

(3) 小課題「インスタント・ハンバーグ調査」その長所と短所
インスタントのハンバーグに焦点をしばって、「調理法、原料、添加物、内容量、保存法、一こ当たりの値段」を調べる。また、その長所と短所を発表する(表1参照)

(4) 調理実習
「手づくりでハンバーグを作ってみよう」というと歓声が上がり、調理への期待感が盛り上がってくる

献立ーハンバーグ・ステーキ、にんじんのバター煮、刻みキャベツ

① 準備
・ グループの役割分担
・ 調理室の使い方
・ 服装の点検
この実習が第一回目の場合は、調理室の使い方と服装の点検は特に大切である

る。中学生は環境に慣れるまで時間がかかり興奮が続く。落ち着いて実習に臨むためには、夏休み前に完成させた自作の作業着のお互いの出来ばえ、色、形などを十分に確認させて、実習当日、気持が他へ流れてしまうことのないよう、十分に満足するまで時間をとるとよいようだ。

② 作り方・手順

簡単に最低限のことを説明する。失敗した後での詳しい説明の方が、彼らは真剣に、深い興味と関心を持って聞くからである(特に調理科学や栄養について)

・ タネをよくこねること(本校ではすり鉢とすりこぎを使ってこの作業をさせているが、生徒も喜んでやり、タネがミックスされて大変有効である)

・ サラダ油を手につけて形づくる

・ 強火で表面を焼き、弱火で時間をかけて中まで焼く

・ 「一流レストランのコックさんのやり方を覚えよう」ともちかけ、にんじんの面とりの方法を知らせる

③ 調理実習

(5) 各自及び各班での実習反省

「学校での実習の失敗は大いに結構、失敗から学ぶことが沢山あるからです」と言って、各班の失敗談をクラスに発表させる。他の班の様子は興味深く、面白がつて聞く。

次に、「家族のためにハンバーグを作りましょう。絶対に失敗のないように、家族全員からほめてもらえるように、今から大切な点を説明しますからよく聞いてメモしておくように」と言って、発表された失敗の原因を分析し、解説を加える。生徒たちは

真剣にノートをし、家族のために作るときは成功させようと意欲を燃やすのである。主な失敗は、身くずれ、焼け焦げ、生にえなどであるから、調理科学との関連づけも説明がつく。要は肉のたんぱく質の熱による凝固性と火かげん調節である。

最後に、食品の栄養的特質について理解させる。

(8) 家族のためのハンバーグづくり

家族のためのハンバーグづくり

二年 黒川安正

一、実施日

二、材料・分量 四人分

〈ハンバーグステーキ〉へにんじんのバター煮〈刻みキャベツ〉

……省略

三、一人分の費用

ひき肉220円、にんじん11円、キャベツ3円 合計234円

調味料などは家にあったものを使ったので費用はわかりません。

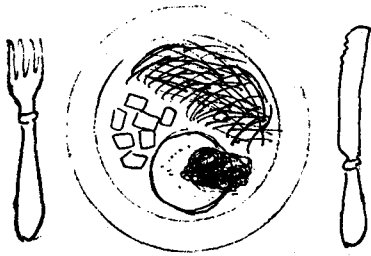
四、所用時間(準備↓盛り付け)

一時間三十分

五、盛り付け図

六、家族の感想

〈父〉男の子は、食事をするだけで作る苦勞は知らない。父親自身も経験がないだけに、家庭科として良い経験だと思う。



出来栄は、外食のものと比較してひけをとらない位のもので、腕前を見直した次第である。時々作らせる必要があると再確認した。

〈母〉学校で作ったとはいえ、どのように作るかと心待ちしておりました。買物、準備、後片付けと一応ひとりやりとげました。

味の方もおいしく作り上げました。火加減も比較的上手でこげなく焼き上げましたが、最後のソースをつくることを忘れたようです。少々時間がかかるようですが、作ったということでは本人は自信がついたことと思います。

七、私の反省・感想

正直にいうと、うまくできるかどうか不安だった。何故なら、授業のときは山本君に任せきりで自分はただ見ていただけだった。授業中はやることなく、パンをちぎったりするぐらいのことしかできなかった。今日は全部自分でやらなければならぬ。ちよつと「きついな」と思ったが、トライ精神でやることにした。そして、食パンの代わりにパン粉を使った。

作っている間中、本当にできるかな、と考えながら作っていた。一番むずかしかったのはフライパンに入れて焼くところだった。何分位火にかけておけば中まで焼けるのかわからなかった。だから最初に焼いたものは四回もひっくり返したため、表面がかちかちになるという結果をまねいた。だが失敗は成功のもとというので、次に作るときは失敗しないようにしたい。

ハンバーグを焼きながら、「にんじんのバター煮」を作ったが、これは簡単だった。なべに水、バター、砂糖、塩を加えておけば

出来上がった。

今日は自分自身で実際に作ってみて、材料さえあれば作り方は簡単で、いつでもすぐに作れるということがわかった。自分で作ったものを自分で食べる。これは格別においしい。家族もよろこんでくれたのがうれしい。

(7) 家庭実習の感想発表会

感想の発表をしたあと、手づくりの意味とインスタント製品を使う場合に考慮すべき点を考えてみる。安全性、作る時間、値段、味、好み、愛情などについての意見が出るので、これらは今後の価値判断の基準であるのでよく頭に入れて食品を選ぶときの判断をするように話す。また選択の自由はあるが、その選択のしかたには、その人の教養が現れることをつけ加えてまとめをする。

(8) スパゲッティ・ミートソースと果じゅうかんの調理実習

①準備 ②作り方・手順 ③調理実習 ④各自及び各班の調理反省

(9) 家族のためのスパゲッティ・ミートソースづくり

前回の実習のレポートと同じ生徒のものを次に紹介したい。家庭での実習の様子及び、次第に自信をつけてゆく過程に注目して読んでいただきたい。

家族のためのスパゲッティ・ミートソースづくり

ミートソースづくり

一、実施日

二年 黒川安正

二、材料・分量 四人分

〈スパゲッティ・ミートソース〉〈果じゅうかん〉

三、一人分の費用

スパゲッティ 35 円、ひき肉 180 円、たまねぎ 26 円、角かんでん 12 円 合計 251 円

その他のものは家にあったものを使ったので費用は不明。

四、所用時間（準備↓盛りつけ）

二時間

五、盛りつけ図

六、家族の感想

〈父〉スパゲッティだけの外食はした

ことがあまりないが、なかなかの味であ

った。作る時間がかかった割に食べ

る時間が僅かである点をどのように考えるか。反省に役立つ

のと思う。

〈母〉ミートソースは一時間も煮込みましたので、とてもおい

しいものを食べさせてくれました。スパゲッティ自体は少々ゆ

ですぎかなという感じでしたが、他の人は感じないようでした。

みかんはみかんの絞り方が雑であわてて作ったようでした

が、味の方は美味でした。

自分独りでも落ち着いて作れば出来るということでは自信が付

いたことと思われま

す。

七、私の感想・反省

学校での実習のときは、スパゲッティをゆでるとき塩を入れ忘れ、おまけに水からゆでたような記憶がある。時間は 23 分位かか



ってしまった。おかげで麺はねばねばして五、六本くっついてい
るのもあった。家で作るときはこんな失敗はしないぞと心にちか
った。

家ではなんと12分でゆで上がった。それは水をふつとうさせて
から麺を入れたからである。

ミートソースの方はちよつと失敗したかなーというところだ。
何故なら、火を強くしてしまい底の方を焦がしてしまったから
だ。また、たまねぎの量のことだが、たまねぎの量を多くしてし
まい心配だった。しかし、いざ煮込んでみるとちよつとよくなっ
た。最初は水気も多く、たまねぎの量がすごく多く感じられたの
だが、煮込んでいるうちにその感じはなくなつて、合計一時間も
煮込んでいると煮込み上がったときは適当なとろ味になつてい
た。

果じゅうかんを作るのは二度めだ。しかし、今回は時間があま
りなくて雑に作つてしまい、みかんのうす皮が二、三枚入つてし
まった。味はあまり甘すぎもせずよかった。

これでハンバーグステーキもスパゲッティ・ミートソースも作
れるようになった。今年の夏のように母が田舎へ行つてしまつた
ときに是非作ろうと思う。料理が二つも出来るようになって万々
歳だ。

(9) 応用発展のために

ひき肉料理を更に上手に作り、レパートリーを広げるために応
用発展のための課題を出した。ちよつと年末年始の忙しい時期に
当たるため、「一食ぐらい家族のためにひき肉を使った料理をつく

つてみよう」と家にある料理の本を参考にして作るよう呼びかけ
た。これは自由課題として提出させたのだが、各クラス提出率は
大体50%であった。

生徒が作つた料理は、ぎょうぎ、しゅうまい、ロールキャベ
ツ、オムレツ、ミートボール、ミートローフ、チャーハン、肉じ
やが、とうふのそぼろあんかけ、などであった。

四、筋が一本通っていること

中学生の発達段階は小学校と大きく異なっている。内容の記述や
語句の難易さや、技術の程度が小学生向けより高度になっているだ
けではなく、教材の種類や配列や学習方法が中学生の発達段階と即
応していることが肝心である。特に理論と実践の間に筋が一本通つ
ていなければならない。つじつまが合っている場合には頭の中にス
トンと入り、納得がゆくのである。つじつまが合っていることには
喜びを感じたり、好奇心をそそられたりするようだ。その逆の場合
は不安感にかられたり、不信感が生じ、行動にまで混乱が及ぶ。即
ち、生徒たちは常に一貫性を求めているということであろう。内容
の構成、理論と実践の間に筋が一本通っていること、一貫性がある
ことが大切であり、「なるほど」と彼らを納得させることができた
とき、良い学習がなされたのだと思う。

(武蔵野市立第四中学校)

NHK「NC9」と「私の家庭科」

福島 澄香

家族でNHKの「ニュースセン
ター9時」を見ていて驚いた。

アメリカの民主党大会で、核を
中心とする軍拡路線のレーガンに
対抗して、副大統領候補に女性の
フェラーロ氏が選ばれたことが報
道された時のことです。

「女性たちがその気になれば開か
ない戸はない。核を凍結し、子ど
もたちに、せめて平和な緑の地球
を残したい」というフェラーロ副
大統領候補の力強い話に、NHK
は「母親ならではの演説でした」
と評し、フェラーロ氏の生いた
ち、家族、活躍ぶりを写真、ビデ
オで紹介した後、その報道のま
めの形で、最後に男性アナ氏い
わく「チョット気になることは、初
めの写真では栗色の髪のように思
われるのですが、最近の写真では
金髪になっています。人気とりの
ために金髪にしたというような…
…下司の勘繰りでなければよいの
ですが……」で終わった。

私の横で見ていた娘がすかさず

「失礼ネ！」と小さく叫んでテレビの前を離れていった。「何という
ことだ」とリラックスして見ていた夫も身体を起こして不快感な顔
を向けた。

事実の映像は、フェラーロ副大統領候補を熱烈に支持するさまざ
まな色と顔の女性たち、「核の凍結」「男女の差別賃金に反対」「福
祉切捨てに反対」「党の政策委員長としての活躍」をみせていた。
私はその事実の映像からアメリカ国民の普通の人たちが広範に参加
し、平和を強く希求する運動と、母親だけの顔でなく、勤労者・市
民など色々な顔を持った女性の社会進出と、男女差別を許さないア
メリカ女性の熱い思いを、フェラーロ副大統領候補とその熱烈に支
持する人たちに感じていたのに……。NHKの指導部は、何という
ことを男性アナ氏に言わせるのでしょうか。

NHKは、テレビ一台持てば受信料として年間ほぼ一万円を半ば
強制的に取る。その理由の一つに報道の「公正」があつたはず。最
近、報道されるべきものが報道されないだけでなく、特に「公正」
を欠き、企画・内容ともに、巧みにゆがめられていることが多くな
ったように思う。

「新しい家庭科を創るために」にかかわる問題としても、NHKの
「ニュースセンター9時」は見過ぎすことの出きない報道があつた。
6月18日NHKの「ニュースセンター9時」が「あらゆる婦人に
対する差別的撤廃に関する条約」の批准を来春にひかえて、文部省
がやっと重い腰をあげ、家庭科の男女共修を検討する委員会のメン
バーを発表したことを報じた時のことである。

家庭科の男女共修の実例が少ないこと、その少ない実例の授業風
景として、東京都立赤羽商業高校で、男女の生徒が「裁縫」をして

いるところと、東京都立第二商業高校で男生徒だけで「卵焼き」をつくっているところが映された。しかし、その授業風景は何を縫っているのか、どういう授業なのかも全くわからず、「家庭一般」の男女共修の授業では考えられないような生徒数の少ない閑散とした教室で「何で男がこんなことをやるのかわからない」と元氣のない男生徒の声を伝えた。

他方男生徒だけの別学では卵焼きを作っていた男生徒は照れながら「案外面白いですよ」。それを窓外から見ていた女生徒は、「家庭科を（男生徒が）やることは将来、役に立つんじゃないですか」。家庭科の教員は、「男生徒は家庭科を中学でやっていませんから女生徒の足を引張らないように男女別学でやっていきます」というような授業風景をみせた。その後家庭科の男女共修をすすめる会の集会（6月16日）で決議文を読む「すすめる会の世話人」の馬場洋子さんの姿と、和田典子さんの「男女とも生活者なのですから、その能力を育てるために家庭科は男女共修でやるべきです」という声を、ほんの付けたりにチョコツと映し、そして最後に男性アナ氏に、「男生徒の中に家庭科共修の意義を見い出せるような意見は少なかつたようです」と「ニュースセンター9時」の意図を象徴するような「冷笑」と共に締め括らせた。

いかにも学習権を持った生徒を中心に、教員、市民運動を映し、公正に報道しているようですが、一般の視聴者にとって一番印象に残る中心の家庭科の授業風景は、なんともみじめな映像だった。

授業中の生徒がカメラを避けるような生気のない様子は、生徒が「ニュースセンター9時」の視点の屈辱を敏感に感じていたからではないか。教室の外にいた女生徒が、いきいきと「男生徒が家庭科

を学ぶことは良いことだ」と話すのとは対象的だった。私たちが家庭科の授業で日頃接する生徒は、男女ともあのテレビに出てきた女生徒のようにいきいきした、若さ溢れる生徒たちです。テレビに出されたあの男生徒のように生気のない様子は、いやな時、不満な時に示す生徒のサインだといえましょう。

そんなテレビを見せられた一週間ほど前の6月12日（火）夜、十時頃NHKの「ニュースセンター9時」の男性担当者から、私のところへも電話があった。

「男女が家庭科の実習をしているところを、とらしてほしい」、明日にも行きたいような突然の話に、一日の仕事をやっと終えてポケッとしていた私はびっくりしたものです。以下は、その時のやり取りである。

「今、どんな授業をやっていますか」

「合成洗剤の商品テストを中心にした生徒の自由実験をやっています」

「……調理実習はやりませんですか」

「やりますけど。例えば(1)手造りハンバーグの調理実習をやり、生徒の好きなハンバーガーや添加物の多いインスタントと比較しながら、外食や調理加工食品の多くなっていく現代の食生活について考えたり、(2)5〜6名の班員を家族にみたて、その家族の食事（献立・買物・料理・テーブルセッティング・後片付け）を1〜2名で調理実習し、その体験をもとに、生徒たちのほとんどの働く母親が家族のためにやっている家事労働について分析し、自分たち（男女生徒）の生活の自立と、家族として共に生きるために家事労働への参加について考えるというように」

「ハア……」

お気に召さないようなので、「NHKの『ニュースセンター9時』はどこなところを写したいのですか?」

「例えば、男子がフライパンや包丁を使ったり、目玉焼きを作ったりしているところとか」

(ムッ!) 「NHKは、高等学校の授業で、家庭科の時間に目玉焼きを作らせて高校生に何を『学ばせよう』と考えておられるのですか?」

「……」

「私はたいした授業はやっていませんけれど、授業をする時には、その時間のテーマがあり、高校生の年齢に応じ、『学んでほしい』目的があり、それに向けて授業が展開されていきます。『目玉焼きを上手に作りましょう』なんていう授業はできませんよ」(女性の小学校長のベテラン大先輩にこの話をしたら、「何ですか。それは小学校の男女共修家庭科でやっていることですよ」と憤慨された) 「男生徒に目玉焼きなど調理するだけのところを映して、高校の男女共修家庭科の授業などと紹介されては困ります。料理学校ではないのですから。『婦人差別撤廃条約』の主旨に沿って家庭科の男女共修を報道されるという初めの話とは全く違ってくるではありませんか。そんなものを映しに、わざわざ遠くまでおいでになることはないでしょう」

「どこか他に男女共修で家庭科をやっている高校はないでしょうか」 「神奈川では定時制高校で『家庭一般』を四校で、全日制高校では川崎市立高校で食物選択で一校、県立では教育委員会の研究指定を受けて男生徒が家庭科を履習しているところが一校あります」

と紹介して、長い電話を切った。

これで話は終わったものと思っていたが、翌日(水)学校へ度々電話があったそうで、午前中四時間の授業を終え、こちらから電話をすると、「男生徒が何か縫っているところをとらせて下さいませんか」と言われた。「無理ですネ。なぜそんなにNHKは『料理』と『裁縫』にこだわるのですか?」

「先生方は色々いわれますが、家庭科は衣・食・住の三つの生活技術を教える教科に集約できるのではないですか」とNHK氏。

「そうでしょうか。文部省でさえも、もう少し幅広く考えているようですが……。私は衣食住の問題だけでなく『家族・家庭の問題』をやらなくてはいけないと考えています。そこでは、性、結婚、育児、教育、自立のための社会労働と家事労働への参加、高齢化社会における老人介護の問題など、生徒が生きて行く上で現代生活の緊急な課題が沢山あります。『社会科』『理科』『保健』などで学んだことを基礎に、生徒自身の具体的な実習や体験を通して、バラバラな技能や知識でなく、生徒の生活を基礎にトータルな生活力が付くようなことを『学ばせたい』ですネ」

「衣・食・住も生活技術だけでなく、憲法の『健康で文化的な生活』の実現を目標に、生活文化を考えていきたいですネ。『家庭一般』は普通教科としてすべての高校生が週四時間履修する授業とするには、教科内容を生徒の生活に応じて『精選』すると、食・住・衣の順になるでしょうし、既製服の利用がほとんどの現代生活では、縫うことの意味も取り上げ方も従来とは違ってくるのではないのでしょうか」

「私が、NHKの家庭科の男女共修をすすめる授業として御要望の

『目玉焼き』を入れて考えると次のようになります。朝食を食べない生徒が多いので、「朝食を考える」というテーマで生徒が調理実習をする。そこを写して下さるなら協力しましょう」

「どういう画像になるんでしょうか……」

「コマ数は少ないのでしようから、授業のテーマと朝食を摂った時、摂らない時の生徒事例の栄養比較表。どうしたら良いか生徒が生活者の自立の視点から考えたことなどを模造紙に書いて貼って置きます。それを背景に生徒が実習しているところを映して下さい」

「生徒は44名、男女混成の8班に分れています。朝食を摂らない生徒の事例を補う形で、各班が異なる朝食メニューを考え、調理してもらう計画です。これから生徒に提案してみようと思っていますが、生徒が「やろう」ということになれば朝食づくりという実用的な調理時間は30分位でしょうから、NHKのお望み通り『目玉焼き』も出てくるでしょうし、エプロン掛けの男生徒が中心になって調理に奮闘する姿もみられましょう。女生徒の周りをうろうろして女生徒にハッパをかけられる男生徒もいるでしょうネ。フッフ……」

なにしろ28人位が適当規模の実習教室に、元気な生徒が44名（昨年は46名）詰め込まれて調理台の周りにひしめき、朝の魚市場のようになら若々しく活気あふれる何時もの騒ぎになって、さぞNHK氏も驚くだろうとおかしかった。

「先生に質問する場合もあると思いますので……(1)文部省の家庭科の内容について、どう考えていますか。(2)男の子が家庭科を学ぶメリットを一言でいって下さい」

私の話を聞いた後、「では相談しまして今日中に電話します」と話は切れたが、夕方六時過ぎても連絡がない。しかたがないのでこ

ちらから「どうになりました？ 私、家に帰りたいんですけど」

「どうも済みません。今夜中に、きつとお宅の方へ連絡しますのでそれまで待って下さい」と言う。しかし、その夜も、翌朝も連絡がない。放って置こうと思ったが、もし、ビデオを取ることになると明日（金）しかない。急にいわれなくても困るので、しかたなく忙しい授業のあいまを縫って時間割変更を頼んで回り、一応準備して置くことにする。

生徒たちは「一生懸命やるからサー」やろうという。各班の朝食メニューは、すぐ決まった。何時もよりスピーディーな話し合いである。張り切っているのだ。

「一班は何作るの？」

「ベーコンエッグにパン、グリーンサラダ」

「ベーコンかりかりに焼いて、その油で目玉焼きやくんだよ」

「西部劇風ネ」

「オレにまかしといて」

野球の練習で日焼けした顔が笑う。

「脂濃い嫌いよ！ 肥るもん」

「ドレッシングに酢をきかせばいいんだよ」

「野菜や、わかめの味噌汁でも付けたら？ 脂濃いのにあうわヨ」と私。彼は立ち上がって「だめだめ。熱いコーヒード」。

今日は、すっかり彼のペース。

「インスタント使うの？」といやな顔すると「違う、本物。おいしい番高い豆何んていったケ？」

「ブルマン」

「よし、それでいこう」

「無理しなさんナ。普段の食事で庶民的なのがいいわヨ」

「いいの。NHKごのみなんだから……」

どっとみんなと笑い出してしまった。

「先生！ 白衣がいいカナ、エプロンがいいカナ」

「どっちだって変わらネエヨ」

「私がアンタに似合うエプロン持ってきてやるからサ」

「先生！ この頭でいいカナ」

何時もは自慢のパーマで縮れた頭を突き出す。

「オレ上手に作るからサ」

「真面目にやれば写るカナ」

「ウン。ウン」

かくして買物の手はずも整い、NHKのカメラを待つばかり。次の休み時間に教室前の廊下を通ると生徒が口々に「先生NHK来るんだって？ あたしたちのクラスは映さないの」

「女の子だけのクラスは映らないの」

「なんでー」

「生活マンガ」の

藤田健次さん

はるばる来ました青森県八戸市。

ドキドキソワソワの初対面。マンガよりちよっと年を経て、頭は坊主刈。メガネの形が変わったかな？ お嬢さんたちも、もう高一、高三。

「そんなの差別だよ」

笑いながらブーブー。ホッと一息ついている昼ごろ、NHK氏から電話で、「これ以上、御迷惑をかけられませんので今回は結構です」に、生徒のがっかりする顔が思われて、思わず「昨夜のうちにいつて下さればいいのに」と文句をいつてしまった。

「経済的な負担はNHKで払いますので……」

「いいえ、生徒に中止の連絡をすれば済むことですから……。ただ生徒が張り切っていますので……」

「先生の權威がなくなる……」

「權威なんて初めっから、ありませんヨ」（冗談じゃない！）

全く話がかみ合わない。その夜、遅く「ニュースセンター9時」から丁重な挨拶があったことはお伝えしておく。

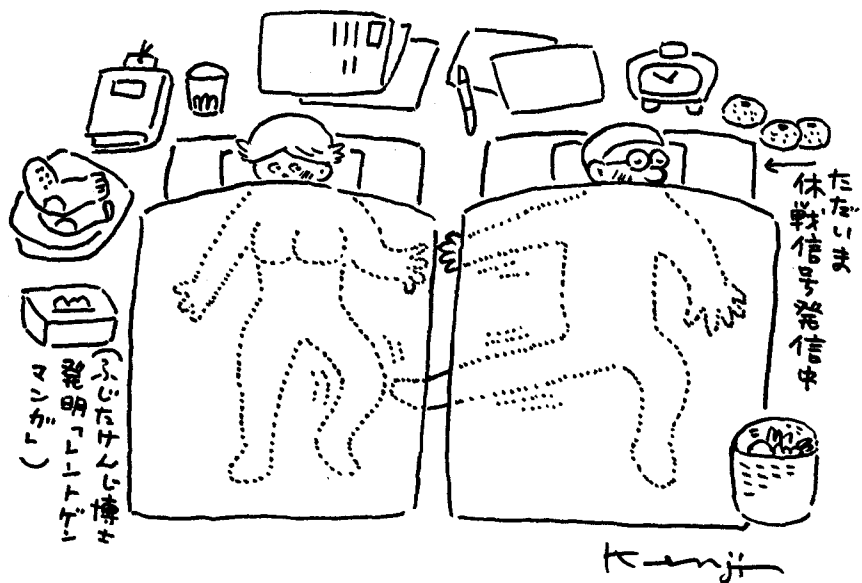
しきりに残念がっていた生徒も、前述の6月18日NHK「ニュースセンター9時」で報道された「家庭科の男女共修？」をみた翌日、暗く厳しい顔で、「ひどい」といったきり、誰も話題にしなくなった。（神奈川県立相原高等学校）

「生まれは津軽、雪の長い冬でも家の中で何か作っていて退屈しなかったナ。マンガも小学生のころから描いていた」

沖縄返還デモで知り合われたおつれあいは看護婦。「夜勤つらそうです。悪い男だナ、自分の満足のために家庭も犠牲にして。夢で二人で中国に行ったので『良かったナ、明日はイギリスに行こう』って言ったら『私はそ

の夢見ていません！』って、ハッハッハッ。六ヶ所村や関根浜の原発問題は？

「大学進学率、国民所得もビリ、家庭崩壊の危険が見えても出かせぎにという県です。公務員、版画家、ライター……。多面的に物が見えてしまう苦悩であるのだろうナ……。夜、若者たちのコンサートがあり、藤田さんは作詞『ありがとう』を聞いた。（中野敬子）



妻

いさかいて
憎しみ去りて
ふれ合いし
妻あたたかく
妻やわらかく

視点

〈表現〉

長谷川

孝



医療は医者が施す

裁判の判決は判事が下す

福祉は行政が与える

平和は軍隊が保つ

教育は学校（その教師）が授ける。

ナンジラ、ソレヲ オカミカラ 受ケヨ

ソレヲ受ケルコトガ、權利ナノダ

医者モ判事モ役人モ軍人モ、ソシテ教師モ

オカミ、ガ恵ミタモウタノダ

オカミ、ヲ信ズレバコソ、ゴ利益アリ

ナンジラノ為スコトハ

信ジテ受ケルコトノミ

信ジレバ、アリガタイ、ノダヨ。

施され下され与えられ守られ授けられ

「られる」のに、

すっかり慣らされてきたけれど

なんか、おかしいぜ

オレは、どこへ行行ってしまったんだ。

オレをオレに返してくれ

オレの心とからだをオレに返してくれ

オレの心とからだは、オレが自分でつくる

ご利益なんて、いらなからさ。

オカミなんて、^{かんけい}んげーねえーんだよ

「教育」してくれなんて、

頼んだおぼえはないんだから

「教育される」責任や義務なんて

どこにもありはしないんだ

放っておいてほしいね。

かつてに学び遊ぶのを

「生きる」場に、ふみこまないでよ。

「教育」って、なんだろう、いったい

医療、判決、福祉、管理された平和

どれもこれも、学校教育のスタイル

施され下され与えられ守られ

そして授けられてばかりいると

「おのれ」を見失われる

「まなび」を萎えさせられる。

教育とは——《人びとの「まなぶ」行為を組

織する、社会的なひとつの方法である。とく

に、学校制度に編成された教育は、《まなび》

の主体性と自律性を損つてしまうほどに、強

力に《まなび》を組織するものとなり、学校

教育に組織されていない《まなび》には価値

がない、と人びとが思いこむほどに、現代を

規定するイデオロギーとなっている》

“教育主義イデオロギー”と、わたしはいう

学校制度の「教育を施す」思想

すべてを「教育」から発想する視点

すべてを「教育」の視点から始める発想

子どもたちを「加工」の対象とする活動

子どもたちに「品質」マークをつける仕事

人材という資源を掘り出し精錬する工場

人間には「教育欲」というのがあって

ついつい、教育したがるものだという

教育された深層心理のキズあとが

教育しかえそうと、うずいているから、と。

そういえば――

教えた人があふれていて
教えることは正義、生き甲斐、人たる使命

いつか教える立場になりなさい

いっぱい「教えられ」なければ、

教える人には、なれないのです。

だけど、わたしには

親から「教育された」という記憶は
ほとんど、ない。

学校に行っていた長い時間のなかで

しばしば点数におびえながらも

だんだんと「教えられる」ことから

遠のいていったような気がする。

だから――

わたしは教えられたくない

教育したいという気にもならない

自分がいやなことを他者にするなんて

うしろめたくて気恥ずかしくて

「教育する」なんて、できっこないさ。

あれは、中学校を卒業するときだった。

担任の教師に、わたしが、ふとふいに

「教師には、ぜったいになりません」と

いい放ってしまったのは。

いまもリアルな印象

「教える―教えられる」という

固定的で支配的な人間関係に

おのれも他者も、巻きこみたくはないもの

でも教師になったなら、きっと

熱心に一途に大マジメに

教育しちゃうにちがいない

わたしの姿が見えるようだ

いま、思いかえしてみると。

自分の性格と教育にたいする直感が

あのとき、あのことを

はき出させたのにちがいない。

わたしは、どこかしらで

「教育欲」を「表現欲」のなかに

解放してしまったのかもしれない

認識とはほんらいは

教育されることはかわりのない

自己の内部での〈関係の凝集〉だと

無意識ながら気づいていたのかもしれない。

教育を受けるといふ関係は、

わたしが人生のなかで持つはずの

多様で複雑な、いろいろな関係の

たった一つにすぎないのだから。

心の底をかきみだしても

思いを紡いでみたい

ことを吐き出してみたい

たとえ未熟でも、つたなくとも

聞いてほしい、話し合いたい

心の底でことが揺れてみだれて

ノドがケイレンしそうなときでも

話してみたい、聞いてくれますか。

でも、それでもしかし

表現は自分のためのもの

わたしの表現が、たとえ虚空に散ろうとも

それでいいのです

だれにお仕着せることができようか。

なるほど、ただどね

なるほど、そうだね

そこから先は、あなた自身の

〈まなび〉と表現。

批判しようとするや否やと聞き捨てようとして

わたしの〈まなび〉と表現とを

あなたは助けてくれているのです。

「教育をしたがる」という気持ち

つまり「教育欲」というエネルギーを

他者にじかにぶつけず

おのれの内部で自分につけて

表現に燃焼しつつしてしまえばいい。

* 佐々木賢著『学校を疑う』(二書房)から。

* 表現は、ことばでも、絵でも演劇でも、もの

づくりでも、スポーツでも、なんでもいいの
だけだ。(教育評論家)

―現場から―

「寄り添う」

その2

児玉 すみ子

の応用 counselingの応用 counselingの応用

不幸の中にある魂

これは、シモーヌ・ヴェーユの言葉である。生きる悲惨や非情の中で踏みにじられ、傷めつけられ、萎え衰えた魂の不幸を語って、この人の右に出る者はない。

私は、Sの事件の詳細が明らかにされた職員会議で、最初のうちは、「何故、Sがそんなことを……」という疑問を解こうと、発言に耳を傾けていたのだが、あれこれ意見やコメントが飛び交い、臆測や断定が下され、学校の名譽毀損だと怒りが表明され、Sのこれまでの小さな行状が大々的に披露されていく内に、私の心の奥深いところが、鋭利な刃物で突きさされるような思いがしてきた。

まるで、生皮を剥がれた小兎に、健常で大きな仲間たちが、寄ってたかってその傷口を晒しているかのような実感がしてきた。「何故……」なんて、もう、どうでもよくなった。

今、絶対絶命の所で、千々に乱れ、さいなまれ、もがき、あがいているSの「不幸の中にある魂」に、私の魂が呼応して、痛みを覚えていくのだと、悟ったのである。

不幸の中に身を置く

ひとは、誰でも、高いもの、美しいもの、立派なものに心惹かれ、尊ぶものである。弱いもの、劣ったもの、醜いもの、愚かしいものを喜び、いつくしむひとは、まずいないといってよい。それ

は、人間の本性ではなからうか。

「幸福」を語り、描き、論じる識者の多いことも、その証拠である。「思考は、生きている肉体が死を厭うように、不幸について考えることを嫌う」のである。

不幸を眺めることが厭わしいのであれば、尚更、不幸を共に味わうことなど、シモーヌ・ヴェーユのような例外はあるとしても、ひとが能く為し得るはずはない。と、私は、自分自身を省みて、答える。しかし、Sの事件に対処する方法が、あれやこれやと論じられている間に、私の答はこの時ばかりは変わっていったのである。

寄り添う

Sに関して論評される言葉の一つ一つが、どうして、私の魂をこうまで傷めつけるのか。私も又、以前、同じような状況に陥ったことでもあるというのか。不幸なるが故に過ちを犯し、その過ちを犯した故に、尚一層、不幸のどん底につき落とされるという……そして、不幸の何たるかを知らず、ただもう幸福のみ追い求めている人々の、汚れなき手で、我が貧しき身を暴かれるという……

いずれにせよ、不幸の中に心身を沈めている人に対して、その同じ想いを味わったことのある人が採る態度は、そう、寄り添うことしかない。

「寄り添う」これは、ヴェーユではない、私自身の言葉であった。

もつとも、ヴェーユも、次のように述べている。

「不幸のために魂を傷つけられているか、さし迫った存在の危機にさらされている人の立場にわが身を置くとは、自分の魂を虚無化することである。」

病苦にあえぐ病人には、附添い^{ツキ}が要る。病人と共にある、それだけでよい。これに如くものは、他にないのである。

罰すること

いや、悪いことをした者には、当然、罰をと、ひとは言う。「寄り添う」なんて、甘やかしではないか。けじめをつけろ、痛い思いをさせる、徹底的にやりこめろ、罪の観念を植えつけろ、かまびすしい怒号が聞こえてくる。

そうであろう。我が身のなした業を、我が身が償うのは、当然であろう。

しかし、償うに要するエネルギーは、自己憎悪、自己断罪、自己嫌悪に陥らせることによって、貯えられるものであろうか。

再び、ヴェーユを引用するならば、「真の罰は、懲戒や、報復ではなく、純粹な善に触れて、その罪人が、渴きを癒^いせるようになることだ。『何故、私は、このように不幸であるのか』とたずねる魂の部分は、あらゆる人間の内部にあって、もつともけがれた人の内部にあってさえ、みどり児のころから、まったく無垢に、^(注2)まったく欠けることなく保たれてきた、もつとも深い部分なのである」

自尊心―それは、生き残った魂である

私がSに、大した意図もなく、ただの思いつきで推薦した本、『星の王子様』の全編をつらぬく純粹な善は、思いがけなくも、Sの魂のそのもつとも深い部分に至り、つらい経過を経ながらも、S

をよみがえらせていった。

その本に表現された人間観を、みごとに咀嚼したSは、自身とかかわりのある人々に対しての観方を変えていった。そして、何よりも、自分に対する観方が変わったこと――それが、彼女を生き返らせる、最も強い促しとなった。

「本物の自分に對して申し訳ないことをしたのだ」という洞察は、彼女の中に健全な自發性を、自尊心を生み、積極的・生産的に生きようとするにつながつていった。

何をどうしていいかわからずに、けれどもただ、ひたすらに、彼女の不幸な状況に、近く、近く、寄り添っていただけの私であった。しかし、やはり、カウンセリングの真髓なる「人間が、そのあるがままに認められる人間関係のうちにこそ、人間の恢復力は芽生えるものである」ことは、実証されたといえよう。



謹慎が解けて、明日からクラスにもどるという日、私の方が、クラスの反応を不安に思い、その氣持を彼女に伝えた。

「心配は、ないわけではないけれど、一步、踏み出さなきゃ」と彼女は、笑って答えた。

「あんまり強^いくらずに、半歩でもいいじゃない」と、私は、むしろ、彼女の積極性が不安に感じられていて、そう言った。

「でも、先生。先生だって、今度のこと、私のところに来てくれるのに、勇氣を振るって、一步、踏み出したんですよ」。

私は又、負うた子に教えられたのである。

(注1) (注2) その他すべて引用は、

『シモーヌ・ヴェーユ著作集』春秋社から

再び〈倦怠〉について



思えばこの私も小さいころから、「なんだかつまらないなあ」「退屈だなあ」ということばを口癖のようにつぶやいてきました。心に巣食うこの「退屈」こそ、若年の私にとって、生きていくうえでの最大のテーマであったと言っているいかもしれません。シロアリが家の土台を食いあらすように生の土台を侵してくるこの「退屈」をどう始末するか。そのことばかりを考えながら私は日々を過ごしました。あまりに生きたがる心、あまりに求めるところの多い心、つまりは生の充溢が私をとらえ、それが現実の壁にはばまれて停滞するところに「倦怠」という逆説的事態が生じたのだと、いまならふりかえることもできますが、当時はわけもわからず、ずいぶんつらい思いをしました。

いま若い人たちの口癖は「かったるい」です。大人は、「かったるい」を連発するそうした人たちを「無気力」とそしりますが、私は自分のそうした経験から、いかにもかったるように道端にしゃが

みこんでいる若い人たちの内部に、むしろ流露する対象を見出せずに停滞している危険な生のエネルギーの存在を感じ、はらはらした思いにとらえられてしまうのです。

「退屈」ということについて、私には忘れ難い思い出があります。昭和二十年の夏、六歳の私は、父母弟妹から離れてただひとり、浜松の祖父の家にいました。前年の十一月、救命胴着をつけたまま海峡をわたって朝鮮から引き揚げてきた私たち家族は、しばらく父方の祖父の家の離れに身を寄せましたが、浜松の飛行場が艦砲射撃にさらされ、いつ米軍が上陸してくるかわからないといった風説のとぶ不穏な情勢の中で、父母弟妹の四人は茅ヶ崎の大叔父の家に難を避け、長男の私一人が祖父の家にとどめおかれました。母の話によると、武田家の血を絶やさないために一族を分散させるという祖父の方針によってそうした措置がとられたということです。小学校にあがったばかりの私は、多くの従兄姉や叔父叔母の間にまじって、大きな竹やぶのある屋敷の中、家父長制の見本のような家の中で敗戦前夜の日々を過ごしました。

ある日、村の小学校を午前中でおえての帰り道、私はひとり、背丈をはるかにこす唐黍の叢と強烈な夏の光とが作り出す濃い影の中に立ち止まりました。気がついてみると私は、唐黍の葉をみつめて立ちつくしており、と同時に、自分の心の中に、ある濃い感情の動くのを感じました。悲しいとか寂しいとか言ってしまったのでは軽すぎる、ある深い感情。おそらく私はその時はじめて、ひとりであるということと生きているということをメダルの裏表のような一つのこととして実感したのだらうと思います。小さな私のまわりに

密々とこめていたもの倦い二十年夏の暑氣とともに、私はその時の感覚を今に忘れません。

やはりそのころのある日、私は全身に吹出物ができたために学校を休ませられ、広い座敷に一人寝かされていました。家の衆は皆畑仕事に出ていて、屋敷中がしんと静まりかえっています。「退屈だなあ」と私が思わずつぶやいた時、隣の部屋で庭にむかつてすえられた机に端座して書見をしていた祖父が（私はあまり静かなので、襖をへだてた隣の部屋に祖父がいることをすっかり忘れていたのです）、「馬鹿者！ 何が退屈なことがあるか。わしがこうして横におるではないか」といきなり大喝したのです。私は子ども心に、「退屈だなあ」の一言がなぜそれほどまでに激しい叱責を招いたのかと不思議に思いましたが、その後も思わずわが口をついて出る「退屈だなあ」ということばがわが耳に入るや否や、祖父の「馬鹿者！」という一喝を思い出して首をすくめるという奇妙な経験をくりかえしてきました。

それにしても祖父はなぜあのように激しく叱ったのか。

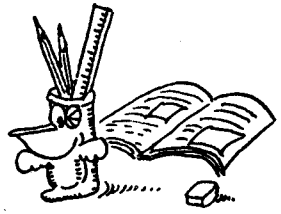
厳格ということばをそのまま人間にしたようであった祖父は、内心、父母弟妹から離れてひとり残されている幼い孫を不憫に思いながら、しかし、生半可なやさしげなことばで「退屈だなあ」というつぶやきにむかえば、それはむしろ幼ない心が耐えているつらさをおもてに引き出し、その心を破る結果になることをよく知るがゆえに、あえて馬鹿者という激しい叱責によって幼ない心のくずれるのを守ろうとしたにちがいない、私はこのごろそう確信するようになりました。

私の手許に虫食いのあともすさまじい一冊の聖書があります。裏に「昭和三十年五月八日、祖父より受く」と墨で書かれてあるとおり、高校一年生の私に思いがけず祖父が小包で送ってきてくれた聖書です。明治五年生まれの祖父が静岡一中時代に読んだものだと思います。村の旧家の長男として生まれ静岡一中に進んだ祖父は、若いころ、自分の家を継いで田舎に引きこむことに抵抗し家出までしたが、結局は連れもどされるところにもあったとききます。

明治二十年代の前半に聖書なども読み新しい世界にむかつて生きようとした青年が、現実の壁にはばまれて村にもどり、村長や小学校の校長をつとめたりしながらすごしたその後の生の内実は、いかなるものであったのだろうか。単調な村の生活の中でふと倦怠におそわれることはなかったのだろうか。そう考えると、およそ感情のくずれというものを見せたことのない厳格な祖父の「馬鹿者！ 何が退屈なことがあるか」という激しいことばは、別種のひびきを私に伝えるように思われてなりません。

おそらく多くの人が昔も今も、生きんとする熾烈な思いをかえながら、単調・平凡・繰り返しの日常に耐えてきたし、耐えているのだ。倦怠にさいなまれながら、しかし、安易に暴発することなく生きてきたし、生きているのだ。そして、この「倦怠」の始末のつけ方をあやまるとき、フアジズムの温床は醸成される。

となれば、やはりおまえは、子どもたちにむかつて、彼らの心をかむ「倦怠」の逆説的意味を低声で語り、まちがってもその「倦怠」を非日常的なものの力をかりて一気に吹きとばそうなどと考えたりしないようにと、冴えないアップビートを発しつづけよ。八月の暑さは、今年も、そのように私におしえます。



＊学習の主人公たち＊

初めての調理実習

東京都江戸川区立東小松川小学校

五年四組の子供たち

五年生の担任になりました。家庭科は、専科の先生に受け持っていたいています。初めての調理実習があまりに楽しそうだったので、その日のうちに感想を書かせました。その作文もまた楽しそうだったので、Weのみなさまにもお伝えしたくなりました。

(仁ノ平尚子)

菅野はるみ

私は野菜を切るとき、手を切っちゃったらどうしようとか、まずかったらこまるなあと思っていました。でも、トマトやキュウリを切っているとそんなことを忘れて楽しくなりました。

高井 利之

たいへんだったことはべつにないけれど、みんなと仲良くできて楽しかったです。みんな

なも同じ気持ちだったと思います。たいへんおしかったです。

下瀬 恵美

私は、初めてのサラダづくりなので少しあがってしまいました。私がやるのは、野菜を洗う、野菜を切る、あとかたづけです。あらうのはかんたんなんだけれども、きゅうりをななめに切るのがむずかしかったです。

鈴木 久代

さいしよ、どきどきしてきた。自分では楽しくできたと思う。でもフレンチソースがまじった。かたづけるときも楽しくてたまらない。たべおわって、おさをあらうとき、わからないようにしんちようにあらった。

桜井真由美

私は、朝起きてからずっと家庭科のことを考えていました。なんといったって、初めての調理実習だからです。手を切らないでできるかな、と不安でした。……少しいへんなところもあったけれど、自分でもよくできたと思っています。

寺島 孝武

トマトをぬかして、きゅうり、レタス、キヤベツとフレンチソースを手でかきまぜました。いろいろ野菜の形を作りながらもりつけしました。さいごにトマトをのせました。トマトがでかいことに気がついて、手のひらにのつけてほうちようでしんちように切りました。先生が、レタスがおいしいと言ってくれましたので、ますます自信がきました。

池場 康成

ぼくは、野菜にかけるフレンチソースをつくりました。そして野菜とフレンチソースをかきまぜることもしました。初めは、はしでやっていたんだけど、だんだんめんどくさくなってきたので手でかきまぜました。そうしたらレタスが落ちたので、食べてしまいました。

宇田川智子

私は生のサラダがこんなにおいしいとは思いませんでした。フレンチソースが特においしくてたまりませんでした。だから、だんだん



ん生野菜が好きになってきそうです。

石原 悟

サラダが好きな人もいました。ぼくはサラダが食べられませんでした。だからさとうをいれました。そしたら、あまくなって食べられませんでした。でも、おいしかったです。

井上 貴雄

こんなにかんたんにフレンチソースが作れると思いませんでした。母に作り方を教えてあげました。皿洗いもいっしょうけんめいやりました。仁ノ平先生にぼくたちの作ったサラダを食べてもらってうれしかったです。今後は家でケーキにちよう戦してみたいと思いました。

北島 真弓

私は野菜が大っきらいでした。でも、これからは好きになれそうです。人に作ってもらいより自分で作った方がおいしいです。

藤沼 敏人

次はドレッシングです。はじめはうまくいってただけど、お酢を入れはじめたらだれかがぼくのうしろをとったから、お酢がドボツと入ってしまった。それで味がおかしくなったのです。食べるようになってみんなにそれを話したら、ドレッシングを飲まされま

した。

石田 弘子

私は家でサラダを作った時があります。だから作り方はだいたい知っていました。とってもかんたんでした。でも家ではサラダにけるドレッシングは、仁ノ平先生と同じで作りません。マヨネーズやドレッシングをスーパーに買いにいけます。だからフレンチソースを作るのは初めてだったので「おいしくできかなあ」と考えながら作りました。少しすっぱかったけどおいしかったです。

越野さつき

私は初め、自信がなくて、どうしようかなあと思っていました。うきうきしていいのか？ こわがりたいのか？ が区別つかないほど自信をなくしていました。でも、キャベツを手でちぎるとき、おもしろそうだなあーと思い、やってみたら楽しくてやめられないほどでした。

小林 芳江

私は、はずかしがりやなのでエプロンを着るのがはずかしかったけれども友だちに「着な」と言われたので着ました。お料理をやって、大人になったらどんどんうまくなって料理の先生になりたいくなりました。

藤原由香里

今日は、男の子がやるとあんまりおいしくないんじゃないかな、と思いました。ところがどっこい、その反対でとても上手でした。家庭科の先生は「うん、この班はおいしいね!」と言ってくださいました。

三瓶千恵美

調理実習で包丁を使いこわかったです。でも少しぐらいまちがえたっていいよって言うてくれました。とてもうれしかったです。

岡野 真子

今君も坂井君もとても手つきがよかったです。私は不器用なんだけれども、私としてはとてもうまく切れたなあと思っています。

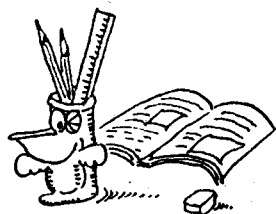
亀山 桂

自分の手で作ったりする物はとてもおいしです。今日の野菜サラダは野菜のきらいな人でも食べられるようなおいしさでした。

清水 政義

まず初めに野菜を洗うのを高井君といっしょにしました。その時、いつもなら冷たく感じる水も今日はとても気持ちよかったです。(ほんとうにうれしいサラダをこちそうさまで。楽しかったね。

先生)



*正直な感想をいうと

- ・昔から家庭科はきらいやって、今年で終わってうれし
- ・授業数が少なかった割には、いろんな課題が多く、はつきりいつて苦労した
- ・やさしい先生かなと思ってたらけっこうきびしかった。お兄ちゃんが西本先生はレポートの鬼やといってたが、本当にそうでした
- ・女子だけでなくこんなことせなあかんな。テストも一科目多いし、男子はええなあって、いつも思ってた。でも添加物のことにしても何も知らずに出されたものを口に入れてる男子が、すごくかわいそうだと思うようになった
- ・学校での調理実習は、あまりおいしいものが作れなかった。なんといつても時間

学習の主人公たち

家庭一般を学んで

兵庫県立西宮今津高等学校

(家庭科通信「うむうむ」6号より)

がたりないのが一番の原因だと思う。もう二度と作りたくないのがパン……とにかくまずかった。中学の時、家庭科は実習の時間が多かったので、座って授業をきくということは、家庭科の授業ではないような気がした

・課題もいろいろなのが出て、めんどくさいやら楽しいやら。だけど中学の家庭科の授業とは一味違うものだった。それにしてもびっくりしたのは、先生がマラソンが早かったり、スキーが上手だったことです。

・私たちの家庭生活に関連したことが多くて、深刻に考え直すことが多かった。家庭の中の小さな問題は社会的に見ると大変大きな問題だったり、私たちの知らないところで私たちにふりかかってくる

いう問題など、ふだん気をつけないといけないたくさん問題があることがわかった

・もっといろんなものを作ったり、縫ったりするものだと思っていたのに、私たちの周りにある生活問題のことばかりだったので、とてもがっかりした。授業がおもしろくないと思ったこともあった。中学の家庭科は二時間続きの日があった。高校に入ってから調理実習でまず思ったのは時間が短いということだった。やはり家庭科は二時間続きの日が必要だと思う

*一番印象に残っているのは

・最初にやった「男は仕事、女は家事、育児」の所です。あの時から少し考え方が変わりつつあって今は揺れ動いています。ホームプロジェクトで行ったゴミ処理センターです。全く関心を持っていけない所へ行って、はじめはいやだったけど、セーター内を案内してもらったりして、今はすごくよかったと思う

・食について、私だけかもしれないが、私の食は悲惨です。ごはんがわりにおやつを食べ、ごはんの時は何も食べられない……このままだと次の世代を生きる私

たちの子供たちはどうなるのかが心配です

・食品添加物のところ、あのころの授業は本当に真剣、楽しかったです

・やっぱり「いわし」おろすの家で一生けん命練習した。魚が大きらいな私だけど、自分で作ったのはすごくおいしく感じた。やらされているから自分からするという態度になってきたように思う

・老人問題と食生活の問題です。授業以外にも夏休みに老人ホームに行ったり『恍惚の人』を読んだりしているうちに、本当に身近な問題と感じられるようになりました。老人問題は本当に深刻で、私はこれといった解決策も考えつかなかったけれど、もし自分が介護する立場になったら、できる限りのことはしたいと思っています。やはり人生の最後、冷たくされ、さみしく終わるなんて、だれだっていやだと思うからです。老人問題は、人に対する思いやりとか、今の自分の生活を考え直すきっかけになったと思います………食生活の問題は視野を広げてくれたように思います。一見豊かにみえる食生活が、実はたくさん問題をかかえて

*男子にも

いる。物事を表面、見かけだけで判断してはならないとつくづく思いました。この二つの問題はいつまでも心に留めておきたいと思います

・食物のところで農業などについて勉強したこと……私もどうすればよいのか全然わからなくなっちゃったけど、家庭科でこんなに議論しあったのも初めてじゃないかと思った

・食に関心がだいぶいくようになった。住の勉強は時間が短かく、あつという間に終わったけど、もっと奥深くやってみたいかった

・衣食住どれをとっても、女子だけのものではありません。男子にも進んで参加してほしいのです。食事のしたく、子供の教育も、そして洗たく、そうじすべて女子なんてナンセンス……家庭科を学習して、家庭科はすべて頭で割り切れない教科なので、むずかしいと思いました……去年生まれではじめて老人ホームを訪れいろんなことを見聞き考えさせられました。「1+1=2」にならず、3にも4にもなるといふ人間の真理を知りました。



* 学習の主人公たち *

私たちにとって

保育の授業とは

東京都立松が谷高等学校卒業生

高橋きよみ

私たちは小学校・中学校・高校とそれぞれに家庭科という授業を受けてきたわけだけれど、ここで家庭科の持つ本来の意義について少し考えてみたいと思う。

そこで、小学五年で始まった授業の内容を一つ一つ思い返してみる。小六・中一・中二……どんなに考えてみても裁縫と調理実習といういかにも一般的な内容しか頭に浮かんでこない。しかし、高校では内容がかなり違ってきていることに気が付く。裁縫や調理実習という家庭科の中ではメインとも思える内容は、高校三年間のうちのほんのわずかであり、授業は女性問題、差別問題など広範囲にわたって進められてきた。

中でも「保育」の授業は、保育者を目指す

私にとって深く考えさせられるものであり、人間としてもとても勉強になった。そして、そこで学んできたことが、人間が人間として生きていく上でどんなに大切な事柄であったかということ、を、大学生になった今、講義を受ける中で改めて思い知らされている。

私の高校では、三年になると家庭科の選択科目として被服・食物・保育の三つが用意される。私は大学で専門的な勉強をする準備として保育を、期待と不安を胸にしながら選択したのである。そして、授業は原始時代からの児童観の移り変わりから始まって、生命の誕生（受精のしくみ）について、ベトナム戦争で行われた枯れ葉作戦により子供たちの受けた被害（奇形児）について、狼少女の話为例に人間の発達について、子どもとのかかわりや環境づくりについてなどを、ビデオやフ

ィルムをまじえながら行われていった。

それは決して簡単な授業ではなかった。先生は人間として生きる限り誰しも考えていかなければならない様々な問題を、一年間を通して私たち生徒に投げかけ続け、私たちは一つ一つの問題を真剣に考えていった。難しい授業ではあったけれど、それなりにとても興味深く、私の中で子供に対する観方が変わってきたのも事実である。そして、高校の時にこのような問題について学べたことをとても良かったと思うし、それを教えてくださった芦谷先生には本当に感謝している。

しかし、ここで残念に思うことが一つだけある。それは、男子が一人も保育を受けていなかったということだ。女子の必修科目というわけでもないし、男子が受けてもかまわないものの、どういうわけで女子だけが集まってしまっているのだろう。保育という言葉に無関心だったからなのか、それとも家庭科の中の保育ということで「女子」というイメージが強かったからなのか、理由はどうあれともかく私にしてみれば、一人でも多くの男子と一緒に考えてもらえたらどんなに良かったか、と思うのである。保育というものは、保育者になるから、母親になるから、学んだ方

が良いというのでは決してない。職業や男女を問わず、人間一人一人の心の中に常に置かれてあるべき問題を、具体的に引き上げていくのが保育なのだから。

家庭科というものは、国語や数学などでは教わることでできない、こういった人間的な学習のできる唯一の科目である。その家庭科をいくら女子が勉強したとしても、それはシーソーに一人で乗るようなものではないだろう。もう片方に誰も乗らなかつたら、シーソーは釣合うものではない。その片方に男子が乗ってこそ、初めて釣合うのではないだろうか。そして私は、そこから家庭科の持つ本来の意義というものが見え始めてくるような気がしてならないのである。

花輪 智恵

高校に入って、家庭科の中に保育という授業があった。これは必修ではなかったのだ、生徒の中には取らない人もいた。高校を卒業して大学に入った今、保育を取ってよかったと思っている。大学の友人に、保育の授業が高校時代あったと言うと「へーえ、めずらしいね」とか言う。皆、保育の授業はなかったようだ。

さて、保育の授業ってどんなだろう？ きっと保育園とかで実習みたいなこともするのかな？ といういろいろな時期があった。ところが、初めの授業からプリント。少々がっかり。しかし、だんだん授業が進んでいくうちに、先生や、先生の子供の体談やビデオなどが教材として使われ、とてもおもしろく、授業を受けることができた（実践があったら、もっとよかったのに）。それらの資料は今でも大切に保存してある。

ところで、大学に入ってびっくりしたことがある。高校の時、保育でやった内容（子供って何だ！ というテーマで子供の歴史を学んだこと。妊娠・出産の科学の中での資料やビデオ）などが、教育心理学や生物学の講義の中に出てくる。特に教育心理学の講義では資料やビデオで見たこと、ノートに取ったことが、とっても役立っている。本当に保育の授業を取ってよかったと思っている。

私にとって、高校でやった授業で一番役に立っているのは、英語や数学や国語ではなく、保育の授業だ。先生とかかわりが一番持てたのも保育の授業だと思う。講義中、保育でやったことが出てくると、その内容と一

緒に、先生が一生懸命黒板に書いていた姿が浮かんできてる。先生が教科書ではなく、先生独自の教材を使い、私たちにいろいろ教えてくれたことが、どの教科よりも一番心に残り、また実践していく上で、私に役立っているんだと思う。

情報《小・中・高一貫した技術教育を――二部会》

国立教員養成大学の人たちで組織されている日本教育大学協会第二部会技術・職業・職業指導部門が7月27日、「小・中・高校に一貫した技術教育を確立するための提言」をまとめた。

（小、中学校は省略）高校では、「職業技術」に関する科目を、選択必修として設置を提案。現行の「家庭一般」四単位の内容を十分検討して、生活設計を主とする内容と生活技術を主とする内容、各二単位に分ける。「職業技術」に関する複数の科目と「家庭」に関する二科目をくくり、男女すべての生徒に「職業技術」と「家庭」を各々一科目以上、合わせて三科目六単位を選択履修させる――など。

今、しなくちゃいけないこと

鈴木みち子

妊娠中絶剤「プレグランドイン」が公表されて数ヶ月たったけど、私の中にはやっぱり「いいのかな？」という思いが消えないのね。プレグランドインというネーミングは、プレステグランドインという筋肉（体中の）に作用する薬から取り出したものでね。一番最初は、妊娠中に自殺未遂をしたアフリカの女子大生をモルモットにして「中絶」を試みたわけ。体中の筋肉の収縮するプレステグランドインだから、子宮にも収縮作用を起こさせられるということだね。彼女は、二日間プレステグランドインを点滴されて、中絶に至ったけども。資料を読んでいて、ものすごく腹がたったのは、冷たく「いくつかの（というのはいくつかの）と言ったことだけ」臨床例の内……と言いつつ放っているのね。いくつかの例は全部女のからだだし、ピルのプエルトリコの女たち、デポプロベラの第三世界の女たちのからだと同様、低い階層の女たちをターゲットにして臨床実験をしているに他ならないのね。

そして資料の中では、「副作用として、頭痛・吐き気

・めまい等が起きます。その程度によって使用を中止すること」とまでもや冷たく書いてあるわけ。その大嫌いな頭痛や吐き気がどうして起こるのか、その不快なものに対してプレグランドインを使いながらどう処置をして行くのかは全くないのね。女たちは「中絶」に緊張しながら、その中で頭痛や吐き気とも闘わなくてはいけないし、まして中絶中に頭痛のために薬を投与するのをやめちゃったら、「中絶作業」の方はどうなるのか。中絶作業中の女からだはどうなるのかなんて全くふれてない。弊害が出たらやめればいい、という見方は一見やさしそうだけど、医療の側の言いのがれのよいうな気がして仕方がないのね。終局的に万が一のことが起こった時にも「薬を投与するのをやめました」あるいは「薬を投与するのをやめるように指示しました」と言うに決まっているし、医療の側の責任も「中絶」という現場では、「女からだ」に全面的に責任をおしつけて来ることになると思うのね。

副作用もさっきのここちよくないものの他に、「ひどい下痢」が書いてあるのね。私の体験から押し進めてゆくと、ひ

どい下痢をするとお腹の中のことが子宮の筋肉に作用して子宮が収縮したりするのね、よけいな事だけど、妊娠中に食べ物に気をつけて！とか、寝冷えをしないで体を冷やさないで！というのは、下痢をしないで！と言ってるのと同じだね。

副作用の中の下痢は「ひどい」じゃなくて、「死ぬ程の下痢」だということだと言っても過言ではないと思うのね。私は十数年前に妊娠していると感じがいをして、「通経剤メスコン」というのを成分表も見ないでとびついて飲んでひどい目にあっているから、プレグランドインのことを読んだ時にパッ！とひらめいちゃった。「あいつと同じだ!!」って。

従来の中絶を選ぶか新しい方法を取るかは、個々人の意志だけれど、その前に考えること、しなくてはいけないことがいっぱいあるのよね。

中絶は最終的には「女のからだ」が背負うものだけれど、それ以前は、男と対等な状況で中絶にかかわることだって思っているわけ、私はね。望まない妊娠、望まない出産、望みの中絶にかかわることを、全部、まるで、女が避妊をなまけたことへのオトシマエのように言うし、うっかりすれば本人までが「計算まちがいしちゃって」とヘラヘラ言うに至っては、ナンダコイツ!! と

思っちゃうのね。中絶は避妊じゃないということをもう一回きちんと皆確認してほしいし、伝えてほしいのね。というのは、「麻酔なしで出来ますよ」なんていう甘いコピーのメスコンやプレグランドインは、うっかりすると「避妊薬」とごちゃごちゃに考えている人はいっぱいいると思うのね。女だけじゃなくて、男もね。「大丈夫だよ。プレグランドインっていうのがあるから、今避妊しなくても平気だよ。だから、純生でやろう!!」なんていうバカが出て来ると思う。思うじやなくて、今だっているよね。「オロセバヨイ」と思って避妊をなまけてる人たちって。

私はね。中絶剤がどうのこうのよりも、中絶というのはどんなにいい方法があっても、女にとって明るくポップには語れない「出来事」だとずっと考えているのね。

正しく、からだに安全な避妊方法や、性のコミュニケーション、セクシュアリティを正しく子供たちに伝達してゆかない限り、わけのわからない「おくすり」を黙認して使ったり、手術台に登ったりする人の数は減らないと思うよ。

教科書の中の「性」にかかわる部分の少ないこと少ないこと。人間の一番の基本は、「自分の性・セクシュアリティ」なのに。そこをとりはずした「大人」がいるから、いつまでたっても「十代の性」だけさらしものになっているんだよね。今、大人も子供も本気で「性・生」を考えないと（性交為じ

やない性だよ、個人のものとしての人生が、知らない人に知らない内からめとられちゃうよ。おくすりといっしょにね。

性にかかわること、と言うと女が全部うけおうみたいに思っているかもしれないけれど、男がうけおわなくてはいけない所もあることを私はきちんと伝えていきたいし、男と女だけじゃなくて、人間同志としてやってゆくのには、「性」の持つソフトな部分、ハードな部分を大人にも子供にも話していかなければ、と考えているの。学校や親が「ヘンサチ」とか「ナイシンショ」にはかり気

子どもたちと自然

教師になって十一年目、障害を持つ子どもとかかわりが全くなかった私は、今年四月、初めて障害児学級の担任になりました。我が子三人を育ててきたという母親としての自信を頼りに、また、コンクリートジャングルのあるここ東京下町の豊洲にも、ちっぽけだけど自然はある、それを子どもたちに見せるのだと意気込んで。

いざスタートはしたものの、公園に連れて行けば、花やちようよりブランコ。「ほらツクシがあつたよ」……

をとられていたら、子供たちの「性・生」は認められないままでしょう。その子供たちが、「性」をつみのこしたまま「生」をすごすことになれば、状況は百年たつても今のままだと思ふよ。

中絶は避妊じゃないんだよ。女だけじゃなく男にもしんどいことなんだよ。避妊をするのは二人でするんだよ。相手の性を理解しあわなきゃだめだよ。と、ノンセクト・ドジカルの私は毎日ガラガラかけずり回っているのですよ。

(フリー・ジャーナリスト)

鈴木まき子

反応なし。ダメなのかなあと半ば落胆していた矢先、蚕の卵が孵化したのです。何百匹もシャーレーの中で。三月までいっしょに生活してきた四年生が大切に育てあげた末、冬越しをさせた卵です。

それからの毎日が大変でした。わずかにミリしかない毛蚕^{けご}の世話をするのですから。ところが、手先のすばらしく器用な賢剛君がピンセットと筆を上手に使いこなし、いっしょに世話をしてくれました。

ある朝、賢剛君の両親からこんな手紙が届きました。感激で涙があふれ、私には職員打ち合わせの内容が全く耳に入りませんでした。彼らにめぐり逢えて本当に幸せだと思いました。

「子供、特に障害を持つ子供にとって、物に興味を持たせるといふことはとても大事なことだと思います。飛んでいる蝶を見てもあまり関心を示さなかった子が毎日葉っぱを取って来ては虫に食べさせ飼っている、しかも電車や車しか描かなかった子が虫の成長する姿を実物を観察しながら描けるようになった。親にとってこれほどうれしく又驚いたことはありませんでした。また蚕を飼うことによって虫は葉っぱを食べさせてあげないと死んでしまうということを学びました。それに死んだらかわいそうというやさしい感情も芽ばえて来ました。感情表現の乏しい子供にとって、これはとてもすばらしいことだと思います。それに物を観察するということが身について来ました。今賢剛は、下校途中に見かける家庭菜園のトマト觀賞に夢中です。はじめは小さくて『トマトの赤ちゃん』といっていたのがだんだん大きくなり、今では『青いトマトすっぱい』『赤くなったら食べようね』と楽しみにしているようです。でもかわいそうなのです

が一言『これはよその家のものだから取ったらだめよ』とつけ加えなければなりません。来年はペランダの鉢に植えてあげようと思っています。蚕を飼うようになってから出て来た言葉『オナカペコペコ』『カワイソウ』『タベヨウネ』『オイシイ』『ヘンシン』大きな収かくでした。虫のきらいな私にはとうてい体験させてあげられないことでした」。

(寺門 久子)

「——『ひと言でいいからしやべってほしい』『落着いた行動が出来るようになってほしい』『友達といっしょに遊べるようになってほしい』『会話が出来るようになってほしい』等々。親の心とは悲しくも欲深いものです。一ときは『仕方ない』と諦めたものでしたが……」。

昭和五十八年四月、賢剛が豊洲小学校なかよし学級へ入学。新入生一人と先生大勢の記念写真をとりました。親の細やかな願いは、一年生の夏休みを境に大きくふくらみました。賢剛に言葉が開始されたのです。それは母親が入院するため同じ年頃の子供のいる母親の実家へ約一カ月、賢剛の弟と二人で行って来てからでした。親として期待はだんだん大きくなってきました。

昭和五十九年四月、なかよし学級の二年生になりました。電車・パトカー等乗り物が大好きで親も感心する細かさで描

きますが、更に一段と成長した心を覗くことが出来ました。それは『かいこさん』の観察を通しての言葉であり、絵でした。

絵は細かい観察で独特の描き方であり、観察中に『おなかペコペコ、かわいそう』の言葉を使ったということ、『あしあと』によって知りました。そして『かわいそう』という感情が『かわいそう』な絵を描くことを拒否したようで、心の『優しさ』を感じさせてくれました。(中略)

『いちご食べた、おいしい!』

持ち帰った二十日大根。いただきました、マヨネーズをつけて、新鮮でした。まして、子供がいつしようにけんめい育てた成果ですからもちろん『おいしい!』。親子の心が少しは通ったみたいでした。

『子は親の背中を見て育つ』、『生活の中に教育がある』これは体験・経験の重要性を示しているもので、親の責任の重大さを表しています。そしてもう一つ『くり返し』の効果を表しているように思います。(中略) 根気のつみ重ねが必要であり、賢剛にとっても、親にとっても先の長い道程であります。私は賢剛の着実な進歩を楽しみに努力します。先生には改めて深く感謝申し上げます。(寺門 邦夫)

季節がら、教室には蝶や蛾の卵と幼虫の入った飼育箱が並び、外には美しい野草が咲き、学級園にはイチゴが赤い実をつけ、赤丸二十日大根は食べごろ。ツツジの蜜を「あまい」と吸い、「きれい」「つんじやだめ、みるだけ」とネジバナを眺め、チョウチョウ、ダンゴムシ、アリンコと遊ぶ生活がしばらく続きました。

賢剛君が飼育している虫の絵を描くのを見ていた、仲間の礼ちゃん、食堂のメニューしか描かなかったのに、蝶や、カタツムリを描き、見人君もカタツムリを描き始めました。寿江ちゃんは「ヘンシン、行こう」と両親を虫探しに外にひっぱり出し、母親と共にナミアゲハを育てて大空に飛び立たせるまでに成長しました。

「虫を見ること」は、「見る力をつけること」であり、命を感じ取り、命をいとおしむ心を育てることであり、それはとりもなおさず「人として生きる力」になっていくのだということ、全身から湧き出る言語を駆使して彼らが私に教えてくれました。

みんな、仲間どうしで触発し合い、学び合いながら進歩していくのだということも。

コンクリートだらけの中に生きているちっぽけな豊洲の自然が、私たちにすばらしい恵みをもたらしてくれました。

(東京都江東区立豊洲小学校)

『サンゴの海を守れ』の声 石垣島に！

（新空港建設反対署名にご協力を）

西川 裕人

那覇からさらに西南へジェット機で五〇分、わが国最南端にある八重山諸島は、西表島、竹富島など大小様々な島々からなり、石垣島はその中心に位置している。三年前、これらの島々に遊んだとき、初めて見る亜熱帯特有の植物とサンゴ礁は、あくまでも美しく眼前に横たわり、つかの間でも、都会の喧噪を、人間社会の煩わしさを、忘れさせてくれるようであった。その後、本土とは全く異なる独自の文化、芸術、そして忘れてはならない歴史を知るにつけ、私は沖縄・八重山にすっかり魅せられた一人となってしまったのである。

最近、この石垣島の東部、白保の海を、南北に三キロ、沖合に四〇〇メートル、総面積一三〇ヘクタールの規模で埋立てて、二五〇〇メートルの滑走路をもつ新石垣空港を建設する計画が進行していることを知った。民主的ルールを無視して強行された漁業権放棄の決定にもとづいて、すでに国の建設許可が下り、サンゴ礁の埋立てが目前に迫っているという。

この白保の海は、オーストラリアの有名なグレート・

バリア・リーフよりも優るともいわれる美しいサンゴ礁を有し、人々は、「この海は打出の小槌、サンゴの中から魚が湧く」といい、本土化の中で亡びゆく沖縄の海にあって、「モリ一本で家族が暮らせ、婦人・子供・老人を問わず漁のできる豊かな海が、白保を除いてどこにある」と自慢する。

石垣島には現在一五〇〇メートルの空港があり、一三〇人乗りジェット機が那覇との間を一日十往復もしている。なのに、なぜ現空港を放棄し、石垣島最大の景勝地である白保の海を埋立てまでして、新空港をつくらなければならないのであろうか。石垣市当局は、当初、新空港建設の第一の理由に、急増する空港利用者に現空港が対応できないことをあげていた。しかし、政府運輸省自らが、「今後、観光客の大幅な増加は見込めない」との見解を示した今日、推進理由として農漁業の振興、つまり、ジャンボ機による農漁業産物の本土輸送を前面に押しだしてきた。現に沖縄農協が最近、空輸では引合わないので、船便に変えていく方針を打出したばかりというのである。つまるところ、この新空港建設計画は、「離島苦」解消のため、全額を国の財政に頼れる公共事業を誘

致して、島の活性化を図ろうとする場当たりの政策とし、その理由を見出せない。それに引替え、新空港建設によって支払われる代償は、あまりにも大きいのである。

一、世界的に貴重な白保のサンゴ礁の海を死滅させること

一、漁業と農業に生きる白保住民の生活権を奪うこと
一、本土企業の進出を押しすすめ、真に八重山の産業を自力で振興する道を阻害すること

一、現空港の跡地及び新空港が、シーレーン防衛のための南進基地として軍事利用される可能性が大きいこと

このように重大な問題を含んでいるにもかかわらず、行政当局は、「島の開発」という大義名分のみを声高に叫び、「全体のために一部が犠牲になるのは当然だ」と強引にこの計画を押しすすめてきた。たとえ、白保住民の声が石垣市全体からみて少数とはいえ、これを全く無視し、かつ、石垣市民に計画の内容を十分に知らせないままに、重大な決定を下してきた行政当局のやり方は、まさにファッショであり狂気の沙汰としか言いようがない。いまだ大切なことは、結論を急ぐのではなく、市当局は詳細な新空港建設計画の内容と資料を市民に明らかにし、誠意を尽くした話し合いをすることではないだろう

か。「大切なことはゆっくり考える」という島の地域共同社会の原理に今一度立ちもどり、島民自身の将来にわたる問題として、徹底した議論をまき起こしてもらいたいものである。そうすれば、必ず、新空港建設がいかに無謀な計画であり、これが美しい自然を破壊し、漁業と農業に生きる人々のくらしを奪い、そして平和を脅かし、再び沖縄を戦世の島にしてしまう危険な道につながるということが、わかるはずである。

最近、テレビ・新聞などマスコミがようやくこの問題を取り上げるようになり、一見、長期戦を呈してきたかのように思われるが、事態はそう樂觀したものではない。沖縄県知事が白保の海の埋立許可申請書を建設省に提出し、それを国が受理すれば、この計画は直ちに実行に移される状況にある。この反対運動は、現在、まさに正念場を迎えようとしているのである。

いま私たちのやれることは、一人でも多くの人々に、この問題を知ってもらい、新空港建設反対のための署名に協力してもらうことである。全国津々浦々から寄せられる多くの署名は、どんなにか白保の人々を励ますことであろうか。

是非、Weの読者はじめ多くの方々のご協力をいただきたいと思っている。

(千葉県・葉園台高校)
〈連絡先〉西川(江東区越中島3-6-3-512 ●03-641-6935)

『人間の大地』を読んで

掛布 禮子

机の上一パイに大きな世界地図を広げながら、理解力の弱い私のこと、涙ぐましい努力で毎日、雑事のあいまに、また夜一時、二時と周りが静かになってから『人間の大地』を読みすすめています。まだ、まとまった感想はお送りできないのですが、一番強く心に残っている言葉は、90頁の「愛は食に優る、愛は薬に優る」という言葉です。マザー・テレサの行動、あのすばらしい愛の実践を書物や映画で知って以来、知識では理解しわかっていても、なかなか我々の日常生活では実行できない国境を越えた愛、お金では買えない尊い愛と連帯をしみじみと教えられ、深く感動いたしました。学生時代、教会に通って聖書を読んだことがあり、「マタイ福音七—十二」の言葉がなつかしく、また以前にも増して、深い意味を持つていることを悟りました。

金だけ出せば難民は救われるというような単純な考え方の日本政府。また自分もその一人であることを非常に恥ずかしく思うのですが、そういう日本人がいかに多いか、とても残念に思います。もちろん、薬や食糧を買う

にはお金が必要です。しかし、物心両面の人間らしい援助がなければ決して救われぬ。そのことに中曽根首相は気づいているかなあといらしてきます。経済的援助だけではなにか何物か——。しかし、私たちにあって、今すぐできることは何なのか？

パキスタンを訪問した中曽根首相が、アフガニスタン難民対策協力費として、84年に四十二億円を供与するということを新聞で読んで、首相のとった態度に感心している単細胞が多い日本……。やはり、金だけ出せば、それでよいという考えです。「愛こそは最上の薬なのだ、食なのだ……この人々の求めるものはそれなのだ……」。ボランティアのアメリカ青年が、四十度の暑気の中で、全身蚊に刺されながら、医者が見えなかった孤児を二日二晩抱き続けて、遂にその孤児が生をよみがえらせたという所を何度も読み、自分が日本人であることを恥ずかしく思いました。

「一語も口にせず、空をみつめたままの子」「薬も流動食も、てんで受けつけなかった子が感謝のあまり泣いた」。これこそ真の愛の実践の尊い例のひとつだと思います。宗教というも

の意義も考えさせられ、まさに宗教は「人が、人らしく生きるがための生の道」でなければならぬと思えます。「泣く者と共に泣き、喜ぶ者と共に喜ぶ」(新約聖書)この精神が、すべてに生かされたら、世界はそれこそ平和になると思います。

インドシナ・アフリカ・パキスタン等の難民に対する経済的援助だけでなく、日本人のひとりとして「この本を読んでください」との訴えを、あらゆる機会をとらえて、根気よくやっていきたいと思っています。同時に、新聞等を通じてもっと世論に訴え「難民問題を考える会」を、私の地域にも育てたいと思います。いずれにしても急がねばなりません。

一歳から五歳までの乳幼児が、一時間に千五百人のわたりで、栄養失調と飢えで死んでいく!! という恐ろしい事実を知ったら、誰だって放ってはおけないはずです。

私たちは、難民の悲惨な実態を本当に知らされていないのです。未来を背負ってたくましく生きてほしいと願う子どもたちが、こんなめにあっている!! 日本の今日のぜいたくな食事を思うにつけ、もっと考えねばならない。特に、女が、母親が、そのことを認識しなければならぬと思うのです。

「個人としては過食をしていなくても、国としてはぜい

たくをしている」という指摘に、はっとさせられました。毎日の食生活を鋭く見直すと、いかにムダやぜいたくが多いか思い知らされます。人類の平等、富の平等は不可能なことなのか?

「世界人口の $\frac{1}{4}$ を占める富む『北』が、十二分に存在しておつりがくる程の食の $\frac{1}{4}$ を買いこんでしまわなければ、世界には、ひとりひとりが毎日二千数百カロリーを食べて、十二分に賄っていけるだけの食糧がある」というのに、日本を含めた北の諸国が、食糧を独占しないように話し合わなければ、永久に難民問題は解決しないでしょう。

「一回こっきり使い棄て」のわり箸の材料等が、ニュージーニアの森林から採取され、年間五億四千万本にもぼる木が犠牲になっている。木の消費が人口あたり世界一とは、何と嘆かわしいことか! カネを援助する前に日常のおびただしいぜいたくを反省すべきだと思います。「われわれの日用の食はすべて、全世界とのかかわりあいを持っている」(FAO「食糧の日」宣言より)のです。

293頁のみどり一本、いのちの木、和解と希望のみどり一本! この頁を読んでやっと救われた思いです。「コーヒー五杯分、いのちの木!」この言葉が強く心に残り、さしづめ私にできることのひとつは「みどり一本」なのだ。これは友達にもできること、すすめていきたいと思っています。

役割分業のない社会

平井 雷太

Weを購読しながら、今まで私が学校で習いイメージしていた家庭科と違うものがあると、おぼろげに感じていた。そんな事から夏季フォーラムに参加することにした。〈自分らしさをこそ一解き放て、つくられた役割意識〉のメインテーマのもと、二一世紀の男と女の関係―役割分業のない社会って―という分科会に出席したが、二、三十名の参加者のうち、男は私を含めて数名であった。参加者の自己紹介から始まったが、それが一人称の言葉で語られ、自分自身のありのままを語らなくてはいけないような雰囲気だったのである。

「私事になりますが、私は同じ相手と二度結婚しています。初めの結婚の時には役割分担をはっきりさせて、一日おきに交代で料理を作っていました。」

そのことが離婚の原因になったというわけではありませんが、私が無理をして、義務として料理を作っていたということはあります。だから『俺はやっているんだ』意識がつきまとうと、女房とは違う料理を作ろうと、常に本を見ながらがんばっていました。でも、がんばって

作ると長続きしない。義務感だけで作っているから何度やっても身につかない。買物に行く度に料理の本を見て、何が何と計算して…女房があつという間に作ってしまうものに何時間もかかり…料理がほんとうに苦痛だった時があります。

それで、再婚してからは、女房に一切期待をしないことにしました。『作りたい方が作る』『作りたくない時は外食する』といつても、子どもがいますし、当然家で食べることが多くなる。そして自由業とはいえ仕事の関係で夕方の時間帯は手が放せないため、私には食事の用意ができない。その分、女房の作る回数は増えてくるというわけで、結果的には、再婚してからは私の作る回数はずっと減っていました。

女房には不満があるらしく、時折『たまには作ったらどう？』と言ってきます。いくら私の作る回数が少なくても、やはり言われると作る気がしなくなる。『宿題をやれ、やれ』と言われる子どもの気持ちがよく分かるのはこんな時です。無理をしないやいや作ったものは長続きしないし、自分から進んで無理なく料理を作るにはどうしたらいいかと考えた結果、とりあえず一つの料理をマスターしてしまおうとカレ

発 言

に挑戦しています。それも凝りに凝って香辛料を炒めるところから始め、本格的インドカレーを作ります。

毎日カレーを食べるわけにもいかなから一カ月に何回かのペースになるし、作る時の負担もぐっと減り、また私のカレーを一家で楽しみにもしてくれるようになるので、作り甲斐もでできます。あと、もち米を使った料理も私の分担で、赤飯とか中華チマキ等にも挑戦していますが、まだものにはなっていない。

皿洗い、洗濯、そうじなどの家事は料理に比べればずっと単純で、やりながら頭の中で原稿をまとめたり、仕事の段取りをたてたりもでき、それほど負担には感じません。でも料理だけは、どうしても頭を使わなくてはならない分、他の家事と性格が違ってくるのでしょう。

そうじの場合はこんな具合です。初めの頃は分担を決めずに、汚いと感じた方がやるようにしていたのですが、そうするとほとんど女房がするようになってしまった。そこでそうじに関してはルーティン化して、何曜と何曜にするという形で、私が分担しています。単純作業なのでその方が楽なようです。そのほか大ざっぱに決めていることとしては、料理は女房が作る人、息子(小3)が皿をさげる人、私が洗う人。ただし朝食は息子がほとんど毎日作り、昼食は二人とも家で仕事をしていますの

で、おなかがすいた方が適当に作ることにしています。

息子を含めて役割分担を決めると、子どもの方がしっかきしていて、『お父さん、まだお皿洗ってないよ』と言われ、重い腰をあげさせてくれるので効果的なようです。

とにかく『期待しない』という考えをとってから、私はすごく気が楽になって、義務で家事をやっていた頃は『私はこれだけやったんだからおまえも』と女房の欠けていたところ至らないところをよく責めていたのですが、今では、やってくれることはすべて感謝になってしまいました。『なぜまだ夕食ができていないんだ』というような文句がよく言えたんだと、そんなことを言っていた自分にあきれています。

離婚する時、まさか本当に届けを出すわけがないと思っていました。『離婚届けにサインもできないの?』という言葉に挑発されてサインをしたら、本当に出してなくなっちゃったんです。その時の体験があるせいか、とにかくいてくれるだけでいい、こんな女房であってほしいなんて思いは、どこかにいつてしまいました。現在でも、いつ離婚するかわからないという緊張関係の中で生活していますが、相手に合わせて無理することはしたくないし、義務でしていることはありません。

まさか、こんなことをしゃべるようになるとは、まるで予想もしないことだった。

私、高三と小六の二児を持つ身です。授業参観っていういつも担任と我が子への義理立てのための参加(ゴメンネ)。今日は自主行動の上、高校の授業参観は初めてなので、胸わくわくで始業の合図を待っています。

(わあ、本物の高校生)

(お邪魔します)

二〇人学級っていいですね。スベース的にもこれ位はゆとりがなくて。男女比は七対一〇。五グループあって混成チームです。欠席は男子かなあ、女子かしら。

今日は弁当についてですって。

前回は昼食を外食にした場合の栄養のバランスシートと経済性を考えたそうです。自家製の弁当が果たす役目の大きさを理解の上、今日です。

高月先生ってとても親切なんです。

(それとも時間の節約を計って?)
弁当作り12のポイントというプリントや料理の本をどっさり準備

して。これからグループで助け合って各人各様の弁当の献立を作成、卒業作品に実習するのだそうです。八割は毎日弁当持参というのに何故か悩んでいますよ。グラビアの弁当と自分の技術の違いかしら、それとも全食品群を含めるという条件付きのせいかしら。

枝豆を入れていい? という男子の大きめの声にあらこちで「そうかあ」。

大豆類30gが共通の悩みのようです。

(大豆ねえ、弁当に冷やっこや納豆では。ところで我が家の今朝の弁当は……)

いつの間にか私も生徒になっていました。(皆さん、今日はありがとう)

男女比からグループをみると、二対二のところが一番落ち着いて映りました。他グループに遠征することも少なくて。

ところで何故二〇人学級なのかと尋ねましたら、あと二〇人は「家庭科保健」で保健体育の先生から性に関する教育を受けているそうです。半年交替で二・三年次を男女共修で。

高月先生の御持参は愛息弁当。私の分も作って下さって、もううれしくて。大感激!

そのあと「ねえ、ちょっと聞いていい?」「お弁当? 毎日持ってくる。たまーに自分でも作るけど」

「ぼくは家庭科好きですよ。ボタンなんか自分でつけるしね」

「中学の時は別々。やっぱ一緒にいいよ。何たって明るいいじゃん。楽しいしね」

「性のことやってるの。もう過激! 下なんか向いちゃって。だって避妊のしかたとか器具とか、ホント見せちゃって、もう……」

「私、今家庭科なのね、期待してるの、後期のこと。絶対しっかり見ちゃうから」

共学校なのにある時間だけ男子ばかり、女子ばかりだったら、どんな雰囲気が出来上がるのでしょうか。この明るさは性別による偏見を学習の場に持ち込まなかったからでは。

「やっぱ男子もやった方がいい。出来ないところがあると思うし、できた方が便利だし。結婚したらやってもらう。家にいて。

僕、働くもん」と語った彼は初年度の二年生だけれど、卒業するとき、考え方がどう変わっているのかしらと、私は楽しみです。

(東京都立農産高等学校を訪ねて)

Weになんでもいおうなんでもきこう

◆家庭科が男女必修と選択の正念場。お忙しい日々と思います。人間やぐらしを学び認識する科目を選択などと、まるで自ら「学校教育」は、人間が生きることと教える場ではないと言っているように、馬鹿にしています。人間として生きるかどうかを選択せよと、しまいには言い出すのでしょうか？ 昔使った古い言葉思い出します。「ナンセンス！」

(京都・田中正彦)

◆Weは今一番関心のある本です。今まで私が見すごしてきたことを気づかせてくれました。ところで六月号の「美ら寿」まず題名の読み方がわかりません。この雑誌にはルビがないですね。ルビをつけないのも一つの方針ですが、まぎらわしい読み方やむずかしい漢字はルビをつけてもいいのでは？ 一行目に「美ら寿」の春は…とあるのですが、「美ら寿」が何なのかイメーজがわからないのです。末尾に（財団法人…村長）とあったので、やっと村の地名だとわかったのですが、それにしてもどうしても財団法人とつくのだらうとまた疑問。このように感じたのは私だけかもしれません。青木悦さんの文章が良かっただけに惜しまれます。青木さんの文章を読んだら、婦民新聞を読もうかと考えています。

（三鷹・藤原良子）

（編集部より）
「編集部より」
びらあじゅ、フランス語で「村」です。行政上の村ではなく神戸

さんが私費を投じて作られた、「高齢者と地域の人とが共存できる健康な村」を意味します。◆ぼくの学校の分会の「勤務条件」の学習を始めることにしました。分科会で、「男女雇用機会均等法」の学習を始めることにしました。「男女雇用平等」をめぐつては、機会均等・待遇平等や従来の女子保護規定の解釈や扱いをどうするかで、労働側と経営側が入りみだれ、それぞれの思惑がからんで、将来を左右する国民的課題として論議が今まさに沸騰しているところ。

ことが私たちの働く中身の問題であるだけに、先輩諸氏が戦いつつてきた「既得権」にも抵抗し、私たちとして無関心であるわけにいきません。そこで、私たちの分会では「男女雇用機会均等法」とはいかなるものなのか、何が争点でどのような問題を孕んでいるのか、そもそもその背景となっている「婦人差別撤廃条約」とは、どのような精神を持ち、どういう内容で成っているのか、などなどを一から学習することを通して、その学習を生かすべく、個々の職場でやれることは何かをさぐっていくことにしたのです。

昨夜Weのバックナンバーを全部調べましたら「あんてな」その他で相当扱ってあって、読んでいなかったことに恥じ入るとともに、今後の学習の有力な「資料」になるなど、うれしくなりました。

七月号、岡百合子さんの「巻頭言」とても深味があります。佐々木賢さん、チェッカーズの歌詞を手がかりにしての情況論。意外な面を知り、感心しています。宮さんのもの、連載のうまいフォロー。長谷川さん、詩的表現にみがかがかかってきている。波の「構造的暴力」の記事、長谷川さんが送って下さった資料のコピーもものの中にあったのですが、ここまで深く考えられなかった、などなど断片的な印象を持ちました。これから、ゆっくり読み込んでいきま

す。(横浜・植垣一彦)

◆たまたま訪れた友人宅で、テールの上に置かれた「週案」という厚い日誌を見つけた。そこには、毎時間の授業の内容、生徒の動き、生徒指導の様子を細かく記すようになっており、驚いたことに、毎日毎日、校長・教頭・学年主任の捺印がされている。もちろん教師である以上、常に考えるべきことではあるが、上司の点検を受けるというのは、現場の先生にとって、大変なプレッシャーだろう。教育に秩序は必要だ。けれども多発する校内暴力などに対処するという名目で、自由にモノが言えない。何事にも諸々と従うような人を作る、タテ型管理は実に恐ろしいと思う。

愛知は千葉と並ぶ管理教育のメッカだと言われている。管理・統制された学校や社会をよしとする親が多いときく。管理の枠にはまっていれば安心だし、外は見えない。そんな個々の中にある管理を

見過ごす感性のよろさに気をつけたい。せめてアンテナだけは磨いておきたい。

江田五月氏が国会で述べられたような新しい家庭科を私の子供に学ばせたい。

(人間としての自立、家庭と社会の役割、家庭の構成員としての役割、セックスを人間としての位置づけて扱う、エコロジーの基本的考え方、経済活動の中で家庭が果たす役割、これらを基本的にふまえた生活科として家庭科をとらえたい)。

バグダッドに行っている夫の由康君より「江田氏の意見で今までの家庭科Ⅱ料理・裁縫のイメージがなくなった。必修の根本理念に賛成するよ」の便りあり。私としては、彼の理解が得られたこと、何よりうれしい、うれしい！

(愛知・水野純子)
◆富山県では現在「家庭科」の残っている(？)高校は14校です。この14校で、県連家庭クラブ当番校、

技術検定理事校(雑務処理)、家庭クラブ研究発表校(県に毎年2校、北陸大会に毎年1校、全国大会に当番年に1校)といった教科以外の教育活動と、その世話を輪番制で回しているのが、「家政科」のある学校の家庭科教師は、大変多忙です。(富山・鏡森捷子)

◆私は、遊びとは、生産・分配・生殖ほか文化創造に至るまで、生きるという営みそのもの(それを現実と叫びたいのでしょうか)から、何らかの要素を欠落乃至捨象したものだ、と定義しています。欠落させる要素は人さまざまで、だからある人には遊びであることが、別の人には遊びどころではない、ということになるのだらうと思います。まじめというのは、どんな要素も欠落させがたい傾向。近頃はやりの「おもしろ」云々というの、欠落させてはならない要素まで無視すべき諸要素と一緒に捨象してしまうところが問題なのであろう、などと考えています。

私たちは、同時にすべての要素と取り組むことは難しいので、たいていは何かを捨てているわけですね。特に今日では、捨てさせられていると言っているでしょう。何を捨て、何を上げるか。

賃労働は効率だけを取り上げますが、宮沢賢治が農民芸術概論で「すべての農業労働を舞踊の範囲にまで高めよ」と言った時、彼は人生それ自体を遊びとすることを理想としていたのだと思います。子どもの生活における遊びの効用は誰もが説くことですが、以上のような私の考えでは、実は遊びと勉強との区別はないので、だからこそ子どもの一日は、遊びと仕事を区別して休息するところのあるおとなの生活より、はるかに「いそがしい」ものだといえます。頹廃というのは、そうした「いそがしさ」を分裂させる"ところから始まるのではないのでしょうか。

(東京・村田直文)



女の人生・男の人生

《イタリアヤ女性の訴え》

増本 敏子



先日、突然来日したイタリアヤ人女性の相談にのるはめになった。彼女は三十七歳のピアニスト。十五年前日本人のギタリストとミラノで結婚し三人の子の親となったが、三年前頃より夫婦仲が悪くなり、ある日夫は上の二人の子をつれて帰国し、郷里の実家に住みついてしまった。その後二年間電話をしても顔もみたくないとの冷たい返事。姑だけは日本に来て暮らさないとい優しい手紙をくれるが、夫の態度がこれでは日本で生活する自信がない。ようやくピアニストとして自立し子供三人を養ってゆく自信ができたので子供を引きとりにきたのだという。

夫は才能はあるが我ままな人で、長年のイタリアヤ生活に疲れて妻に当たり散らすようになった。妻が子供を他人に預けて仕事をすることを嫌い、母国の母親と妻を比較しては不気嫌になる。その上浮気までした。「彼の心にあるのはいつでもママン」と涙を流して訴える姿はいじらしいが、夫への見切りのつけ方は手きびしい。

私は日本での離婚・別居・親権などの法的手続きを説明し、まず本人どうし話しあうことをすすめた。彼女は日本の領事館は不親切で何も教えてくれなかったと訴え、費用をかけて日本まで来たのだから、ただちに裁判所に子供を引き渡せという命令を出してほしいのだと言いはる。イタリアヤでは母親の許可なく子供を国外へ連れだすことを禁じているのに、そういう法律違反者への処置はないのかという。日本でも人身保護の訴えという制度があり、私も何度か担当しているけれど、子供の年齢が十三歳と十歳であること、日本にき

て二年以上経過していることを考えると、そう簡単に結論がでないだろうと説明する。そしてとにかく、夫という人に連絡をとってあげた。

予想していたとおり夫やその家族の言い分はかなり違っていた。子供たちは母親を恋しがるところか祖母の愛情に包まれてのびのび暮らしており、日本に慣れ親しんでいるという。彼女は妻として母としての優しい気配りに欠け、要求と命令ばかり。一緒にくらしノイローゼになってしまったので父子で逃げてきたのだという。自分の仕事や趣味優先の利己的な女性で、母となった以上それでは困るので当たり前、前のことを数年言いかせてきたが、全くわかってくれない。もうあんな生活はこりこり。子供たちもここに来てはじめて幸せそうである等々。

双方の言い分はすれ違いだけれど、問題点ははっきりしている。近ごろの日本の共働き家庭のトラブルととても似ている。国際結婚なのでこじれ方がきわ立っていただけ。そしていかにも日本人男性らしい(?)やり方である。仕事と家庭を長年両立させてきた私の友人が、「私はいつも働かせてもらっているのだと夫や子供に感謝するよう自分に言いかけてきたわ。どんなに疲れていてもね」と言っていたのを思い出す。幸か不幸か、こういう気配りのゆきとどいた女性は日本でも少なくなってきた。外国人妻泣かせの日本男性も減ってくるかもしれない。

わが背子^{せこ}を大和へ遣るとき夜ふけて暁露^{あかるとぎ}にわが立ち濡れし
(二〇五)

二人行けど行き過ぎ難き秋山をいかでか君がひとり越ゆらむ
(二〇六)

二人ゆけど 大^お伯^お皇^み女^みの歌です。第一首。「わが背子」は、愛する男性のこと、ここでは弟の大津皇子。いとしい弟を大和へ帰しやるとて夜更けまで山道に立ちつくし、暁の露にすっかり濡れてしまった私であることよ。第二首。二人で行っても陰しく淋しい山道を、弟は一人でどんなにして越えて行くであらうか——情愛に満ちた美しい歌です。だが、この歌には、美しいなどといつてはすまされぬ深刻な背景がありました。

朱鳥元年(六八六年) 九月九日、英邁な天武天皇は亡くなりました。皇太子は草壁皇子、その母は天武の皇后でのちの持統天皇。大伯、大津姉弟の母は持統の姉大田皇女でしたが早く死に、幼い二人は肩を寄せあうようにして生きてきました。そして大伯は、父天武の命で十四歳から伊勢神宮^{いせみ}の斎宮^{いさみや}として神に仕える身でした。

才子ゆえの悲劇 大津皇子は立派な容姿とすぐれた資質をもち文武に通じ礼節を重んじる青年でした。人々は、おとなしく病弱な草壁よりもたくましく堂々とした大津を天武の後継者として期待しました。皇后にとってわが子草壁の強力なライバル大津。それ故に大津は生き難い予感を肌で感じたのでしょうか。姉に会いたい一念で、ひそかに伊勢に下りました。たまさかの姉弟の語らいでした。姉は

弟に、大和へ帰るようにやさしく諭しました。「大和へ遣るとき」という表現に大伯の思いがにじみ出ています。

大和の空気はきびしく非情でした。天武の殯^{おくり}宮^{みや}がしめやかに続いている中で、大津は謀叛^{むはん}の罪で十月二日に逮捕され、翌三日に死刑になりました。日本書紀には「賜死」とありますが、有無を言わさぬ電撃的な処刑でした。時に年二十四。

非業の死 百伝ふ磐余^{いはれ}の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ(四一六)

(ももづたふ) 磐余の池にはいつものように鴨が鳴いている。これを見るのも今日限りかと涙を流して作った大津の辞世の歌です。淡々としたしらべの中に深い嘆きがこもっています。

悲劇はさらに続きます。大津の妃・山辺皇女は夫の死を目のあたりにして、髪をふり乱し裸足で走り寄り殉死しました。見る者はみな泣きました(日本書紀)。

大津にはもう一つ辞世の詩があります。

金鳥臨^{きん}西舍^{さい}鼓聲催^こ短命^{たん}泉路無^い賓主^{ひんしゅ}

此夕離^{この}家向^け(懷風藻)

太陽は西空に沈まんとし、夕刻を告げる鼓の音はわが短命をうながすように哀しく、死出の道には客も主もなく、私は一人家を離れて旅路に向かう——。

果たして大津に謀叛の事実があったのでしょうか。私には冤罪であったと思えてなりません。



萬葉の男たち・女たち

《姉と弟(一)》

井田 邦弘



されど女性障害者は強し？

栗原 実抄

「女は弱し、されど母は強し」という言葉があるが、これを私たち（障害者）にあてはめると、「障害者は弱し！ されど女性障害者は強し？」になるのではないだろうか。でも、決して私自身のことを言ったわけではない。

友達Fさんは、現在東京近郊のある施設に入っている。時々サークル活動などに参加するために、電車を乗り継いでやってくる。

彼女の障害の程度はかなり重い方で、上肢は全然使えない。下肢は大きくくようで、足の指で針に糸を通すことができるくらいだ。だから、車イスも足で車輪をかって前向きに移動させることができる。これまで何回も一人で電車に乗って、目的地まで行ったことがあるそうだ。その時は駅のホームまで、通行人や駅員に階段を上げてもらい、乗車させてもらって、降車駅のホームに友達やボランティアに待っていてもらうのだそうだ。

私はFさんのような勇気がないので、こういう経験をあまりしたことがない。どうしても行かなければならない用事で、だれも介助者がいないときは、仕方がないので誰かにタクシーに乗せてもらい、友達などにたのんで目的地で車から降ろしてもらおう。

Fさんは階段などを通行人に上げてもらう時に、ニコニコしてとても優しい調子で頼むのだ。するとすぐに三、四人の人が、車イスの周りに集まってくる。そのあとで彼女は、「あなたのように、気

持ちよく引き受けてくれる人はいなかった。どうもありがとう」と必ずていねいにお礼を言うので、手伝ってくれた人はすっかり良い気持ちになってしまうようだ。

ある友人は、

「彼女はブリッ子なんだよ」と言うが、私にはそうは思えない。これは施設に長いこと入っているFさんの、自然に身についたマナーだと思うが、私のように家の中でわがままばかり言って暮らしてきた人間には、とても真似のできない強さのような気がするのだ。

私も、介助者が一人だったり、女性だけの場合だと、駅などの階段は通行人や駅員にたのむが、そのときは介助の人の方が大きな声で呼びかけることが多い。本当は私がつたのむのが一番良いと思うのだが、恥ずかしく感じるものがあって、いつもいつもというわけにはいかない。

男性の障害者がFさんのようなことを言ったら、何かとつてつたようで気持ちが悪く思われることもあるだろうが、女性障害者が言う分には、かえって良い感じに受け取られるような気がする。

「あなたもそうしたら……」と言われて、その気になってみたことがあるが、優しくかわいい声を出そうとすると、顔の方が引きつってしまふので閉口した。それ以来、自分が精神的に落ち着いている時には声をかけるが、そうでない時は介助者に任せることにしている。Fさんの、このような介助をしてくれる人に対する心づかいは、障害者にとって大切なことで、世の中を生きていく上での一種の潤滑油のようなものかもしれない。社会の風当たりのきびしい私たちにとって、ただ突っ張って生きていくことだけが強さではないということを、私はFさんによって教えられた。



男女平等教育すすめてますか

若い若いと言われ、その気になって浮かれているうちに私も人生半ばに達してしまった。真面目に第二の人生を切開かねばならない時期にきてしまった。

いろいろな人の示唆に富む言葉や行為が頭の中を飛びかう。この間学校で「徹子の部屋」を見ていたら、岡崎友紀さんが「好きな仕事をして生きていきたい。最も売れていた頃、お正月の三が日で二八本もの番組に出たが、一体何をやっていたのか少しも覚えていない。今はいろいろの仕事が来ても役が合わない」と断ってしまう。でも食べていったり、自分の好きなことをするにもお金はあるし、そこが問題」と語っていた。彼女は今、絵をかき、アフリカへ行ってライオンなどの写真を撮っているそうだ。

「ドイツ青ざめた母」の連続シンポジウムで、吉田真由美さん（映画評論家）は「みんな忙しい忙しいと言ってるけど、自分の好きなものを優先させればいいんじゃないの……」。

私の場合英語が好きだったからそれで生活してきたことは幸せである。英語の中でも特に英文が好きだ。あるテーマを出しそれについて生徒にも書かせるし、自分も書いてみるのが好きだ。しかしそのテーマは何でもよいのかと言うとそうではない。最も私の関心のあるもの、また自分が好きで深くかかわったものでない限り駄目だ。男女平等、衣食住の問題、映画・演劇の範囲くらいならなんとかやっていける。しかし、私が最も生徒と議論したり学習したりしたい問題は男

女平等のことであり、その中に生活も文化も含ませることが出来ると思っている。

私は一体何がやりたくて、何が出来るかを考えてみた。先ずあらゆる世代の人と男女平等について本を読み、討論をし、現実のゆがみを変えることをしたい。そしてある程度英語の読める人たちは英語を通じてその問題を追求してみたい。それをボランティア活動ではなく、お金を稼ぐ仕事としたいのである。数年前は友人たちと津田梅子さんの女子英学塾のような精神を持った小さな学校を作りたいと話し合っていた。その気持ちは続いているが、現実問題としては今のところ不可能である。また現在の高校では、一人の英語教師が男女平等の問題だけを取り扱うことも不可能である。短大、大学、専門学校、社会教育ならば男女平等のテーマを講座にすることは可能だが、そういう所には修士課程や博士課程を出た人がひしめいているのも事実である。「さあ、どうするの」ともう一人の私が問い、またあの話をけしける。

「彼女の名前はジュリー・ニューホール、三六歳。オランダで十年間英文学を教え再びニューヨークへ帰ってきた。彼女はアメリカ人。今度は教育以外の分野で仕事をしたいということでコロンビア大の修士課程に編入。彼女は新しい職を求めて履歴書を書いた。そしてついにアメリカン・エキスプレスに就職出来た。彼女の書いた履歴書は三五〇通！」。アメリカから帰ったばかりの三井マリ子さんが熱っぽく語ってくれた話。一体私は今までに何通の履歴書を書いただろうか。二〇通にも満たないだろう。「積極性の中で能力が開拓される」。生徒に向ける私のこの言葉、今度はしっかり自分に向けなくては。

シネマ



グレイストーク

遠藤 由紀 (カットも)

「グレイストーク」は副題(「ターザンの伝説」)が示す通りターザン映画ですが、従来の「アーアアー」と叫びながらジャングルをとび回るターザンではありません。サルに育てられた野性児であるターザンと文明社会との葛藤が主に描かれています。

映画のほぼ半分がジャングル場面、つまりサルとの生活でセリフは全くありません。ここに出演するサルはもちろんヌイグルミで、「あの中に人間が入っているのだ」と思ってみると実によくできています。少しもサルに見えることなくという妙なおサルで、要するに動作が人間らし過ぎるのです。ですから一時間かけて「こいつはサルに育てられた野性

児なんだゾ」と説明されてもあまり納得できないのです。

後半ターザンは英国探険隊に発見されて、彼の祖父であるグレイストーク伯爵に引き取られます。文明社会に行く前にジャングルで言葉やしぐさをベルギー人に習い、「家族のいる国に帰るのだ」と説得されてイギリスに行く気になるのです。

しかしです。私はあの「狼に育てられた子」の話を家庭科の授業で習いましたが、アマラとカマラだって人間社会に順応するのはほとんど無理だったのです。ターザンはどう見ても二〇歳をすぎています。こう簡単に事が運ぶのはいささか安直すぎやしないかしらん。

「オハナシサ、おはなし」と思ってみても、このターザンは文明社会と野性とのギャップにシリアスに悩むのですから、単純にお話ともいえません。祖父伯爵の死、大英博物館に生け捕られていた父親猿に偶然再会するが、その猿もすぐに殺されてしまう等、様々のショックからターザンがジャングルに再びもどっていくところで映画は終わります。

終了後、隣席のオバサマ方が、「一度サルの習性が身につくと元にもどらないのネ。森に帰るのが幸福だわ」と結論づけていました

が、そういうことではないような気がします。確かに野性児についての授業のときは幼児期の教育が大事だとまとめられていました。しかしこの場合、親と子の関係ではなく、ヒトと自然との関係が描かれているのです。

ターザン物語という、わりと御都合主義的設定を素材とするには監督がまじめすぎて、今ひとつチグハグを感じてしまったのですが、全体を通してみると自然と人間という対比が一貫したテーマとなっていました。

この映画は自然児ターザンが主人公ですから、動物が殺されたり博物館に標本として展示されていたりするととても腹立たしくなります。しかし、これが例えば「ジョーズ」だったりするとサメに同情したりしません。自然の立場にたつか人間の立場にたつかで観点が違います。けれど私たちは所詮人間です。でも、ターザンは両方の立場にたつことが完全可能な人間だったのです。

そこで人間社会に絶望するとジャングルに帰ってゆけるのですが、以前のように自然と一体となることははやできないと思うのです。

森に帰ったことが本当に幸福だとは思えないのです。

ほん



『主夫と生活』

小田亜佐子

滑稽極まりない本をご紹介します。

『主夫と生活』。もうお読みになった方も多
いかもしませんが。

妻が外で働き、夫が家で家事育児をする、
という生活スタイルを実際に体験した主夫の
レポートです。著者はアメリカのジャーナリ
スト、サブタイトルは「マイ・ライフ・アズ
・ア・ハウス・ハズ・バンド」。

四十歳になるマイク・マグレディは、コラ
ムニスト兼作家、大いに成功して、高い年収
と高価な家を誇りにしています。もちろん、
妻のコーリヌを家において家事育児一切をや
らせている。ところが、コーリヌがじわじわ
とやり始めた会社が儲かり、ついに彼女は、
一人前のビジネス・ウーマンとして仕事に乗

り出します。

頭にきたマイクは、それならば、と主夫の
役を引き受けることにします。ちょうど仕事
を辞めて一区切りつきたいところだ、と。

さてそこから、滑稽千万な物語が始まるの
です。ちなみにいくつかの節のタイトルを抜
きだしてみますと、

「俺が主夫としてデビューし、主人のコーリ
ヌを会社へ送るのこと」

「料理のこと、あるいは、『しばまない』ス
フレの秘密」

「子供たちが家の中を散らかし、俺はおふく
ろそっくりの雷を落すのこと」

「洗濯におけるもろもろの不愉快、そしてア
イロン掛けなど糞でもくらえ！」

「子供たちとテレビを見るのも容易なことでは
ないのだ!」、等々。

料理、掃除洗濯、家計のやりくり、何一つ
うまくいかないし、とにかく煩雑で大変、時
間の自由がきかない。主夫生活半年記念日に
外出先でつい気が緩んで、トップレス・バー
へするすると入りこみ、コーリヌとの約束を
すっぽかしてしまうくどりは、余りに可笑し
くて涙が出そうな位でした。

そして一年の主夫生活の感想は? 「『籠の

鳥の憂鬱』が次第に俺の心を蝕み、「みんなを送り出しながら、主夫としての喜びをし
みじみ味わう」けれども、しかし、「これ以上
繰り返したくない、と俺の心は叫ぶ」とい
う結論。

すなわち、家族一人一人の「自由」を何よ
りも大事にするという精神に基づいて、一人
が家事専業という分担はやめ、夫婦共外で働
き、家族全員で家事を分担するという新しい
結婚契約が出来上がるのです。

「諸君には馬鹿馬鹿しくみえるかもしれない
が」なんて断り書がついていますが、とんで
もない。私はアメリカの偉大な精神をみる思
いがしましたゾ。読み終わって、なかなかど
うして、たいした硬派な本だと感じたこと
でした。

一週間おきに主婦役を交替する、というマ
イクとコーリヌの新しいやり方が、仕事に追
いまくられる日本のカッパルにそのまま真似
できるものだとは思いませんが、彼ら独特の
ユーモアのセンスと、個人の精神の自由に対
する繊細な感覚だけは、ぜひ見習いたいもの
です。

マイク・マグレディ『主夫と生活』伊丹十

三||解説敷衍訳、学陽書房、一二〇〇円

いのちのうまのむためい

半田 たつ子

寄村仁子著

『ナ・ゼ? ナ・ゼ・デ・ス・カ……』

径書房刊 価一、四〇〇円

——邦治さんが、たどたどしく、激しく、鋭く発する「ナ・ゼ・デ・ス・カ?」は私にとってまさに鏡である。

「なぜあなたはそこにそうしているのか」

「なぜあなたはそうに考えるのか」

「あなたはなにをしようとしているのか」

彼から「ナ・ゼ・デ・ス・カ?」と問われると、一しゅんのうちに、身につけているものが剥ぎ落とされるような気がする。

赤裸のまま立たされる心地がする。

刺し貫くような彼の視線の前に、防ぐものをもたずに立たされるのは辛い。

だったら近寄らずにいればいいものを、不思議に引き寄せられてしまうのだ——。

寄村さんが、重度一級の困難さを生きたる邦治さんとの歩みを語る文章である。邦治さん

の日誌を軸に、自らを突き離して淡々と記した九年間は、単なる感動物語ではない。

「支え合いつつひとり立つ」なるテーマは、あだやおろそかに掲げるものではなかった……ほぞを噛むほどに重く沈み、飛び交うスローガンのすべてと同じく浮ついて、いたたまれなくなる。

——自由になりたくて職を辞した。だから誰にも縛られずに、また誰をも縛らずに、求めるところに従って生きようとして来た、つもりだった。

自分を縛ろうとするものの手は振り切ってきた。たとえ冷たいと言われようとも。

誰かに縛られて苦しいのなら、抜け出しようもあるけれど、自分で自分を縛ってしまっただ、その自分がわからなくなる、まるで出口のないトンネルの中に入ったようなものだった——。

寄村さんの苦悩は、私にも微かに伝わる。スローガンは、この苦しさを救わない。

迷いを映し出す鏡——邦治さん、支える仲間、寄村さん自身の志の深さ、それがエネルギー

を生んだ。

「げんきだったら、ぼくはせいしゅんに、スポーツたくさんやってみたい。だが、「せいとべんきようとはなしいろいろ」している今を「ちいさいせいしゅん」と思う邦治さん。その青春に「あの人とくるまいすできれいな花のところをまわりたいよ」との恋心が生まれる。片想いでパンクするほどになった邦治さんに、寄村さんは非情に言い放つ。

「結婚というのは、二人の大人がお互に支えあって共同生活することだから、たとえ一方が寝たきりでも、相手の人にとって、その人が居てくれるから生きてゆく勇氣が出るという人なら、一緒に暮らすことができる。でも何もかもおぼさってしまっって、甘える一方という人とは続かないと思うよ。あなたが本気で結婚のことを考えるのなら、まず、自分でできそうなことは、人に頼らずにやってゆく覚悟をしなくては。自分のことは自分で考えて決められるようにならなくては……」。

結婚に際して、人と共に何かをするに際して、ここまで思い及ばない人間がなんと多い

ことだろう。

支え合い一つひとり立つとは？

障害を負う人、そうでない人が、共に生きるために「歩みの会」を発足させた寄村さんの言葉は重い。

しまようこ編

『自立の心理学1』

コミュニケーションと自立』

BOC出版部刊 価一、八〇〇円

「自立」をめぐる定型化された図式を、いつもおかしいと思ってきた。経済的・精神的・生活的自立というヤツである。個人のかかえる状況は人間の数だけ違うのに、どうしてこんな簡単な図式でくれるのだろうか、と。これは、しまさんを中心に開かれたへあぐら可能性教室＜心理学クラスの一年にわたる記録である。

学びたいテーマをお互いに手探りしながら、学び方そのものも新たにしていこうというスタイルをとり、自分を語りながら自己に気づき、他者の意見に触発されて自分が広がっていく。その克明な記録を、時に停止させて、しまさんがコメントしているが、この試

みによって奥行きが生じ、いつその知的刺激を受ける。たとえば

——「知的になる」ことは、少なくとも知識をたくさん身につけることと同格ではない。

自分の思考様式を持っていて、それに基づいて外部世界が判断できる力がなければ。ここでは強い意味での経験べったりの発想からもう一歩抜け出せるようなイメージとして「知的」という言葉を用いている——

——思想による連帯がむずかしくなった時代の中で、旗をかげない女たちの思想”を磨くことの意味をあらためて感じる——

各回に用いられた資料が巻末に付されていて、暮らしの一コマ一コマにフェミニズムが根をおろしていくための豊かな手がかりを与えてくれる。

クリストファー・ノーウッド

綿貫礼子・河村宏訳『胎児からの警告』

新評論刊 価二、五〇〇円

「平和研究と女性」というシンポジウムで綿貫さんの言葉に、強く共鳴した。「平和は生

命を抜きにしては語れない。平和と呼ばれる中でジェノサイド（じわじわと起こる死）が起こっている。その中でも特に女の身体を通して起こる将来世代への抑圧を問題にした。世代を超える抑圧関係という概念は、経済学には入ってこないが、女性には見える」と。

この本は、アメリカの科学ジャーナリストが鋭い女目で発した警告を、その緊急性にかきたてられて邦訳されたものである。幼いもの——胎児や子供は、毒性物質や健康上の危険の恐れのあるものに対して、最も感受性鋭い集団である。「彼らが身を犠牲にして絶えず送ってくる『危険信号』を、我々がどう受けとめるか」に視角をおいた環境問題を、八つの項目から取り上げている。

人間は、冒す必要のない危険を冒す唯一の動物だという。なぜ？ なのために？ この問いと共に、いかに私たちが知るべきを知らされていないかに慄然とする。

次の世代に対して、私たちの世代はとんでもない大罪を犯している。その責めを自分につきつけ、ひとりよがりの自立ではなく、幼い生命体を守る責任を、大人共通の課題にしなければ、と心せかされる。



ジョン物語

半田 たつ子

南に大きく開いた居間に続く人工芝の庭。マルチーズの小犬が小首をかしげてこちらを見ている。昨夜お風呂に入り、とかした純白の毛が、夏の光と風にフワフワと匂い立つ。「ジョン！」

一目散に走り寄って、ちぎれるほどしっぽを振る。

「ああ、なんとという幸せ」。ジョンの姿がわが家からかき消えた八日間がうそのようだ。

愛犬ジョン。血統書は引越しの時なくしてしまい、「……フォン……」なる貴族のような長い本名は永久に消えた。「ジョン」が一番ジョンらしいのだからそれでいい。

ベットとくらしした体験なしに大人になった私は、心底から動物好きの夫や娘ほど、犬を飼いたいと思ったことはない。だが、私以外の三人は、お気に入りの動物が出るCMを見るためにテレビのチャンネルを回し、その都度叫び声を挙げるといふ有様だった。

「目鼻立ち」という言葉が納得できるほど、目も鼻もくっきりと愛らしいジョンが、わが家の一員になったのは、八年前の三月。CMやポスターの中のどの犬にも負けぬと私たちは鼻を高くした。どこへ連れて行っても、必ず子供たちは「かわいいっ」と寄ってくる

し、すれ違いざまににっこりする人が多かった。ジョンへの対応で、ひそかな人物判定もやった。ジョンは娘たちの手から手へ、ひざからひざへ。下にも置かぬ扱いに、私は「二人のうちどちらかがジョン物語でも書いて本にしたら」と、半ば本気でからかっていた。

朝七時半に家を出、夜六時半に帰る生活から解放され、家で仕事をしようになった三年前から、俄然私とジョンの距離が縮まった。朝、私たちの寝室で一緒に目ざめ、まず伸びをすることでジョンの一日が始まる。就寝前、トイレのため外に出すと、今度は二階だと階段の下で待つ。私の寝床の足もとに横たわり、ジョンの一日が終わる。その間ヨチヨチ歩き、の赤ん坊のように私の後を追う。

私も、ごみを出すにも、隣に回覧板を届けるにも、ジョンを連れて歩く。郵便局まで行くものなら、ジョンが歩くほどに、飼犬が次々に吠え、にぎやかな散歩となる。毎日の散歩コース、つつじヶ丘公苑の周りには、ジョンお気に入りの雑草が何種類もあって、匂いをかぎ、戯れ、興趣尽きぬ風情だった。

朝九時、心得ていて私のおしりつきをして二階に上がる。ジョンが入るのをしばし待って戸を閉め、今日の仕事が始まるのだ。仕事は大抵机の下にもぐっているが、誰かの来訪をいち早く察知して吠え立てる。ベランダに面した机に向かっている中野さんは、一日に何度もジョンの出入りのために戸のあけたてをする。

私が外出先から帰ってくる時のしやしぎようは違う、とはうれしい話。お客様を見抜いて、犬好きかそうでないか、うさん臭いか信頼できるかで、現金なほど対応を変える。印刷屋さんが見えた時、盛んに二階から吠え立てていたのに、「ジョン！」と声をかけられたらビタリと止まった。自分の名を知っているなら怪しい人物では

ないと思つたのかしら、と笑つてしまつた。

出版社なら、いつかは都心に、と氣負つた日もあつたが、いま全くその氣が失せた。「ジョンのいない仕事場なんて」という氣持ち。世界に一つぐらい人間と共に犬がいる出版社があつてもいい、と思うようになった。事務所はジョンを連れて行けるような近くに、としか考えなくなつた。We 創刊の年、ねこのことを書いていただいたのも、「支え合いつつ……」というようなテーマを考えるのも、もとはジョンとのくらしにある――。

そのジョンが消えた。

八月二日、私たちはフォーラムに持つていくものの荷造りに追われていた。朝は娘も家にいたので、ジョンがいつものように私の後を追わないことを不審に思わなかつた。七つ八つの箱づめをするのに、ジョンがいたら邪魔にもなつたらう。それが、いともスムーズに捗つたのは、ジョンがいなかつたからだ、と、誰も氣づかなかつた。お昼休み、いつものようにトイレのためにジョンを外に出そうとしたが、いない。娘は昼少し前に外出している。愕然とした私たちは、手分けして探し回つた。つつじヶ丘公苑は、隅なく見て回つた。繁みから、白い毛のモクモクが飛び出す瞬間を期待しているというのに、シンと静まり返つて藪蚊がワンワン刺すばかりだつた。

自転車の中野さんには駅前の交番にも寄つてもらつた。道路工事の人に尋ね、あらゆる小路を「ジョン」、「ジョン」と呼びながら歩いた。神隠しに会つたようにジョンの姿は消えてしまつた。

夫に電話し、警察・保健所・動物管理事務所に届け、うろろう歩き回る私の目に、スヤスヤと眠る姿のまま、道端や草むらで息絶えているジョンの姿がしつように浮かんた。何とかつたのだらう。

う。仕事にかまけてジョンのことをすっかり忘れていた。娘がいたことで氣を抜いた。ただ、ただ、私だけが悪い。「支え合いつつ……」だなんて、そんなテーマを掲げる資格は私にはない。

二、三日前から体調を崩していたが、自分の身体どころではない。「キャッツ」のいい席がとれていたのだが、諦めた。ミュージカルどころではない。また、とても見てはいられないだろう……。とうとうがまんできなくなつて病院に行き、帰ると、娘がはずんだ声で電話を受けている。馬場さんと中野さんが階段の途中で身を浮かせている。徒歩で二十五分ほどの交番に、マルチーズを保護しているとのこと。私と娘は宙を飛ぶ。ジョンを連れて、あちこちの電柱にはつた「迷犬」の紙をはがしている私の姿が浮かぶ――しかし、別の犬だつた。うちひしがれて帰る道、身体はいっそう痛み、私はバチだ、もっと痛め、とわが身を責めていた。

そんな中でフォーラムが始まり、終わつた。

チャイムを押せば、玄関に白い影が映り、ちぎれるほど振る尻尾の音がする。ジョン！ ジョン！ と声をかけながら鍵を回す。それがいつもの姿なのに、誰一人いない味気ない家に帰つてきた。

どうしてこれほどさみしいのだろう。死別のほうが諦めがつくのだろうか。納得のいかぬ別れである故に、こんなに辛いのだろうか。そんなことも話し合いながら、十月号にはジョンを書かずにいられないけれど……と、書いている自分を思つて涙した。

八月十日、深夜の電話でジョンは帰つてきた。ミステリーだ。でも詮索はやめよう。ジョンを誘拐したのはかわいかつたから。食べさせた上、帰してくれたのだから。生きていてよかった。生きていたからこそ帰つてきた。生きていくことのありがたさ……。



〈We 山形の会〉

◆七月八日、和田典子・半田たつ子両先生をお迎えして「国際婦人年と教育についてのお話を聞く会」を、We 山形の会一周年記念行事として、高教組はじめ他団体のご協力を得て開催することができました。

午前中は特産のサクラソボ狩り、午後は講演という日程でしたが、雨の中、県内からたくさんの方が集まり、山形にもこのような機会を利用し、学習しようと意欲を燃やす人々があることを改めて知らされました。

和田先生からは、一九七五年の国際婦人年からの各種大会が、何を問題にし、課題としているのか、そして現状に至るまでの積み上げ、状況の変化を、差別撤廃条約を中心に、家庭科の共修問題に至るまで、基本的なところをしっかりと押さえたお話をいただきました。

続いて半田先生からは、国際婦人年が教育に何を及ぼしたかということ、特に家庭科

の問題について話していただきました。家庭科の問題は、単なる一教科の問題ではなく、雇用問題、男女のあり方の問題、そして民主主義そのものを問う、平和な社会をも問うほどの大きな問題なのだと思われました。

講演終了後も、ロビーでは熱心な話し合いが行われ、時間がこれほど足りないと感じたことはありませんでした。数日後聞こえてきた反響の中には「和田先生のお話のあいう基本的なところが知れたかった」とか、「家庭科のことがほんとによくわかった」という声があり、うれしくなっていました。

私たちは、会場に來れなかった方にも講演の内容をビジュアルし、山形でできることを、今だからやれることを続けてゆかなければと、お二人の励ましにも似たお話の会から、二年目に向けて歩みはじめてところです。

（大場広子）

〈We さがみの会〉

◆「どこへ行く？ 教育改革の流れ」―教育と学校をオカミまかせにしないための、父母・教師と市民が集う教育懇談会―と銘うったWe さがみの会は、七月七日、神高教相原分会との共催という形で開かれました。

きっかけの発言はまず、名取弘文さんから、

「学校が笑わなくなってる」「教師っぽさ」をふつることから」で始まる。おもしろ精神にあふれた話しっぷりに、真面目な高校の教師たちははじめ、目を白黒。「親のせい、文部省のせい」にせず、自分たちの学校の中でやれることがいくらかもあるのでは」と村岡小の実践を紹介する頃は、大分頼のこわばりもとれてきた様子でしたが……。

続く長谷川孝さんのお話は、「七つの提言―世界を考える京都座会」「教育問題国民会議中間報告」などときちんと批判するための問題点―現状を否定し、同じ言葉を使っても、企業の論理で貫かれていて私たちの考える教育と違っていること―をわかりやすく整理して下さいました。

この日の参加者は、いつものメンバー十分会の先生十卒業生の土谷さんと安田さん。自己紹介を兼ね、各自の問題意識など語っていく中、地域で農業を営む土谷さんのお話―農業助成金はどこへ？ 最新の機械を買わされ結局は企業へ―に皆耳を傾け、本論を忘れてしまふ、というひとコマもありました。

次回は九月一日。最近メンバーの固定化が悩みの種です。相原高校に集いましょう！

（熊谷祐子）

泉

◆集会「家庭科の男女共修をすすめる会、
男たちが訴える―実現させよう家庭科男女
共修」

家庭科教育検討会議は、今年中に結論を出す。差別撤廃条約批准に照らして、どのような方向を打ち出すか。共修運動もいよいよ大詰め。悔いを千載に残さぬためにも、ぜひ大勢のご参加を！ 家庭科なんて関係ない
"We"から"新しい家庭科"を除いてほしいという方、どうぞ参加して。

・日時 10月27日(土)
PM1時30分～4時30分

・内容 主夫経験者の元中学校長、育時連会員、共修家庭科を学習中の(学習した)中・高校生、卒業生、オール男性からの意見発表、検討会議で共修を訴えて、新しい運動の提案、など

・所 婦選会館(国電新宿駅下車徒歩8分)
03-370-0238)

・問合せ先・ウイ書房

◆パンフレット改訂版「男も女も育児時間

を！」

子どもをかかえてやっとな働いているのに、保護ははぎとり、差別は温存なんていう「機会均等法」に、「労働基準法」「児童扶養手当」の改悪と世の中ますます生きづらくなっている。

ところで、東京都23区は、全国に先がけ、延長保育を実施し始めたけれど、どう思う？ 私たちなんか、今までだって、親子ともども時間と競争みたいな生活で青息吐息。これ以上、生活時間を削るような暮らしはできないなあと不安だよ。だって行き着く先は、親子して心も身体もボロボロになるだけ。やだよ、そんなのー。「現代版女工哀史」だなんて…。私たちは、もっと心豊かに生きたい！そこでどうやったら少しでも豊かにいきいき暮らしていけるかって、私たちも、ない知恵しぼって考えてきた。

でき上がったのが、今度のパンフ。前回のパンフ(好評売り切れ済み)を大幅改訂したもの。「のーびのび、いきいき」生きたいあなたへ贈る私たちのささやかな知恵袋。是非是非読んで、あなたの批判や知恵を私たちにも教えてほしい。

(男も女も育児時間を！連絡会・丹原恒則)

・連絡先 東京都中野区江古田4-17-14
ますのきよし気付 03-385-2293

・一冊 三百円 送料は九冊まで二百円。一〇冊以上は無料。

◆パンフレット「日本における売買春反対活動」

・内容 本年三月東京で開催のESCAP婦人会議出席者に、NGOとして展示・配布するために作成されたもの。「日本娼婦運動小史」「売春防止法」「トルコぶろ」「法体系」「観光買春」「資料」など

・一冊 三百円 送料一七〇円

・申込先 売春問題とりくむ会(新宿区百人町2-23-5 矯風会内)03-3687374

◆講演と映画の会―おもしろ学校九月の会

・日時 9月29日(土)PM1時30分～6時

・内容 映画「みちことオーサ」、話「ガリバー 日本旅行記・犬も歩けば棒に当たる」又重勝彦ほか

・所 すべーす・しょう中野(東京国電中野駅下車徒歩10分) 03-389-0539)

・入場料 五百円

・問合せ先 藤沢市立村岡小学校 名取弘文
0466-26-3291



◆Weの皆様こんにちは！ 私は青

年海外協力隊員として南アメリカのパラグアイで働いています。隊員になる前は、二年と数か月、中学校で家庭科を教えていました。今の私の職種は、生活改良普及員のパラグアイの田舎を回って、野菜の普及とその料理法、栄養、手芸などを教えます。とは言っても、パラグアイに来てまだ四か月。カタコトのスペイン語では十分な仕事はできず、今はパラグアイ人の生活改良普及員の仕事を見て回っています。パラグアイでは、生活改良普及員というのが大変大

きな役割を果たしています。彼女たちは、各地域の農牧普及局に所属して、田舎にいくつかのグループ（十五〜二十歳の女性十主婦）を持っています。そして畑の作り方、料理、三大栄養素、手芸、よりよい生活様式についてなど、家庭科の内容に似たことを教えます。もちろん、水道やガスはありません。青空教室です。広々とした庭で、井戸水を使って料理をします。道具も簡単なものばかりです。例えば、卵白の泡立て、皿とフォークを使って、いとも簡単にやります。たいていどの家もニワトリを飼っていて、とれたての卵です。どうしてフォークだけで簡単に泡立つのか、卵の質が違うのか？ 驚きです。毎日新しい発見で、今は教えることより学ぶことのほうがずっと多いです。

（パラグアイ・木薮弘美）

◆若い友人の鈴木まき子さんが、「武田秀夫さんから手紙もらった

よ」と私を羨しがらせに來ました。昨夜、とうとう武田さんにファンレター出しました。男性にワクワクドキドキしながらファンレターなんか書いたの、何年ぶりでしょう。稲邑さんといつも「武田さんステキ。いいわねエ、ゆっくりお話聞きたい」と話し合うのです。「ぞっこんまいってるの」と私が

言うと、彼女「あたしも——」

雷通信をウイ書房で本になさいませんか。車に乗ってもらいに行く子犬を「きつとかわいいよねエ」と、お父さんに同意を求めのお嬢ちゃん。期待とちよっぴり不安の入りまじった新しい出逢いが、どんなものだったろうかと、私は何度も想像して、胸を熱くしました。

（東京・武末久子）

◆五月中旬、五歳の娘が鎖骨を折って入院。あいにく信頼できない病院に入ってしまったので、六日目、強行退院し、他の病院に移り以来、五日〜一週間ごとに通院し

ています。今度も十字路の切り抜きを手伝っていただいている広瀬直子さんに甘えて、朝彼女のところに預けて、夕方迎えにいくという毎日を送っています。一か月ぐらいは保育園に行けないのです。時には（今日も）、母子共々夕食までごちそうになって帰ってきたりしています。彼女は札幌に來て仕事をしなくても適当な仕事がなく、おつれあいの勤務が時間的に不安定で、仕方なく専業主婦をしているのですが、だからこそ働いている女を支えるという意識が強く、私はそれに甘えて「おんぶにだっこ」です。素晴らしい友達に恵まれていて幸せです。

五、六月号の「高校では、合成洗剤残留実験ⅠⅡ」をコピーさせていただいて、友人たちに見せて歩いています。美唄の消費者協会の伊藤みえ子会長らにも送ろうと思っています。これで又Weの読者がふえてくれたら、との下心もありますが、知りたい情報を得て、

うれしく思っています。

(札幌・高橋芳恵)

◆先日初めて市議会の傍聴に行ってきました。木更津市唯一の革新派の議員で、以前から話をしていましたら、質問事項としていくつが出してもらえということでした。様子を見に行ったわけです。

教育委員会の公開の件、「教育後援会」と称するものの実体、学校給食の問題（合成洗剤、添加物、食器等）、どの内容に対する行政側の答弁も、あまりに認識が遅れているのにあきれてしまいました。合成洗剤に至っては、安全性において「白」であると言っていました。十年以上の後れと驚きました。教育委員会の公開は確認されたので、傍聴したいと思っています。行政側からの何らかの改善変革は全く期待できない限り、市民の横のつながりを地道に作っていく他ないことを痛感しました。

(木更津・木田直子)

◆家庭科の男女共修をすすめる学生の会を、六月二十日に発足させました。第一回目の集いは参加者十名、日本女子大生四名（社会福祉、食物、被服、児童）、卒業生、助手、東京家政大学の学生一名でした。小さな集いでしたが、それがかえってよかったのか、熱のこもった打ちとけた三時間になりました。次回は七月六日です。私たちは家庭科の男女共修について余りにも認識が浅いので、本を読んだり話し合いをしてゆこうというこ

(東京・松原慶)

◆We春の公開ゼミナールには、途中からの参加でしたが、パネルディスカッションには大変感動し、私の身体の中にもエネルギーがあ

ふれてくるような気がしました。テーマが、「管理教育を超えるには」でしたから、どのような展開になるのか、大変興味を持っていました。どの方の御意見も大変前向きですばらしいと思うばかりでした。私の学校もいろいろあります。そんな中で、いつも家庭科の教師であるゆえに当然のように、誰も何の疑問も持たずに、こまごまとした仕事が続いてき

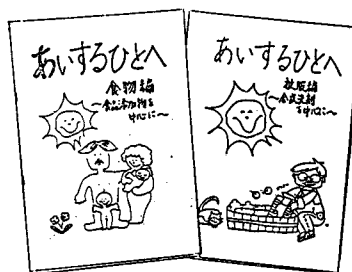
私は特に一年目、不満の塊のようなものでした。先輩の先生方にその疑問をぶつければ「まだ早い」だの「その不満をぐっと押さえて、別のエネルギーに換える」だの、まったく人間が縮こまってゆくようなことばかりを言われていました。しかし、それも一つの考え方かな、と思ったこともあり

た。そんな中で今年は三年目です。三年目の出発の時にふさわしいWeのゼミだったと思います。私もデ

イスカッションの時、発言された方たちのようにがんばってゆきたいと思います。そして、Weを私の生活のエネルギー補給の一つにしてゆきたいと思っています。

同封しました「あいするひとへ」は、私が副教材として作ったものです。

(柏・橋本葉子)



十字路

★愛知・「84なごや」を疑う
会発足

「自立、平等、平和」のテーマが開かれる「日本女性会議84なごや」の主催は、実行委員会と名古屋市と、市教育委員会。

しかし①会議のイニシアチブは全面的に市にある②会議は女性の参加を演出することによって女たちを権力にからめようとしている③問題は、市体制と女の運動の混同にある④会議の目的が不明瞭で、男性支配体制を変える視点を持ち得ない等と「女性会議・なごや」を疑う会」は批判している。

(7月 岡本のり子)

・実効ある男女平等法を、

「女性会議84なごや」の労働分科会は政府・国会あての決議文をまとめた。「基本的人権として働く権利を男女平等に保障する。採用・配置・定年まで、雇用のすべてに差別を禁止する。法違反には罰則つきの救済機関をつくる……」職場での女性差別をめぐって話し合い、仕事も家庭も両立する労働条件を男性とともに追求しようと論議した中から。

(中日、7・24 山田和枝)

★宮城・「性を考える市民の会」発会式

同会は「性情報は街にあふれているが、学校や家庭での正しい性教育は不十分、性教育を真正面から取り上げにくい雰囲気依然在としてある」と。シンポジウムを開催。連絡先長池優生保護相談所(〇二二二一六六〇五三三三)

(朝日、6・22 高橋静子)

★新潟・子どもの祭典

来年夏、佐渡全島を舞台に子どものための一大フェスティバルが開かれることになった。第一回全日本子どものための舞台芸術大祭典「子どもフォーラム21・メルヘンランド」佐渡。佐渡全市町村と県は地元実行委員会を組織、受け入れ態勢をつくる。

(新潟日報、7・26 山口久子)

★千葉・教育の国家統制反対で署名活動

臨教審設置法案など教育三法が国会で審議され、教育改革問題が論議を呼んでいるが、県内在住の大学教授や弁護士らが、教育の国家統制に反対して署名活動を始める。

(毎日、6・9)

・物見遊山やめ体験学習

クラス単位で民宿に泊まって、班ごとに自分たちの研究テーマを検証してきて発表する――船橋市立八木が谷中がこんな修学旅行を

ざして信州・木曽路に出発する。修学旅行のあり方が問われているいま。

(同、6・10)

・親に根深い差別・同和問題

県同和教育推進協議会は、県民約一万二千人を対象に意識調査を行った。結果をみると、教育関係者を含め、部落差別に対する理解が不十分で、とくに子を持つ親の差別意識が根強く、県教委は「児童、生徒だけでなく保護者に対する啓発活動が急務」と受けとめている。

(朝日、7・3)

・緊張の中で生徒集会 浦安中

市教委職員による遅刻生徒の写真撮影をきっかけとして、生徒指導強化に反発し、校長に乱暴した三年生二人が葛南署に逮捕された浦安市立浦安中で全校生徒集会が開かれた。

(毎日、7・6)

・ドブコク裁判

ドブコクをつくり続けたと酒税法違反に問われている前田俊彦さんに対する公判中、弁護側証人、竹内直一さんは、混ぜものの多い劣悪な酒を独占状態で売っているメーカーや税金を効率よく取る酒税法に責任があると、自家用の酒をつくる当然の権利を述べた。

(朝日、7・17)

・おかしな夏季講習

県立木更津東高で予備校の講師・テキストによる進学のための夏季講習会が開かれた。PTAが企画したもの。校長は「PTAに対して学校を貸した」と。(朝日、7・20)

・下総基地騒音で防衛庁

海上自衛隊下総基地での騒音について、周辺住民の申し入れを防衛庁が「門前払い」した問題を衆院決算委員会で新村勝雄委員(社会会)が取り上げた。上田・同庁教育訓練局訓練課長は住民に説明する考えのあることを明らかにした。(毎日、7・21)

・学校給食米から臭素 我孫子

五十三年産の超古米から臭素が検出されたが、我孫子市教委が学校給食用米を調べたところ、臭素が検出された。我孫子消費者の会長は「超古米が混入している証拠、違反行為は社会問題」と。県教委によると給食用は新米に限られ五十三年産米が混入する可能性はないという。(朝日、7・24 木田直子)

★東京・23区内に複式学級

新宿・千代田・中央区では小学校児童数が著しく減少しているが、新宿区の淀橋第二小学校では今年四月から複式学級に踏み切った。三年生五人、四年生三人。「学年単位という

より個別指導」と担任。(毎日、5・22)

・「男女平等」は性教育から 副読本づくり

男女の差別をなくするのは性教育を手がかりにと三鷹市は独自の性教育を小・中学校の正規の教科に取り入れる方針を明らかにした。六十一年度から実践する計画。(同、5・25)

・多摩市の意識調査

同市は婦人問題について市民意識調査をまとめた。結婚観、飲酒、喫煙などについて平等志向がくつきり。中学校の職業教育で、男子には技術、女子には家庭を教えているが、肯定は二割。「一緒に同じものを」が半分もある。(同)

・認可保育所へまっしぐら

武蔵野市には無認可保育所が四か所ある。その一つ「かっぱの家保育所」が認可を請願中のところ、今回初めて市議会厚生委員会が採択した。木崎志づ香所長は「請願採択は大きな前進。目標(認可)に向かってガンバル」と。(読売、6・10 三橋典子)

★神奈川・青丘社十周年

在日韓国・朝鮮人と日本人の子どもたちと一緒に保育するなど民族差別を克服する教育を実践している社会福祉法人青丘社の創立十周年を祝う式典が開かれた。創立のきっかけ

は日立製作所による就職差別裁判。この問題の中で民族性を尊重して共存できる環境をつくる大切さを痛感した人たちが活動を支えてきた。(朝日、6・17)

・横須賀反トマ集会に五千人

横須賀市の臨海公園に、全国で反核・反基地活動を続ける市民団体五千人が集まった。「だれかがしなければ基地は膨らんでいく」「この叫びをやめたら負けです」「闘いはこれから」と。(同、6・18 山口里子)

★大阪・地下街・高層ビル見直せ!

大阪府は自治体では初の高齢化白書をまとめた。地下街や高層ビルなど老人社会に不向きな大都市構造を指摘、「人生八十年」時代への対応を急ぐよう提言した。(読売、7・4 由良サダコ)

★熊本・方言で子供に民話

芦北地方に伝わる民話と伝説を、土地の方言で子供たちに楽しく読んで聞かせようと、芦北郡保育園協会の保母さんたちが、お年寄りからの聞き書きや、資料を集めて本作りに取り組んでいる。年内完成の予定。(熊本日日、6・17 中山そみ)

★「臨教審」法が成立★

中曽根首相が内政の重要課題に掲げる教育改革のための臨時教育審議会設置法案が8月7日、参院本会議で可決された。

骨子は①教育基本法の本質にのっとり、必要な教育の改革を図るため3年間の期限で総理府に審議会を置く②文相の意見を聞いて首相が任命する25人以内の委員で構成、その中から首相が会長を指名する③委員のほか専門委員を置き事務局長には文部事務次官を充てる④首相は答申を国会に報告する⑤首相は委員を任命するときは両院の同意を得なければならない。

同20日、臨時教育審議会の委員25名が、参院議運理事会に提示された。

会長・岡本道雄(前京大学長)、会長代理・石川忠雄(慶大塾長)、同・中山素平(日本興業銀行相談役)、溜昭代(千葉市立園生小教諭)、戸張敦雄(新宿区立戸山中学校長)、有田一寿(社会教育団体振興協議会副会長)、斉藤斗志二(日本青年会議所会頭)、岡野俊一郎(日本オリンピック委員会総務主事)、木村治美(千葉工大教授)、曾野綾子(作家)、小林登(東大教授)、石井威望(東大教授)、香山健一(学習院大教授)、須之部量三(前外務事務次官)、天谷直弘(国際経済交流財団会長)、飯島宗一(名大教授)、堂垣内尚弘(前北海道知事)、水上忠(東京都教育長)、細見卓(海外経済協力基金総裁)、斎藤正(元文部事務次官)、瀬島竜三(伊藤忠相談役)、中内功(ダイエー社長)、金杉秀信(同盟副会長)、宮田義二(鉄鋼労連会長)、内田健三(元共同通信論説委員長)

(毎日、8・7～21付)

★小学校低学年の教科構成見直し★

文部省は、小学校低学年の教科構成を戦後初めて抜本的に見直す基本方針を固め、「小学校低学年教育問題懇談会」を設置、7月20日、第1回会議を開催した。'88年ごろに予定される教育課程の改定に向けて具

体的な検討案作りに着手する。

教育界の「興味や関心が未分化な低学年の児童には、その生活行動や感性に関連の深い内容を総合的に教える方がよい」という声や、昨年11月、第13期中央教育審議会教育内容小委員会のまとめた報告で、具体的に小学校低学年は「国語、算数を中心としながら、既存の教科の改廃を含む再構成をする必要がある」と明言していることなどがきっかけ。

委員一斎藤正(元文部事務次官)、河野重男(お茶の水女子大教授)、奥田真丈(横浜国大教授)、梶田勲一(大阪大助教授)、横山安宏(全国連合小学校長会長、東京・麴町小学校長)ら9人。(朝日、7・20付)

★小中学校で個人差教育★

文部省は8月18日、公立小中学校での個人差に応じた学習指導の実現へ向け、来年度、学識経験者らによる調査研究会を発足させるとともに小中各16校を実験校に指定、個人差教育の試行に踏み切る方針を決めた。

個人差に応じた学習指導については、昨年11月、第13期中教審がまとめた報告で、小学校については「今後、グループ指導、個別指導を取り入れた新しい指導方法の開発を図る」、中学校については「教科によっては習熟の程度に応じた指導を行う」と指摘、同省も「あくまで落ちこぼれ対策に主眼を置いたもの、能力別学級編成とは違う」としている。(毎日、8・19付)

★高校職業教育、多様化を一理・産審★

社会の変化に対応した高校での職業教育のあり方を検討している理科教育・産業教育審議会(文相の諮問機関、'81年1月発足)は6月25日、報告書を発表、年内には最終答申を出す。

職業教育の改善の視点としては①産業経済の変化への対応②生徒の多様な実態に応ずる弾力的措置の推進③柔軟性を備えた職業人の育成④開かれた職業教育の展開の一

4つを指摘。具体的改善策として①福祉科、国際経済科など時代の要請に応じた学科の新設②学科間の枠を超えて科目の履修ができるよう教育課程の多様化③複数の学科を置く集合型職業高校の設置を推進し、専修学校など高校以外の場での履修を認め、それを高校の単位として認定などを提言している。(毎日、6・26付)

★公立高入試多様化を一改善検討会議★

高校入試のあり方を検討していた文部省の高校入試方法改善検討会議(座長、木田宏、国立国語教育研究所長)は6月22日、現在の同一県内同一入試の原則を緩和し、学校や学科に応じて多様化、弾力化することなどを盛り込んだ改革案をまとめた。

具体的には①試験科目や入試結果の評価方法(配点、学力検査と調査書の比重など)は各高校、学科の工夫にゆだねる②受験機会を複数化する③推薦入学を普通科にも拡大などを提言。

文部省はこれを受けて18年ぶりに入試大綱を改正、7月20日、都道府県教委に通達を出した。改革案をどう取り入れていくかは各都道府県教委と高校にゆだねられた形。

(朝日、毎日、6・23、7・21付)

★思考力重視の高校入試“兵庫方式”廃止★

受験一辺倒の中学校教育を正常化させるため、兵庫県教委は中学の調査書と思考力テストを重視する独自の公立高入試を'68年から実施し、兵庫方式と評価されているが、同県教委は8月17日「'86年度から同方式の入試方法をやめる」と発表。県教委の高校入試改善プロジェクトチームがまとめた「公立高入試制度、方法の改善案」の中で明らかにされたもので、兵庫方式も「結果的に生徒の学力低下を招くなど、弊害が出た」と総括されている。

改革案によると英、数、国、理、社の主要5教科による教科別学力テストをこれまで以上に重視、調査書のウエートを他府県並みに扱う方針、基本姿勢として生徒の個性や実力主義をより重視するもので、兵庫県教組は「中学教育を受験準備教育に再び

巻き込み、教育荒廃をさらに深刻なものにする」と反発。(毎日、8・18付)

★風俗営業等取締法改正、成立★

野放し状態の“セックス産業”の規制と少年非行対策を柱とした風俗営業等取締法の改正案が、8月7日成立、来年2月ごろ施行される。改正法は「風俗営業等の規制及び業務の適正化等に関する法律」となり、現行の8条から51条と大幅改正。

改正点は①規制対象が拡大され、風俗営業にゲームセンター、風俗関連営業にトルコぼろ、のぞき劇場、アダルトショップ、ラブホテルなどが盛り込まれ、許可の基準が厳しくなる②各営業所ごとに従業員名簿の備えつけや警察官の立ち入り検査が認められ、業務の報告、資料、帳簿を提出させることができるなど、警察の監督権が強化される③少年の健全育成の名のもとに公安委員会が委嘱する少年指導委員が新設され補導が強化される④全国、各都道府県レベルで1つずつ風俗環境浄化協会が設けられ少年指導委員の活動を助ける——など。

同改正に対し、日弁連などは「改正案は国民の権利と自由を脅かしかねない」と、7月12日、「各界緊急懇談会」を開き反対運動を起こっていた。

(朝日、毎日、7・13、8・8付)

★指紋押なつ反対—韓国で署名運動★

約300万人の信徒を抱える韓国キリスト教会協議会は7月2日、在日韓国人の基本的人権の向上要求と指紋押なつ反対の100万人署名運動を韓国全土で繰り広げると発表。韓国のキリスト教会が在日韓国人の人権問題に本格的に取り組むのは初めて。

同協議会は「日本に居住する外国人はみな指紋を採取することになっているが、日本の社会慣例と制度では、指紋の採取は犯罪者に限り採取することになっているため、在日韓国人に対する指紋の採取は、彼らは違法者(法違反者)として取り扱う人権侵害」と指摘し、居住権や就職差別など生活各分野での差別待遇撤廃を求めている。

(毎日、7・3付)

季節はずれのカタツムリ、ゴメンナサイ！ だって、むつかしいんだ今月のテーマ——。いや、言わんとしていることは、だてに年^{とし}くってないんで、それなりにわかるのだけど（エヘン）、ヒツジでもない。ミミズでもな——。と、ノロノロウロウと数日。結局わからなくてノロノロ云々でカタツムリ。安易といえど安易そのもので、あえて批判は受ける覚悟！。でも、な——に、支え合うのが人間。で、独り立てないのもこれまた人間様ヨ。

★Weバックナンバーのご案内★

〈vol.1〉創刊号いでたちぬ、いま

6月号共に生きる

7月号新しい家庭科とは

8・9月号反戦とは、平和とは

11月号家事労働を問う

12月号家庭・家族

1月号新しい男と女のかかわりを

〈vol.2〉4月号教師は、今こそ声を

6月号はたらくことをめぐって

7月号コミュニケーション

8・9月号老いを考える

10月号今、教科書問題を問う

11月号食べるということ

12月号着るということ

増刊号学校はよみがえり得るか

1月号「1984年」

2・3月号住むということ

〈vol.3〉4月号PTAって何

5月号いまこそ、家庭科を問う

6月号地域に生きる

7月号少年・少女たち

8・9月号“遊ぶ”ということ

◆はじめまして！ もう五年も前になるでしょうか。二歳になった娘をつれて参加した、公民館の婦人セミナーで、初めて半田さんにお会いしました。性差とか母性がテーマだったと思います。話が具体的だったこと、半田さんが自分を語られたということが、新鮮な驚きでした。たまたま家が近かった縁で、お手伝いすることになりました。どうぞよろしく（青木喜代江）

◆ひとり対ひとりのつながりを見つめようと思って、子供が中学生になると旅行することになっている。この夏は次男と鳥海登山を含めた東北旅行。誘いかけから始まって、予定変更や天候急変の中で思ったこと。

◆大人、子供たち約百名が御殿場の東山荘に集った夏季フォーラム。長袖一枚ご用意を”という言葉がうらめしくなる程の暑さ、いや参加者の熱気でした！ 準備を始めたのが二月。実行委員として活躍下さった方々、そして地元御殿場の方々、参加の皆さん、ありがとうございました。

◆夏は地方読者会の季節。七月は山形、さくらんぼ狩はメルヘンの世界。八月は石川。泊めて下さった三石さん・木下さんのお宅で食事の準備後片付けの一切をされるのは素敵な夫君。彼のお友達には私が心をこめておもてなしするのですから”と。これから岐阜・新潟。フォーラムでも美しい人々と出会った。暑い暑い夏が逝く。♥次号は”病むということ”です。（半田）

新しい家庭科—

発行所／（有）ウイ書房

Vol. 3 No. 6 1984年9月20日発行
¥530（年間購読料・増刊号含¥6000）
編集兼発行人／半田たつ子

〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14
☎03(326)1380 振替 東京6—59867
印刷所／（有）岩佐印刷所 〒112 文京区春日1-6-7

引き続きWeの仲間になって下さい Weの仲間をふやして下さい

——Weの取り扱い店一覧—— お近くの書店に、ぜひお声をかけて下さい (8月21日現在)

旭	川	富貴堂 京栄堂書店 いわた書店	えいがさい<葛飾>宏精堂、 中村書店<世田谷>やまべ 書店、江崎書店<練馬>か じか書店、平形書房<北 愛京堂<墨田>業平堂<江 東>文俊堂<品川>シグマ 図書<吉祥寺>ウニタ書 店<目黒>中川書店<三鷹> 第九書房、たべもの村<調 布>みづは書房<武蔵野> 中森書店、<小金井>かご や書店<府中>国府書店 会<国分寺>青野書店 <国立>東海書店<立川>石 井書店、オリオン書房、 泰明堂<小平>和中書店、 松明堂<八王子>くまざわ 南口<清瀬>マルオカ書店、 飯田書店<町田>久美堂 <多摩>くまざわ永山店	竹中書店 中日書房 きたやま書店 丸内書房 青雲堂 文教書店 耕文堂 鈴彦書店 かまくら文庫 活人堂 三浦書店 ケイコウ書林 日進書房 宝島 栗山書店 万松堂 島谷書店 新潟書房 春張書店 慈陽館 稲豊書店 清明堂書店 清文堂 イソップ屋 笠原書店 新光堂書店 牧野書店 うつのみや セールセンター 北国書林 ひまわり書店 じっぷじっぷ 吉川隆文堂 春江書店 品川書店 勝木書店 海光堂 海老山書店 尚古堂 中村書店 旭屋書店本店 紀伊國屋書店 ユーゴー書店 樋口書籍 米原十六堂 藤川書店 学の友 西坂書店 ヒバリヤ 栗林書房 かつらぎ 昌文堂 豊文堂 なににに書店 コーベックス 西武 松香堂書店 オデッサ書房 中島書院	宇	治	大久保京都書院 井田書店 恵文社神足店 宇治書店 住岡書店ジャスコ 流泉書房 ヒカリ書店 日進堂 明文館 文進堂書店 イカロス書房 宣文堂書房 姫路九善 学友書房 弘栄堂 今井MC本店 今井書店 武田書店 やまびこ書店 いづみ書店 アサヒ書店 ニシヤ書店 原山 山口山 白藤書店 去来社 タカハシ書店 雄徳堂徳野書店 依光書店 北九州書店 白石書店 黒崎ひとりおB.C 金文堂 植文館 丸山スコーレ店 江頭書店 菊竹金文堂 日新堂 金華堂 文光堂 好文堂 紅屋書店 高校生協 三章文庫 開書堂 今村書店 幡磨屋書店 スズキ書店 帯広畜産大学、東北大学、 山形大学、福島大学、新潟大 学、群馬大学、宇都宮大学、 茨城大学、埼玉大学、日本女 子大学、東京大学、東京家政 大学、成蹊大学、愛知教育大学、 金沢大学、大阪市立大学、 立命館大学、宮崎大学、高知 大学、琉球大学																																																																																																																																																																																																																							
砂	川	矢野書店 カノウ書店 神田書店 成田本店 東山堂 みみずき書房	江	南	豊	岡	尾	張	旭	戸	南	都	豊	岐	崎	旭	三	浦	書	林	日	進	書	房	宝	島	栗	山	書	店	万	松	堂	島	谷	書	店	新	潟	書	房	春	張	書	店	慈	陽	館	稲	豊	書	店	清	明	堂	書	店	清	文	堂	イ	ソ	ッ	プ	屋	笠	原	書	店	新	光	堂	書	店	牧	野	書	店	う	つ	の	み	や	セ	ー	ル	セ	ン	タ	ー	北	国	書	林	ひ	ま	わ	り	書	店	じ	っ	ぷ	じ	っ	ぷ	吉	川	隆	文	堂	春	江	書	店	品	川	書	店	勝	木	書	店	海	光	堂	海	老	山	書	店	尚	古	堂	中	村	書	店	旭	屋	書	店	本	店	紀	伊	國	屋	書	店	ユ	ー	ゴ	ー	書	店	樋	口	書	籍	米	原	十	六	堂	藤	川	書	店	学	の	友	西	坂	書	店	ヒ	バ	リ	ヤ	栗	林	書	房	か	つ	ら	ぎ	昌	文	堂	豊	文	堂	な	に	に	書	店	コ	ー	ベ	ッ	ク	ス	西	武	松	香	堂	書	店	オ	デ	ッ	サ	書	房	中	島	書	院
花	巻	誠山房 松田書店 こどもの本の店 プーの家 八重洲書房 ボラン 萩書房 高山書店 金港堂 ホビット館 加賀屋書店 八文字屋 岩瀬書店 西沢書店 松文堂 川島朝日堂 アルプス社 近江書店 至誠堂書店 ツルヤB.C 太陽堂 岩瀬書店 須原屋 新井書店 ブックスサトウ 温古堂書店 日野屋書店 もり書店 比企文化社 山屋 前原かっぱ 元山書店 大和屋書店 岡田書店 多田屋 大杉書店 千里堂 原勝書店 <千代田>ピピッ、 日成堂、書肆アクセス、 三省堂本店、書泉グラン デ、東京堂<文京>鈴木 書店、<豊島>池袋書店、 野上書店、紀文堂書店 <杉並>木風舎、新愛書店、 ブラザード書店、たつみ 書房、みどり書房<新宿> 紀伊國屋書店、模索舎、 ブックスミヤ、伊野屋書 店、ジョッキ<渋谷>すぺーす	横	須	賀	川	崎	北	野	書	店	早	川	書	店	ブ	ッ	ク	ス	上	溝	中	村	書	房	た	ら	ば	書	房	大	船	書	房	相	模	書	房	豊	元	書	店	東	松	堂	内	田	屋	書	房	藤	美	堂	ワ	コ	ー	書	店	み	ど	り	書	店	模	本	書	店	文	泉	堂	伊	勢	治	書	店	太	洋	堂	百	野	森	書	店	吉	見	書	店	森	上	書	店	童	心	堂	宮	崎	書	店	あ	つ	み	書	店	谷	島	屋	書	店	遠	州	堂	マ	ル	サ	ン	書	店	文	正	堂	書	店	資	然	堂	書	店	ウ	ニ	タ	書	店	ボ	ラ	ン	の	広	場	日	比	野	泰	文	館	谷	口	正	文	堂	書	店	稲	沢	文	光	堂	白	樺	書	房	西	店	白	揚	書	店																																																								
泉	田	加賀屋書店 八文字屋 岩瀬書店 西沢書店 松文堂 川島朝日堂 アルプス社 近江書店 至誠堂書店 ツルヤB.C 太陽堂 岩瀬書店 須原屋 新井書店 ブックスサトウ 温古堂書店 日野屋書店 もり書店 比企文化社 山屋 前原かっぱ 元山書店 大和屋書店 岡田書店 多田屋 大杉書店 千里堂 原勝書店 <千代田>ピピッ、 日成堂、書肆アクセス、 三省堂本店、書泉グラン デ、東京堂<文京>鈴木 書店、<豊島>池袋書店、 野上書店、紀文堂書店 <杉並>木風舎、新愛書店、 ブラザード書店、たつみ 書房、みどり書房<新宿> 紀伊國屋書店、模索舎、 ブックスミヤ、伊野屋書 店、ジョッキ<渋谷>すぺーす	横	須	賀	川	崎	北	野	書	店	早	川	書	店	ブ	ッ	ク	ス	上	溝	中	村	書	房	た	ら	ば	書	房	大	船	書	房	相	模	書	房	豊	元	書	店	東	松	堂	内	田	屋	書	房	藤	美	堂	ワ	コ	ー	書	店	み	ど	り	書	店	模	本	書	店	文	泉	堂	伊	勢	治	書	店	太	洋	堂	百	野	森	書	店	吉	見	書	店	森	上	書	店	童	心	堂	宮	崎	書	店	あ	つ	み	書	店	谷	島	屋	書	店	遠	州	堂	マ	ル	サ	ン	書	店	文	正	堂	書	店	資	然	堂	書	店	ウ	ニ	タ	書	店	ボ	ラ	ン	の	広	場	日	比	野	泰	文	館	谷	口	正	文	堂	書	店	稲	沢	文	光	堂	白	樺	書	房	西	店	白	揚	書	店																																																								
秋	田	加賀屋書店 八文字屋 岩瀬書店 西沢書店 松文堂 川島朝日堂 アルプス社 近江書店 至誠堂書店 ツルヤB.C 太陽堂 岩瀬書店 須原屋 新井書店 ブックスサトウ 温古堂書店 日野屋書店 もり書店 比企文化社 山屋 前原かっぱ 元山書店 大和屋書店 岡田書店 多田屋 大杉書店 千里堂 原勝書店 <千代田>ピピッ、 日成堂、書肆アクセス、 三省堂本店、書泉グラン デ、東京堂<文京>鈴木 書店、<豊島>池袋書店、 野上書店、紀文堂書店 <杉並>木風舎、新愛書店、 ブラザード書店、たつみ 書房、みどり書房<新宿> 紀伊國屋書店、模索舎、 ブックスミヤ、伊野屋書 店、ジョッキ<渋谷>すぺーす	横	須	賀	川	崎	北	野	書	店	早	川	書	店	ブ	ッ	ク	ス	上	溝	中	村	書	房	た	ら	ば	書	房	大	船	書	房	相	模	書	房	豊	元	書	店	東	松	堂	内	田	屋	書	房	藤	美	堂	ワ	コ	ー	書	店	み	ど	り	書	店	模	本	書	店	文	泉	堂	伊	勢	治	書	店	太	洋	堂	百	野	森	書	店	吉	見	書	店	森	上	書	店	童	心	堂	宮	崎	書	店	あ	つ	み	書	店	谷	島	屋	書	店	遠	州	堂	マ	ル	サ	ン	書	店	文	正	堂	書	店	資	然	堂	書	店	ウ	ニ	タ	書	店	ボ	ラ	ン	の	広	場	日	比	野	泰	文	館	谷	口	正	文	堂	書	店	稲	沢	文	光	堂	白	樺	書	房	西	店	白	揚	書	店																																																								
酒	田	加賀屋書店 八文字屋 岩瀬書店 西沢書店 松文堂 川島朝日堂 アルプス社 近江書店 至誠堂書店 ツルヤB.C 太陽堂 岩瀬書店 須原屋 新井書店 ブックスサトウ 温古堂書店 日野屋書店 もり書店 比企文化社 山屋 前原かっぱ 元山書店 大和屋書店 岡田書店 多田屋 大杉書店 千里堂 原勝書店 <千代田>ピピッ、 日成堂、書肆アクセス、 三省堂本店、書泉グラン デ、東京堂<文京>鈴木 書店、<豊島>池袋書店、 野上書店、紀文堂書店 <杉並>木風舎、新愛書店、 ブラザード書店、たつみ 書房、みどり書房<新宿> 紀伊國屋書店、模索舎、 ブックスミヤ、伊野屋書 店、ジョッキ<渋谷>すぺーす	横	須	賀	川	崎	北	野	書	店	早	川	書	店	ブ	ッ	ク	ス	上	溝	中	村	書	房	た	ら	ば	書	房	大	船	書	房	相	模	書	房	豊	元	書	店	東	松	堂	内	田	屋	書	房	藤	美	堂	ワ	コ	ー	書	店	み	ど	り	書	店	模	本	書	店	文	泉	堂	伊	勢	治	書	店	太	洋	堂	百	野	森	書	店	吉	見	書	店	森	上	書	店	童	心	堂	宮	崎	書	店	あ	つ	み	書	店	谷	島	屋	書	店	遠	州	堂	マ	ル	サ	ン	書	店	文	正	堂	書	店	資	然	堂	書	店	ウ	ニ	タ	書	店	ボ	ラ	ン	の	広	場	日	比	野	泰	文	館	谷	口	正	文	堂	書	店	稲	沢	文	光	堂	白	樺	書	房	西	店	白	揚	書	店																																																								
福	島	岩瀬書店 西沢書店 松文堂 川島朝日堂 アルプス社 近江書店 至誠堂書店 ツルヤB.C 太陽堂 岩瀬書店 須原屋 新井書店 ブックスサトウ 温古堂書店 日野屋書店 もり書店 比企文化社 山屋 前原かっぱ 元山書店 大和屋書店 岡田書店 多田屋 大杉書店 千里堂 原勝書店 <千代田>ピピッ、 日成堂、書肆アクセス、 三省堂本店、書泉グラン デ、東京堂<文京>鈴木 書店、<豊島>池袋書店、 野上書店、紀文堂書店 <杉並>木風舎、新愛書店、 ブラザード書店、たつみ 書房、みどり書房<新宿> 紀伊國屋書店、模索舎、 ブックスミヤ、伊野屋書 店、ジョッキ<渋谷>すぺーす	横	須	賀	川	崎	北	野	書	店	早	川	書	店	ブ	ッ	ク	ス	上	溝	中	村	書	房	た	ら	ば	書	房	大	船	書	房	相	模	書	房	豊	元	書	店	東	松	堂	内	田	屋	書	房	藤	美	堂	ワ	コ	ー	書	店	み	ど	り	書	店	模	本	書	店	文	泉	堂	伊	勢	治	書	店	太	洋	堂	百	野	森	書	店	吉	見	書	店	森	上	書	店	童	心	堂	宮	崎	書	店	あ	つ	み	書	店	谷	島	屋	書	店	遠	州	堂	マ	ル	サ	ン	書	店	文	正	堂	書	店	資	然	堂	書	店	ウ	ニ	タ	書	店	ボ	ラ	ン	の	広	場	日	比	野	泰	文	館	谷	口	正	文	堂	書	店	稲	沢	文	光	堂	白	樺	書	房	西	店	白	揚	書	店																																																								
郡	山	川島朝日堂 アルプス社 近江書店 至誠堂書店 ツルヤB.C 太陽堂 岩瀬書店 須原屋 新井書店 ブックスサトウ 温古堂書店 日野屋書店 もり書店 比企文化社 山屋 前原かっぱ 元山書店 大和屋書店 岡田書店 多田屋 大杉書店 千里堂 原勝書店 <千代田>ピピッ、 日成堂、書肆アクセス、 三省堂本店、書泉グラン デ、東京堂<文京>鈴木 書店、<豊島>池袋書店、 野上書店、紀文堂書店 <杉並>木風舎、新愛書店、 ブラザード書店、たつみ 書房、みどり書房<新宿> 紀伊國屋書店、模索舎、 ブックスミヤ、伊野屋書 店、ジョッキ<渋谷>すぺーす	横	須	賀	川	崎	北	野	書	店	早	川	書	店	ブ	ッ	ク	ス	上	溝	中	村	書	房	た	ら	ば	書	房	大	船	書	房	相	模	書	房	豊	元	書	店	東	松	堂	内	田	屋	書	房	藤	美	堂	ワ	コ	ー	書	店	み	ど	り	書	店	模	本	書	店	文	泉	堂	伊	勢	治	書	店	太	洋	堂	百	野	森	書	店	吉	見	書	店	森	上	書	店	童	心	堂	宮	崎	書	店	あ	つ	み	書	店	谷	島	屋	書	店	遠	州	堂	マ	ル	サ	ン	書	店	文	正	堂	書	店	資	然	堂	書	店	ウ	ニ	タ	書	店	ボ	ラ	ン	の	広	場	日	比	野	泰	文	館	谷	口	正	文	堂	書	店	稲	沢	文	光	堂	白	樺	書	房	西	店	白	揚	書	店																																																								
藤	岡	川島朝日堂 アルプス社 近江書店 至誠堂書店 ツルヤB.C 太陽堂 岩瀬書店 須原屋 新井書店 ブックスサトウ 温古堂書店 日野屋書店 もり書店 比企文化社 山屋 前原かっぱ 元山書店 大和屋書店 岡田書店 多田屋 大杉書店 千里堂 原勝書店 <千代田>ピピッ、 日成堂、書肆アクセス、 三省堂本店、書泉グラン デ、東京堂<文京>鈴木 書店、<豊島>池袋書店、 野上書店、紀文堂書店 <杉並>木風舎、新愛書店、 ブラザード書店、たつみ 書房、みどり書房<新宿> 紀伊國屋書店、模索舎、 ブックスミヤ、伊野屋書 店、ジョッキ<渋谷>すぺーす	横	須	賀	川	崎	北	野	書	店	早	川	書	店	ブ	ッ	ク	ス	上	溝	中	村	書	房	た	ら	ば	書	房	大	船	書	房	相	模	書	房	豊	元	書	店	東	松	堂	内	田	屋	書	房	藤	美	堂	ワ	コ	ー	書	店	み	ど	り	書	店	模	本	書	店	文	泉	堂	伊	勢	治	書	店	太	洋	堂	百	野	森	書	店	吉	見	書	店	森	上	書	店	童	心	堂	宮	崎	書	店	あ	つ	み	書	店	谷	島	屋	書	店	遠	州	堂	マ	ル	サ	ン	書	店	文	正	堂	書	店	資	然	堂	書	店	ウ	ニ	タ	書	店	ボ	ラ	ン	の	広	場	日	比	野	泰	文	館	谷	口	正	文	堂	書	店	稲	沢	文	光	堂	白	樺	書	房	西	店	白	揚	書	店																																																								
前	橋	アルプス社 近江書店 至誠堂書店 ツルヤB.C 太陽堂 岩瀬書店 須原屋 新井書店 ブックスサトウ 温古堂書店 日野屋書店 もり書店 比企文化社 山屋 前原かっぱ 元山書店 大和屋書店 岡田書店 多田屋 大杉書店 千里堂 原勝書店 <千代田>ピピッ、 日成堂、書肆アクセス、 三省堂本店、書泉グラン デ、東京堂<文京>鈴木 書店、<豊島>池袋書店、 野上書店、紀文堂書店 <杉並>木風舎、新愛書店、 ブラザード書店、たつみ 書房、みどり書房<新宿> 紀伊國屋書店、模索舎、 ブックスミヤ、伊野屋書 店、ジョッキ<渋谷>すぺーす	横	須	賀	川	崎	北	野	書	店	早	川	書	店	ブ	ッ	ク	ス	上	溝	中	村	書	房	た	ら	ば	書	房	大	船	書	房	相	模	書	房	豊	元	書	店	東	松	堂	内	田	屋	書	房	藤	美	堂	ワ	コ	ー	書	店	み	ど	り	書	店																																																																																																																																																															